

# 鹿兒島県史料

玉里島津家  
史料 十

## 解題

本巻は第九巻に続き追加三一号文書以下同一七七号文書までを収め、以下に補輯文書を収めた。あるいは例言と重複するかも知れないが、少しこれについて説明しておく。元來この『玉里島津家史料』は、目録には文書総数三二九八点（本編三一七、号外四、追加一七七）が掲げられているが、その中に「なし」として欠落文書二一七点があることが分かっていた。それぞれの文書はすべて封筒に入れてあり、欠落分というのは封筒だけあって中身の無いものである。ただその封筒の表書から、それに収められた文書の主題はほぼ想像がつくのである。そしてその欠落文書はすべて本編部分のものであった。一応それをそのままにして、これまで本編部分すべての刊行を終えたのであるが、その段階で事務当局において同文書収蔵庫を丹念に調査された。ところがその結果欠落文書二一七点のうち一三四点の原文書が発見された。

さらに既刊の『斉彬公史料』『忠義公史料』『久光公実紀』及び『島津家書簡集』『南部弥八郎報告関係文書』（原本）「旧邦秘録」など、島津家関係の史料集を検索した結果、以上とは別に欠落分に相当すると思われる文書が新たに発見された。その結果は凡そ次のようである。

- 1、新たに発見された原文書点数 一三四点
- 2、他の史料集などで確認された文書点数 三一点
- 3、完全な欠落文書 五一点（南部報告）二八点、不明二三点

ということ、完全に欠落してその内容が分からない文書は二三点となった。

なぜこんな事が起こったのかを推測するに、おそらく『斉彬公史料』『忠義公史料』『久光公実紀』などの編纂、あるいは『島津久光公』（高島弥太郎著、昭和十二年）などの著述に際してこの史料を借用利用し、それが済んだ時点で返却されたものの、その期間が相当長かったとすれば、しかもすでに玉里島津家の担当者が代わっていたりすれば、その整理の方法を十分心得なかったりで、別の場所に置いたという事も考えられ、それがこのような事態を招いたのではなからうか。それを推測させる実例に次のような事がある。

『忠義公史料』慶応元年十二月六日付の、桂久武が出張先の京都から国元の側役島津求馬らに出した文書である。この本文と全く同文の文書が『玉里島津家史料』一四四八号文書である。ところが『忠義公史料』にある尚々書と追而書が、肝心の『玉里島津家史料』の方にはなくて、本文だけが掲げられている。だから一時これは返却されないで失われたのかと思っていた。ところが第九巻編集集中に、この失われたと思っていた尚々書などが、同じ『玉里島津家史料』の別の部分に二九三六号文書として単独で入っていることが分かった。しかしこれには別の標題がついていた。すなわち『玉里島津家史料』には、本文と尚々書・追而書はばらばらになって収録されていた訳である。しかも『玉里島津家史料』での日付は十二月二十六日である。『桂久武日記』（鹿兒島県史料集）26）によると桂は同年十二月六日鹿兒島を出発しており、日記の内容とこの文書の内容とからみて日付は二十六日が正しく、『忠義公史料』の六日という日付は誤りであることが分かる。この日付は写し間違いかも知れないが、『玉里島津家史料』に本文と尚々書が別々に収録された理由を考えるに、恐らく『忠義公史料』編集の際に玉里島津家から借り出された本文書が、後日返還された時には別々に返還したか、同時に多数の文書と共に返還されたために、受け取った側が整理する時に誤って別々に整理した

か、のどちらかであろう。主題の問題からすると、文書貸出しがあった事は確実で、その返却に際していろいろ手違いがあったり、幾らかは行方不明になった可能性もあるということではなからうか。

この外『斉彬公史料』には斉彬から久光への書簡十通すべてが、『島津久光公』には安政四年八月二十六日の一通以外九通すべてが全文掲載されている。しかし、肝心の『玉里島津家史料』の目録には「なし」と記されていた。それを当時の担当者が別の場所に置かれていた文書を発見して編集したものである。これは前述の通り、前記史料の編纂著述に際して借り出され、返還後別の場所に保管されたことを示すもので、その後の取り扱いにいろいろ齟齬が出たということであろう。

以前の解題でも書いたように、基本的史料集と考えられていた『忠義公史料』は写し文が多く、それに反してこの『玉里島津家史料』は原文を収めており、史料の性質からいうと後者の方が質的には程度が高いと言えるのである。しかし前記のように他の史料編纂や著述にあたり貸出しが行われ、その後始末に不備があつて、相当数の原文書が現在行方不明になっているというところであろう。残念なことであり、よき教訓として十分注意すべきことである。

ところで本巻史料は一種の補遺であるので、年代は飛び飛びでまとまりがなく、したがって内容的にもまとまっていない。そこでその中から二、三注目すべきものを取り上げて参考に供しよう。先ず注目すべき白眉は補輯文書三五号の「斉興公ヨリ久光公へノ密書」である。出された日付は嘉永四年正月二十九日で、この日は斉興が幕府に隠居の届けを出した日であり、また国元への定例の御使便（式日御使）が出る日である。月二回出る時代もあつたようであるが、このころは大体月末二十九日に江戸から鹿児島へ、鹿児島から江戸への定期便が、同じ日に出ていたようである。だから斉興は隠居届けを出した直後、定期便に間に合わせようと「大急ぎ書きちらし」て、「極密」すなわち至極こっそりと

知らせたのである。だからこの用紙を見ると、上下それぞれ五ミリ幅ぐらいの朱線で縁取りがされている。「要注意」の印であろう。文書内容の概要は、隠居願を出し登城もすんで代替わりが決まったこと、だが今後も今までと変わりはないと心得ること、これを機会に藩内が動揺することのないように注意せよとし、それについて自分の見た斉彬の性格を列挙して知らせたものである。問題はこの斉彬観である。

先ず自分と違って疑り深く探索する癖があるとか、いろいろな事が漏れやすいという。嘉永朋党事件（高崎崩れ・近藤崩れ・お由羅騒動などという）直前、斉彬は弘化四年六月国元に転動する数奇屋頭山口不及を隠密に任命して、琉球に來たフランス・イギリスなどの動きをはじめ、家老調所広郷一派の動きを、事実であろうとうわざである構いなくすべて知らせよと、探索報告を求めた。この直前アヘン戦争の結果を背景に仏英兩國は琉球に開国を求め、これが拒否されると宣教師を上陸滞在させて船は退帆するという事件が起こり、その対策を講ずるため斉彬が代理帰国したが、實際の対策は斉彬抜きで処理されて、これに斉彬は強い不満を持っていた。したがって国元における調所派の動きを探るために隠密を任命したのである。その時側役の山崎拾に、山口を隠密に任命した事は側近の茶道頭重久玄碩や側室すまにも知らせるなど命じている。こうして山口をはじめ国元の反調所派すなわち斉彬支持派の同志との間に、頻繁な密書の往復が始まった。しかしこれは一年ばかり後調所派に感づかれた。そこで今度は休暇で帰国する伊集院兼直を密書の取次役に変えた。こうして朋党事件発生までの約二年半の間に、斉彬と国元有志との間を往復した密書の総数は推計九十通を越え、百通になんなんとする多さである。しかも山口の動きは調所派に感づかれたという。だとするとこの事は当然斉興にも報告されているはずである。こういう事を背景にした斉興の見方であろう。

また斉彬は勇気が無く、肝っ玉が小さいという感想が述べられている。琉球事件で調所が警備兵を琉球に派遣しなが

ら、特に問題も起こらず平穩であつた事から、こつそり兵力を減少して幕府には報告しなかつた事がある。斉彬はこれが幕府に分かつたら大変なことになるかと心配していた。その後イギリス船などが度々やってきて、琉球に開国を要求した事も一々幕府に報告しなかつた。これらを斉彬は非常に気にしていた。このような事が勇氣が無いとか、小胆とかいう認識になったのかも知れない。また無用の物好きというのも、蘭学好みのうえに写真機を熱心に取り扱つたりなどした事をそう言ったのであろうか。

また玉里別邸の工事（補修工事であらう）が終わるまでは帰国しない、しかし終わり次第帰国する意思を表明している。斉興が言明している事は重要である。実は斉彬は斉興が帰国するのではないかと心配して、その後いろいろ老中阿部正弘に手を回すなどして、結局斉興の帰国をとどめるのである。結局斉興は斉彬在世中は帰国しなかつた。いや帰国できなかったというべきかも知れない。それにしても斉興の直筆で斉彬に対する考えを表明したものは、これまで一つも知られていなかった。高崎崩れにしても知られる史料はすべて斉彬周辺のものだけで、斉興や調所一党の人のものは全く無かつた。その意味においてもこの文書は貴重な一通である。

それと共に補輯一七号の「重豪公以来ノ財政整理ト調所笑左衛門ノ功績」が収録されている事も、『斉彬公史料』はともかく『忠義公史料』に比べても目立つ大きな違いであらう。一般に薩摩藩天保財政改革については、正規の藩政史料には余り収録されていない。藩達などわずかのものは収録されているが、あれだけの大事業にしては極めて寂しい。幕末維新の鹿児島藩および同県の政治権力が、反調所派の精忠組に掌握されていたという事情からであらう。

なお同六七号「菊地源吾ヨリ大久保・税所へ」はすでに、『西郷隆盛全集』第三巻の補遺の部に収録されているが、本書で安政六年とされているものが、万延元年と訂正されている。内容から見て万延元年が正しからう。その他同じく

補輯一八四一号の西郷書簡はこれまで全く知られていないもので、その意味では新史料である。

なお西郷に関するものとして追加一五五号「市来四郎日記抄」の中で、明治十九年六月十六日の条に、文久元年末西郷を大島から呼び返した時の話がある（帰着は翌二年二月）。玉里邸で久光が市来らに話した内容であるが、久光が西郷を呼び出して話をした時のこと、西郷が久光に「御前ニハ恐レナガラ地ゴロ」だから、公武周旋は無理だと言ったという話が記されている。これについて市来は「別冊親話記ニ記スルガ如ク詳ニ御説明下サレ」たとある。西郷は率直にいうか、飾らず話す人だったようだから、「地ゴロ」発言も悪意のある発言とは思わず、敢えて軽蔑したつもりはなかったのかも知れない。しかし田舎者を意味するこの言葉、そして西郷の言う通り、久光は京都・江戸の地を全く踏んだ事のない田舎者であることは事実である。斉彬は江戸生まれ江戸育ちであか抜けがしていたらう。その斉彬を神のごとき存在として畏敬していた西郷にとって、久光は正しく田舎者である。しかも鹿児島ではそのような地ごろを軽くみる傾向はある。だからそのことを直接面と向かって、しかも軽輩の西郷から言われた時の久光の気持を察すると、恐らく殿様育ちの久光にとっては生涯、後にも前にも初めて受けた言葉であらうから、そのショックは大きかったのではなからうか。だからこの言葉は生涯忘れなかつたであらう。

なお同三〇八一号に「備前岡山ヨリ養子ノ儀ニ付茂久公ノ御断リ状」というのがあるが、これについて尚古集成館所蔵の久光書簡（本史料補遺編に収録予定）に、これに関連する文書がある。それによると岡山池田家から養子縁組を申し込まれたが、久光の判断では親戚関係が広がっても必ずしも島津家の助けにならない。だからこれは断れ。その断り状を書いて送るからそれを清書してこちらに送れというものである。本書に収めたのは父久光からきたものを忠義が清書して送ったもので、久光は国元からこういう風に言ってきたのでお断りしますと、これを断りの材料に使ったもので

ある。古来島津家は多くの大名などと縁戚関係を結んだ。だから現在たくさん縁戚大名がいる訳であるが、いま久光が国事に奔走しようとしている時、ではこれらの大名が縁戚だからと助力荷担してくれるかというところ、全くそういうことにはならない公算が大である。久光としては考えた。ただ物入りだけで、肝心要の時に何の力にもなってくれない。そういう縁戚づくりはもう御免だということであろう。一方諸大名にしてみれば、島津家と幕府の関係が親密である時は、島津家の利用価値は大いにあった。しかし両者が対立関係になると、さあ幕府を取るか、島津家を取るか、決断を迫られる。それぞれの大名は幕府とも古くからの曰く因縁がある。しかも幕府の持つ権力を考えると、その選択は非常にむずかしい。例えば土佐山内家の場合、久光の姉智鏡院（豊信Ⅱ容堂の養母）が嫁いでいたが、容堂の態度は久光に全面協力という状態にはならないだろう。山内家は徳川家とも藩祖以来の因縁があつて、簡単にはいかない。すなわちどの大名でも幕府と島津家が対立関係になると、簡単に島津家に肩入れする訳にいかないであろう。久光もそれを見越すと、この縁組は物入りのデメリットこそあれ、メリット無しと判断したのであろう。

この事から安政六年十一月、いわゆる精（誠）忠組突出事件のとき、新米の藩主忠義が突出組に直筆の論書を与えるが、この文面は恐らく久光が原案を書いたものであろう。彼らを「精忠士」と呼び、斉彬の遺志を継いでいづれ立ち上がるぞ、その時は国家の柱石となつてオレを助けよという発想、安政期に最下級士たちにこのような発想でよびかける大名が他におつただろうか。本来殿様修行をしていない数え年二十歳の忠義の発想と考えるより、斉彬が勝海舟に大きな信頼感を持つて紹介した久光の発想ととらえる方が妥当ではなからうか。この推測を助ける意味において、実はこの岡山事件の文書は非常に貴重な文書である。

追加一四八号に「久光公東京鹿尾島往復日記」がある。すでに本文書第一巻の解題で、簡単な久光年譜を入れておい



たが、明治九年の帰国月日は不明であった。また一、二誤りもある。そこで重複の感もあるが、久光の生涯における上京、帰国年月日を一覧表にして、便宜に供する。考えると久光の活動の大きな特長は、すべて京都・江戸でのそれだと言っても過言ではない。だからその時期だけをまとめて一覧表にしておけば、その利用価値は大きいと思われる。

第一回目 文久二年三月十六日鹿兒島発〜四月十三日伏見着〜四月十七日入京

同年五月二十二日京都発〜六月七日江戸着

同年八月二十一日江戸発〜閏八月七日京都着

同年閏八月二十三日京都発〜九月七日帰着

第二回目 文久三年三月四日鹿兒島発〜三月十四日京都着

同年三月十八日京都発〜四月十一日帰着

第三回目 文久三年九月十二日鹿兒島発〜十月三日京都着

元治元年四月十八日京都発〜五月八日帰着

第四回目 慶応三年三月二十五日鹿兒島発〜四月十二日京都着

慶応三年八月十五日京都発〜九月十五日大坂発〜九月二十一日帰着

第五回目 明治二年二月二十六日鹿兒島発〜三月二日京都着

明治二年三月十三日京都発〜三月二十一日帰着（異説二十二日）

第六回目 明治六年四月十七日鹿兒島発〜四月二十三日東京着

明治七年二月十四日東京発〜二月二十日帰着

第七回目 明治七年四月十五日鹿児島着 四月二十一日東京着

明治九年四月五日東京発 四月七日神戸着 十一日神戸発 十三日帰着

以上であるが、これに関し第三回目に関するものとして「久光公上京日録」上下（本史料二収録）、第四回目について「久光公自記上京日録」（本史料第一六二八号文書、本史料五収録）がある。第七回目帰国については前記の通りで、その中の「相良量右衛門日記」が参考になる。

なおこれらの玉里文書は一号箱から五号箱に収蔵されているが、最後の五号箱には通し番号三一七号までの文書の他に追加文書や軸もの仕立の文書などが入っており、その他に御心願一卷および琉球異国船関係の書類等が入っていた。しかもこれについて次のような「覚」が添えられていた。すなわち

覚

一 御心願一卷書抜一冊

一 琉球江致来着候異国船関係書二冊

右合テ三冊近日於骨董店見当申候付、御大切成御帳留与奉存奉献候也、

明治十八年十一月廿三日

三原経世

というものである。

御心願というのは、天保十五年から島津斉興が幕府に提出した、従三位昇進願関係書類という意味である。ここに集められたものは天保十五年五月七日を初見に、嘉永元年十月十七日まで六回にわたる昇進願書である。島津家の官位は四位止まりで三位までですんだのは家久と重豪の二人であった。それを斉興は自分ほど長く藩主を務めたものは島津家

にもいないとして、在位四十一年（天保十五年）とするが、これは何かの勘違いで当時はまだ在位三十六年である。それはともかくその他広大院の由緒もあるからという。事実將軍家夫人（御台所）は三代家光以来すべて京都の皇族公卿から迎えていて、御台所は京都からというのが慣例になっていた。それが十一代將軍家齊夫人に初めて武家それも島津家から茂姫（広大院）がはいった。これは長い慣例を破る革命的なことであった。それを主張しこれにあやかりたいというのが斉興の魂胆である。しかし生憎広大院も天保十五年死去、斉興の念願はなかなか実現しない。その内にお由羅騒動が起こる。その責任を問われて斉興隠居が強要される。いったんそれを承諾した斉興は従三位昇進実現後に隠居願を出すといって、隠居を遅らせようとするなどのトラブルが起こるが、やっと隠居願を出して斉彬就封が実現するのであるが、それに関連する書類である。その昇進が実現するのは、斉彬の養女篤姫（天璋院）が希有な二人目の武家からの御台所として、十三代將軍家定の夫人となって一年後の安政四年、出願からまさに約十五年目である。広大院の存在を理由に昇進を願ひ、天璋院の威力で実現したことになる。

また琉球関係とはフランス・イギリスが弘化三年から琉球に来て開国を要求する一件で、これに関係する書類で、それも薩摩藩から幕府に出した書類の控えといふべきものである。両者ともまさに三原のいうように薩摩藩にとつての重要書類である。それが骨董屋にあつたという。だから本来これらは玉里家にあつた史料ではない。三原がなぜこれを玉里島津家に寄贈したのかを考えると、明治十八年といへば久光在世中で、しかも盛んに史料収集や編集を行つていたころであつた。だから久光の手に差し上げた方がよいと判断したものであろう。その意味で本史料集に入つたと考えられる。貴重な史料である。

さらに別に、鳥羽伏見戦争の戦況を各隊から藩庁に提出した戦闘報告一巻が加わっている。開戦の発端をつくつた五

番隊・六番隊をはじめ、一番隊から十二番隊、白砲隊、一・二番大砲隊、一〜三番遊撃隊、外城一〜四番隊、私領一・二番隊、足輕隊および本営役所からのものである。最後に記された二月の御用部屋の記述によると、各隊の小隊長や監軍が、藩主面前に呼ばれて戦闘の状況を報告し、その翌日この報告書を提出したのだとある。全部の隊が各隊ごとに報告しており、その戦闘状況と共に、その戦闘中における戦死傷者の名前などもすべて分かる貴重な史料といふべきであろう。ただこれは前の史料を見つけた三原のものとは全く別だと思われ、そうでありながら保管の仕方から本来の玉里史料とも別系統のものと思われる。

(芳 即 正)

## 例 言

一本書は、島津忠廣氏所蔵「玉里島津家文書」（昭和四十七年八月十日黎明館寄託史料）を底本とし、これを「鹿児島県史料 玉里島津家史料」の第十巻として刊行するものである。収録史料は追加文書三一号から一七七号までの一四七点、正編本文未収載文書のうち新出の補編文書一三四点、及び参考文書三一点である。

一史料の配列は、玉里島津家で作られた文書目録番号による編年順である。

一文書名については、玉里島津家で整理された名称にしたがった。

一文書番号についても、玉里島津家で整理された番号にしたがった。但し、数種の内容に分かれる場合には、小番号を付した。

一本巻末には、原文書は未確認であるが、既刊諸書に確認される補編該当文書を参考文書として収め、末尾に出典を明記した。

刊行に当って、文書の体裁をおおよそ次のように統一した。

一字体は原則として常用漢字を用いた。

一仮名は、底本の体裁にしたがった。変体仮名は仮名に改めたが、江・茂・而はそのまま用いた。

一平出・擡頭・闕字および但書は、原則として底本の体裁にしたがった。闕字は一字分あけとした。

一目録に記載されてはいるが、文書の存在が確認されないものには史料番号の頭に○を付した。

一原注は、底本の体裁に従い括弧を付さず、新たに注を付す場合には、（ ）で囲んで原注と区別した。

一人名および地名については、適宜傍注を付した。

一文書・記事には適宜に読点「、」および並列点「・」を付した。

一文書の年月日、差出、宛所の位置などは、底本の体裁にしたがい、ある程度の統一をした。

一文書書の不明・抹消・訂正などを表現するため、欠所部は、その部分を□で囲み、底本の状態に応じ、(虫損)・(磨滅)・(破損)と傍注した。字数の推定できる場合は□で示し、推定できないものは□で示した。

一文意の通じない字または箇所には、(ママ)・(衍力)・(○○カ)と傍注を付した。  
一ルビは底本にあるもののみ付した。

一朱書部分は(朱)と頭注し、その箇所を「」で囲んだ。

一合点は、頭または右肩に「1」で示した。

一花押はすべて収載した。

一各文書・記事の末に原寸を記した。但し、文書原寸(折紙)と記したものは折った状態の大きさを示す。

一既刊の「鹿児島県史料」と重複する文書については、既刊史料名および文書番号を付した。

一封紙・包紙の封じ目は、底本の体裁にしたがい、「メ」「封」「緘」の区別をし、印章は、□○で輪郭を模し、朱印は(朱)と注を付した。また印文の判読できるものは「」で記した。

一本文以外の部分は、「」をつけ、その位置によって(端書)・(端裏書)・(端裏朱書)・(端裏銘)・(封紙ウワ書)を付した。

一文書に付属する付箋・貼紙・付札・付紙・封紙・包紙などの文字は、右肩に(付箋)などと傍注した。

目次

邊三	文久三年十一月	浪士取締ニ付左京有志ヨリ薩藩ヘノ建言	一
邊三	文久三年(?)十二月七日	福永直之丞ノ攘夷ニ付久光公ヘノ献言	二
邊三	文久三年十二月晦日	綿船事件ニ付土持平八ヨリ藩庁ヘノ届書	六
邊四	文久三年	中川宮(?)ヘノ宸翰 男山八幡行幸ノ件	三
邊五	元治元年二月十二日	上村直兵衛ノ献策 久光公ノ命ニ応ジテ	四
邊五	元治元年二月十三日	左近允嘉右衛門ノ献策 久光公ノ命ニ応ジテ	六
邊六	元治元年二月十四日	門松市兵衛ノ献策 久光公ノ命ニ応ジテ	九
邊七	元治元年二月十五日	市田隼人ヨリ国家ノ大事建言 久光公ノ命ヲ拝シテ	三
邊八	元治元年二月十五日	穆佐郷士中村敬介献策 久光公ノ命ニ応ジテ	三
邊九	元治元年二月廿二日	福永直之丞ノ献策 久光公ノ命ニ応ジテ	六
邊四〇	元治元年二月	川上勘解由ノ献策 久光公ノ命ニ応ジテ	三
邊四一	元治元年二月	新納清之丞ノ献策 久光公ノ命ヲ拝シテ	三
邊四二	元治元年二月	森喜藤太献策 久光公ノ命ニ応ジテ	三

邊加四	元治元年二月	園田彦五郎獻策 久光公ノ命ニ応シテ……………	三七
邊加五	元治元年二月	御徒目付伊集院甚助ノ建言 京都ニテ國家ノ大事ヲ建言セ ヨトノ久光公ノ命ヲ拜シテ……………	三〇
邊加六	元治元年三月七日	大政委任ニ付將軍ノ奉命……………	三三
邊加七	元治元年五月、六月朔日	本田源吾ヨリ久光公ヘノ建言 造士館振興ノ件……………	三三
邊加八	元治元年(?)	今藤新左衛門ノ国防守戰論 久光公ヘノ上書……………	三三
邊加九	慶応元年正月廿五日	久光公ヨリ參觀交代復旧ニ付幕府ヘノ建白……………	三七
邊加〇	慶応元年五月	將軍進発御用掛前衛後衛一覽……………	四〇
邊加一	慶応元年八月	栗原又楽(信充)官位令ノ冠位講義等……………	四一
邊加二	慶応元年十二月	在京諸大名參内日割仰出書……………	四九
邊加三	慶応二年十月廿日	松平備前守家来ヨリ朝廷ヘノ伺ニ対スル指令……………	五〇
邊加四	慶応二年十月廿五日	諸藩上京ノ朝命追加……………	五〇
邊加五	慶応三年正月九日、廿五日	八田喜左衛門ヨリ松浦市郎兵衛長年ヘ 忠久公及丹後局ニ関スル質議……………	五〇
邊加六	慶応三年三月五日	京都ニテ長州ヨリ幕閣ヘ提出ノ歎願書……………	五三
邊加七	慶応三年四月	処士大野綱之介ヨリ久光公ヘノ願書 薩藩ヘノ召抱ヲ請フ……………	五五
邊加八	慶応三年五月	山階宮御書留 久光公ヘ……………	五七
邊加九	慶応三年六月一日	山階宮ヨリ久光公ヘノ国事御相談……………	五八
邊加〇	慶応三年七月十八日	谷村小吉(昌武)ヨリ松浦長年ヘノ礼状 忠久公ノ御美父ニ就テ……………	五九



追加六	慶応三年十月十四日	薩長へ討幕ノ密勅其他	二二
追加三	慶応三年十月廿一日	外国、長防、五卿処置ニ付薩土芸三藩ノ奉答	二四
追加三	慶応三年十月廿七日	慶喜二条城ニ於テ將軍職辞退ノ発表	二七
追加四	慶応三年十二月廿二日	幕府ヨリハケ条ノ伺ニ対スル朝廷ノ指令	二七
追加五	慶応三年(?)	筑前藩奸臣処罰ノ人名罪名	二八
追加六	明治元年正月二日 元日	徳川軍ノ京都伏見鳥羽方面ニ於ケル配備 瀧川播磨守所持	二八
追加七	明治元年正月三日 三日	鳥羽伏見開戦以來ノ戦況 薩軍死傷者	三〇
追加六	明治元年正月五日	鳥羽伏見ノ戦ニ於ケル薩軍人数届書	三五
追加九	明治元年正月	下参与等任命及其他ノ件	三六
追加七	明治元年二月七日	島津忠義公日向国旧幕領支配ノ件	三三
追加七	明治元年二月	大中小藩ヨリ徴士貢士拔擢ノ件	三四
追加七	明治元年二月	江戸城攻撃中止ニ付徳川慶喜ノ歎願書	三四
追加七	明治元年三月	江戸城明渡条件書 久光公手写	三六
追加七	明治元年三月	備前外国人一件等簡条書	三六
追加五	明治元年閏四月廿二日	明治新政府ニ於ケル議定以下位官姓名名書	三九
追加六	明治元年四月	久光公手写上国事状 二月十一日薩摩少将ヨリ十万石返献上奏 三月右ニ付朝廷ヨリ指令	三三
追加七	明治元年五月	忠義公へノ東国鎮定御沙汰書	三八

邊六	明治元年五月	大倉鋳三郎ヨリ東京府知事大久保一翁ヘノ願書 旧幕臣石川勅負復祿ノ件	一七
邊七	明治元年六月廿七日	岩下佐次右衛門ヨリ西郷吉之助ヘ 越後口戦況及奥羽征討画ニ付	一七
邊八〇	明治元年七月十二日	越後口戦況 帖佐彦七ヨリ島津求馬ヘ 養田伝兵衛桂右衛門ヨリ二之丸御小納戸ヘ	一八
邊八一	明治二年十一月	鹿兒島犬迫村庄屋宮之原孫右衛門願書 同村拝借地下附ノ件	一八
邊八二	明治二年十二月十八日	上町下町両町人ヨリ藩庁ヘノ歎願書 物価騰貴、住宅欠乏ニ付	一九
邊八三	明治二年	各府県職制一覽表	一九
邊八四	明治三年正月	深見休八ヨリ藩庁ヘノ願書 武士ノ無刀一刀禁止ニ付	一九
邊八五	明治三年(?)三月	和田八之進ヨリ久光公ヘノ建言副書 但シ建言本書ナシ	一九
邊八六	明治三年七月及八月	普仏戦争記事	一九
邊八七	明治四年四月	久保藤之進ヨリ知政所ヘノ願書 俸祿米高利貸借ノ弊改正ノ件	二〇
邊八八	明治四年六月十三日	授読助池端拙藏ヨリ知政所ヘノ建言 附士ヲ公然士族ニ編入ノ件	二〇
邊八九	明治四年?	穎娃郷校師員池田一助 <small>藤原ヨリ久光公ヘノ建言</small> 公ノ上京献策ヲ望ム	二〇
邊九〇	明治五年八月十六日	故北白川宮智成親王行状	二〇
邊九一	明治六年四月上浣	久光公ノ安井息軒著「弁妄」序 「弁妄」印刷物訂正ノ事	二〇
邊九二	明治六年五月十五日	齋藤貞藏ヨリ久光公ヘノ建言 奸臣ノ譎謀ニ就テ	二一
邊九三	明治六年五月十八日	真砂野良貴ヨリ久光公ヘノ建言 公ノ上京ヲ賀シ時弊ノ匡救ヲ望ム	二二
邊九四	明治六年五月廿六日	齋藤貞藏ヨリ久光公ヘノ建言 浅田宗伯推挙、小民ノ困窮救助	二三

邊五	明治六年五月	大倉鋳三郎ヨリ久光公へノ願書 旧幕臣石川初負復祿ノ件	三六
邊六	明治六年五月	茨城県士族 鈴木大ヨリ久光公へノ建白	三八
邊七	明治六年五月	元水戸藩教部中録	三九
邊八	明治六年五月	筑摩県士族斎藤貞蔵(簡)ヨリ久光公へノ建白 天下ノ匡救ヲ望ム	三三
邊九	明治六年旧八月廿五日	佐々木真兵衛ヨリ菊地助右衛門へ 旧藩士中不穩分子ノ件	三四
邊一〇	明治六年十月十一日	小松弘毅ノ征韓論民選議院論 久光公へ	三六
邊一一	明治六年十月廿一日	安田轍蔵ヨリ久光公へノ言上 岩倉右府三条相國代理拜命	三七
邊一二	明治六年十月	西郷等ノ勇退帰耕ヲ罵倒スルノ文(無名氏)	三七
邊一三	明治六年(?)十一月十一日	中里敬愛ヨリ久光公へノ金錢借用願	三九
邊一四	明治六年十二月	佐賀土田中海山(好彝)ヨリ久光公へノ内願上書 公ノ動靜伺ニ付並ニ道ヲ問フノ件 時弊救済論	三〇
邊一五	明治六年十二月	東府府下漢方医一同ヨリ久光公へノ建白 漢科医復興ノ件	三六
邊一六	明治六年(?)	久光公建白書提出使者ノ件	三七
邊一七	明治六年以降	海軍擴張十八ヶ年計画	三七
邊一八	明治七年二月	田中海山ヨリ久光公西下ノ随行内願 佐賀暴動ニ付	三三
邊一九	明治七年四月	名東県権大講義松浦長年覚書 島津忠久公ニ就テ 其他自著相添	三四
邊二〇	明治七年四月廿七日	太政官ヨリ久光公へノ国事通牒 但シ通牒本文ナシ	三六
邊二一	明治七年五月一日	名東県権大講義松浦長年ノ内院へノ内願	三六
邊二二	明治七年五月五日	九鬼隆都ヨリ久光公ノ左大臣任命ノ賀状	三九

邊二	明治七年五月八日	九鬼隆都ヨリ久光公へ 毎朝天照皇大神三唱其他ノ件	三〇
邊三	明治七年五月十二日	九鬼隆都ヨリ左府公へノ建言 華族ノ冠頭トシテ奮起ヲ望ム	三一
邊四	明治七年五月十六日	布治婦一ヨリ左府公へノ願書	三二
邊五	明治七年(五月?)	浅田宗伯惟常ヨリ左府公へノ建言 朝令暮改ノ弊ニ付	三三
邊六	明治七年六月五日	中野龍明等ヨリ教院並附屬社名廃止反対抗議 伊東長壽等へ	三四
邊七	明治七年(?)六月廿二日	土方久元ヨリ左府公へ 探偵書写ノ件	三五
邊八	明治七年六月廿七日	華族会館事業變更ニ付久光公へノ通牒 松平嵯峨両卿ヨリ	三六
邊九	明治七年六月	大倉鎧三郎ヨリ東京府知事大久保一翁へノ願書 旧幕臣石川勲負復祿ノ件 和歌添	三七
邊一〇	明治七年六月	二見正則ヨリ左府公へノ建言 時弊匡救ニ付	三八
邊一一	明治七年七月五日	齋藤貞藏(簡)ヨリ左府公へノ建言 奸臣黜斥ノ件	三九
邊一二	明治七年七月七日	安田轍藏ヨリ左府公へノ上申 板垣前參議ノ忠誠	四〇
邊一三	明治七年七月十八日	齋藤貞藏ヨリ左府公へノ建言 浅田宗伯ヲ推挙ス	四一
邊一四	明治七年八月	青森県士族佐々成家ヨリ左府公へノ建言 政府改革ノ英断ニ付	四二
邊一五	明治七年九月五日	横山貞彦ヨリ松方正義へ 支那内情ニ付	四三
邊一六	明治七年九月十九日	征台事件ニ付無名氏ヨリ久光公へノ建言 取次者添書共	四四
邊一七	明治七年九月廿日	高知県士族仙頭孤桐ヨリ左府公へノ建言 清國トノ和戰問題	四五
邊一八	明治七年十月二日	山本復一ヨリ安田轍藏へ 支那事變報告	四六

邊三	明治七年十月廿六日	田中海山ヨリ左府公へノ内願 公ノ動靜伺ニ付	三六
邊三〇	明治七年(?)	海軍擴張論(筆者不明)	三七
邊三	明治八年二月三日	田上一英ヨリ久光公へノ建言 大臣一和ノ件	三九
邊三	明治八年三月十九日	秋田県士族小松弘毅ヨリ海江田信義へ 九経衍義ヲ左府公ノ御覽ニ供スルノ件	三九
邊三	明治八年(?)三月	熊谷県士族大島亨ノ時事慷慨意見 久光公ノ左右へ	四〇
邊三	明治八年三月下旬	旧秋月藩士吉田一貫斎ヨリ伊集院九郎へ 久光公西郷大久保ト不和ノ風聞ニ付	四三
邊三	明治八年(?)四月七日	浅田宗伯ヨリ斎藤先生へ 久光公ノ近状ヲ問フ	四四
邊三	明治八年(?)四月十五日	琉球藩王尚泰ヨリ島津忠義公へノ願書 对清問題藩制等旧ニ依ルノ訴願	四五
邊三	明治八年六月	勝姫様御容体書(黒木清盈)	四六
邊三	明治八年七月五日	元老院開院式次	四七
邊三	明治八年七月廿日	琉球藩制改革ニ付在琉富川親方等ヨリ在外高安親方へノ通牒	四七
邊三	明治八年八月廿一日	田中某ヨリ左府公へノ建言 三大臣協力輔弼ノ件	四八
邊三	明治八年十月四日	朝鮮江華島事件ニ付木戸孝允ヨリ三条相国へ	五一
邊三	明治八年十月十六日	九鬼隆都ヨリ左府公へ 聖上華族会館へ臨幸ノ件	五一
邊三	明治八年十月廿九日	九鬼隆都ヨリ久光公へ 左大臣辭職ニ付驚愕	五一
邊三	明治八年 月四日	岩倉右府ヨリ久光公ノ使者へノ返答 三大臣一体同心其他	五二
邊三	明治八年(?)	三公ト参議ト議席ヲ異ニスルノ建議	五三

邊一四	明治八年	左大臣熾仁親王以下參議諸省卿氏名	三〇七
邊一四	明治九年一月	久光公退官後ノ動靜ニ付田中海山ノ伺書	三〇八
邊一四	明治九年四月	久光公東京鹿兒島往復日記 相良量右衛門私記	三〇九
邊一四	明治十年一月廿二日	税所仲五等ノ西郷党動靜探索書	三〇〇
邊一五	明治十二年十一月廿七日	吹上御苑ニ於ケル犬追物天覽諸組人名	三〇二
邊一五	明治十三年四月廿一日	詠進歌詩ニ付徳大寺宮内卿ヨリ久光公ヘノ通達 歌、初雪。詩、冬晴驟暄	三〇三
邊一五	明治十五年一月	郷友会設立及規則役員	三〇五
邊一五	明治十五年五月九日	阿多郷士族西田経真ヨリ久光公ヘノ三策献言	三〇六
邊一五	明治十五年五月十八日	鹿兒島県士族旧持高地所券状下附ニ付政府ヘノ請願	三〇三
邊一五	明治十九年六月十五日ヨリ十八日ニ至ル	市来四郎日記抄 久光公ヨリ旧邦秘録ノ命名其他	三〇三
邊一五	年代不明(安政初年?)	齊彬公(?) 出馬御備人数書	三〇五
邊一五	明治何年(?)	皇基保護憲法制定ノ件	三〇八
邊一五	明治何年(?) 九月一日	安田轍蔵ヨリ浜町邸弘下出願ノ件	三〇九
邊一五	(年代不明) 二月十八日	曆者勤水問喜藤太「御移徙吉日撰定」上申	三〇〇
邊一六	(年代不明) 六月廿九日	江戸堅山八郎ヨリ京都小松帯刀ヘノ暑中見舞	三〇〇
邊一六	(年代不明) 七月廿八日	九鬼隆都ヨリ久光公ヘ 源頼朝真像入覽ノ件	三〇二
邊一六	(年代不明)	和漢兵卒ノ年齢、旗、貝、太鼓役等ノ件	三〇三

編輯文書

湯六三	(年代不明)	京都公卿実名書	三三三
湯六四	(年代不明)	御陵修補ニ付戸田越前守ヨリ幕府ヘノ建言	三三三
湯六五	(年代不明)	日本全国地図枚数覚書(久光公)	三三六
湯六六	(年代不明)	詩人中島稷隠ニ付	三三六
湯六七	(年代不明)	伊勢神宮以下奉献米記録	三四六
湯六八	(年代不明)	三瀨県権令岡村義昌免官ノ件	三四六
湯六九	(年代不明)	和歌一首(読人不知)	三四三
湯七〇	(年代不明)	大砲ノ種類利鈍ニ付取調書 附劍銃切下ノ件	三四三
湯七一	(年代不明)	日向国諸県郡本庄村古墳発掘品図解	三四三
湯七二	(年代不明)	窮士救助士気振興ニ付大番頭等ヨリ建言	三四三
湯七三	(年代不明)	久光公ヘ献上ノ「筆」一本	三四三
湯七四	(年代不明)	大和国南部五郡村高帳	三四三
湯七五		不要書類。断片等一括(一)	三四七
湯七六		不要書類。断片。封筒等一括(二)	三四九
湯七七	(年代不明)	烈公及藤田東湖手翰	三四九

- 六 文政六年十月廿八日及廿九日
  - 七 文政七年二月廿七日
  - 八 文政(八年)正月
  - 九 文政(八年)三月
  - 一〇 文政(八年)四月  
同 年十一月
  - 一一 文政(八年)
  - 一二 文政(八年)十一月
  - 一三 文政(八年)十一月
  - 一四 天保十年(?)三月
  - 一五 天保十二年十月
  - 一六 天保十三年記
  - 一七 弘化四年四月十三日
  - 一八 弘化元年ヨリ  
嘉永元年ニ至ル
  - 一九 弘化元年ヨリ  
嘉永元年ニ至ル
  - 二〇 嘉永元年ニ至ル
  - 二一 嘉永四年正月廿九日
  - 二二 嘉永四年二月(?)
  - 二三 嘉永四年三月
  - 二四 嘉永四年五月十六日
- 
- 中西十郎左衛門ト吉井七之丞トノ相互書翰 童舞抄云々ノ件……………五五
  - 賢童院ヨリ普之進公ヘノ年始状ノ返書……………五五
  - 又次郎殿重富家ヘノ移転御用掛任命……………五八
  - 普之進殿種子島家養子離縁ノ件……………五八
  - 普之進、又次郎ト改名仰出……………五七
  - 重富家島津出雲智養子仰出……………五七
  - 又次郎殿ヘノ文庫其他御品覚書……………五七
  - 又次郎殿重富家智養子ニ付待遇ノ件……………五八
  - 斉興公ヨリ家老ヘノ論書及家老ノ副書布達 財政困難ニ付非常節儉ノ件……………五八
  - 大慈院薨去ニ付近衛忠熙公郁姫君ノ悼歌……………五八
  - 重豪公以来ノ財政整理ト調所笑左衛門ノ功績……………五五
  - 文武精励風俗矯正ノ子弟教育ニ付斉興公ノ論書及家老ノ副書令達……………五九
  - 仏英船琉球来着届書……………五三
  - 斉興公御心願一卷書抜……………五二
  - 斉興公ヨリ久光公ヘノ密書 斉興公隠退ニ付……………五七
  - 斉彬公襲封ニ付家老以下ヘノ論書……………五九
  - 家老ヨリ一門方ヘノ通達 斉彬公仰出ニ付……………五九
  - 斉彬公ノ論書ニ付家老ヨリ大身分其他ヘノ伝達……………五九



完	嘉永(四年)十月十八日 同 年十一月廿九日	久光公ヨリ斉興公ヘノ願書 斉興公ヨリ久光公ヘノ返書 久光公ノ第二子右近養子ノ件	六〇
五	安政二年正月	斉興斉彬二公ヘ下賜ノ御製	六一
五	安政三年	斉興公ノ文武奨励士風振興論達	六二
六	安政四年十月七日	斉彬公文武奨励ノ論書及家老ノ副書	六三
六	安政五年五月九日	万里小路博房卿ヨリ小松帯刀ヘ 哲丸君ニ付黒田清綱建言	六六
六	安政六年五月廿五日	菊池源吾ヨリ大久保税所ヘ	六七
六	安政六年十月廿八日	襲封ニ付茂久公ヨリ家老ヘノ論書 家老ヨリ一門及役々ヘノ伝達	六八
七	安政六年以来	久光公関係ノ御書付類目錄	六九
七	文久元年十二月	久光茂久二公ヘ下賜ノ御製	六七
七	文久二年四月廿四日	短刀御下賜勅書写	六七
七	同 四月廿五日	近衛忠房卿添書	六七
七	文久二年五月十一日	近衛忠房卿ヨリ久光公ヘ 三郎ト改名ノ件	六九
七	文久二年六月十六日	一橋越前任命ニ付久光公ヨリ脇坂中務大輔ヘノ書	六九
七	文久二年八月十九日	久光公ヨリ幕府ヘノ国是要目二十余条ノ建言	六九
八	文久二年八月	生麦事件ニ付晃親王ノ詠詩	六九
八	文久二年九月晦日	久光公上京召命ノ御沙汰書	六九
八	文久二年十月朔日	近衛閑白ヨリ久光公ヘノ書翰	六九
八	文久二年十月	有馬新七等処罰ニ付久光公ヨリ家老ヘノ口達	六九

四四	文久二年十二月十一日	西之宮中山次左衛門ヨリ京都小松帶刀へ	江戸姫君帰国ノ途次播州辺巡覽ノ件	三三
四四	文久二年以來	久光公御官位御任叙ニ付口宣々旨其他御書付類現書御引讓之目錄		三六
四九	文久三年二月(?)	英艦來襲ニ備フル久光公ノ論書		三六
五〇	文久三年三月九日	学習院開筵ト学則		三六
五〇	文久三年三月十一日	中山中左衛門書翰	攘夷御親征ノ件	三六
五二	文久三年四月廿三日	尹宮へノ密宸翰		三六
五三	文久三年四月廿四日	尹宮ノ奉答書		三六
五三	文久三年五月十二日	尹宮ヨリ久光公へノ書翰	國家ノ為尽力ヲ望ム	三六
五三	文久三年五月十五日	進藤式部權少輔ヨリ小松帶刀へ		三六
五三	文久三年五月三十日	近衛忠潤卿ヨリ島津久光公へ	公ノ上京ヲ促ス	三六
五三	文久三年五月晦日	久光公へノ宸翰	上京周旋ノ勅命	三六
五三	文久三年五月晦日	尹宮ヨリ久光公へ	御内勅書ノ伝達	三六
五三	文久三年(?)六月八日	小松帶刀書翰	祇園祭ノ事	三五
五三	文久三年七月中旬	久光公へノ宸翰	上京猶予ノ御沙汰	三六
五三	文久三年七月	久光公上京猶予ノ御沙汰書		三六
五三	文久三年八月廿日	七卿ノ官位褫奪其他ノ朝譴		三六
五三	文久三年八月廿四日	内田仲之助ヨリ京撰狀況報告		三六

六四	文久三年八月廿七日	七卿西走、大和騒動報告	六五
六五	文久三年八月	英艦再襲ニ備フル久光公ノ諭書	六五
六六	文久三年十月廿八日	近衛忠熙忠房兩卿へノ宸翰 三条実美ノ風説ニ付	六五
六七	文久三年十月廿九日	近衛忠熙忠房兩卿ヨリ久光公へノ書翰 三条実美ノ風説ニ付	六五
六八	文久三年十一月十五日	久光公へノ宸翰	六五
六九	文久三年十一月廿六日	久光公ノ奉答書	六六〇
七〇	文久三年(?)十一月	山内容堂公ヨリ島津久光公へ 薩藩ノ尽力ヲ求ム	六六五
七一	文久三年十二月三日	尹宮へノ宸翰。及写。久光公ヨリ尹宮へノ復書	六六六
七二	元治元年正月十四日	久光公從四位下叙位制記一卷	六六九
七三	元治元年正月十四日	久光公從四位下叙位口宣案及左近衛權少將口宣案及宣旨等	六七二
七四	元治元年正月十四日	久光公ニ対スル朝議参予從四位下左近衛權少將宣下	六七三
七五	元治元年正月十七日	薩英戦争ニ付久光公へ賞賜ノ御沙汰書	六七三
七六	元治元年二月一日	久光公大隅守兼任口宣案其他	六七三
七七	元治元年二月十六日	幕府ヨリ久光公へノ令達及書添 御用部屋へ出頭ノ件	六七四
七八	元治元年二月廿二日	將軍ヨリ鞍置馬下賜ノ辞令書	六七四
七九	元治元年二月	横浜鎮港ニ付久光公ヨリ閣老へノ意見書	六七五
八〇	元治元年四月十一日	左近衛權中將昇任口宣案	六七七

一〇七	元治元年四月	久光公官位昇進ニ対スル献上金明細書	六六一
一〇五	元治元年六月朔日	將軍ヨリ久光公へ下賜ノ鞍置馬覚書	六八三
一〇五	元治元年六月朔日	朝廷ヨリ久光公へ下賜ノ鞍置馬覚書	六八四
一〇五	元治元年六月朔日	久光公官位推任叙ニ付女房奉書	六八五
一〇六	元治元年六月十七日	久光公官位昇進ニ付女房奉書	六八六
一〇五	元治元年七月九日	小松帶刀書翰 京都及江戸ノ状況	六八六
一〇四	元治元年十月八日	小松帶刀ヨリ(桂右衛門へ?) 長州征伐ノ件	六八九
一〇六	元治元年(?)十一月十一日	近衛忠房卿ヨリ久光公へ 町田内膳ヨリ文書奉行へ 朝廷へノ献品ニ就テ	六九〇
一〇三	元治元年十二月二十日	新納次郎四郎ヨリ桂小三郎へ 軍艦買入ノ件	六九一
一〇五	慶応元年正月	久光公ヨリ参觀復旧ニ付朝廷へノ伺書	六九二
一〇四	慶応二年(?)八月十二日	高崎友愛ヨリ中山大久保へ 横浜鎮港ト外交	六九四
一〇二	慶応二年十一月十二日	小松帶刀ヨリ桂右衛門へ 久光公上京ノ時機ニ非サル件	六九五
一〇四	慶応三年(?)十月十一日	西郷吉之助ヨリ(大久保へ?) 忠義公出兵上京ノ件	六九七
一〇六	慶応三年(?)十月十三日	西郷吉之助ヨリ大久保へ 討幕密勸ノ件?	六九七
一〇六	明治元年(?)一月四日	鷲尾隆聚書翰 辞表提出ノ件	六九八
一〇九	慶応四戊辰歲	從正月三日 鳥羽伏見方面追討大略	六九八
一〇七	明治元年(?)二月廿一日	至同 六日 桂右衛門ヨリ小松帶刀へ 乾行丸ノ件	七〇〇

一七五	明治元年三月十五日	養田伝兵衛ヨリ小松帯刀へ 久光公ノ御病状等	七三
一八八	明治二年三月六日	久光公従三位参議兼左近衛権中将宣下	七三
一八二	明治二年三月	久光公へノ御沙汰書	七三
一八三	明治二年(?)四月十四日	岩倉具視卿書翰 忠義公東上ノ件	七三
一八七	明治二年四月廿九日	奥平操一ヨリ小松帯刀へ	七四
一八六	明治二年六月	久光公従二位権大納言宣下	七五
一八四	明治二年九月廿四日	西郷ヨリ大久保へ 岩倉勅使下向	七五
一八五	明治二年十二月十四日	大久保一藏ヨリ桂右衛門へ 孝明天皇御祭典	七五
一八三	明治三年(?)正月十二日	□□貞助ヨリ小松帯刀ノ病氣見舞	七七
一八六	明治四年七月	廃藩置県ニ付久光公へノ上申 桂、大山綱良等ノ意中ニ就テ	七七
一七一	明治六年(?)二月九日	松平慶永ヨリ久光公へ 公ノ上京建言ヲ促ス	七六
一九九	明治六年三月廿五日	久光公へ桜田邸下賜ノ御沙汰	七九
一九八	明治六年四月廿八日	久光公宮中車寄迄 <small>乗車</small> 許可ノ御沙汰	七九
二〇六	明治六年五月二日	久光公参朝御沙汰	七九
二〇三	明治六年五月十日	久光公へノ国事諮詢ト麿香間祇候拜命	七四〇
二〇五	明治六年五月十日	皇后宮御誕辰ニ付久光公御召	七四〇
二〇九	明治六年五月十五日	久光公正院へ出仕ノ御沙汰	七四〇

二〇〇	明治六年五月	東京ニ於テ久光公ノ告諭 御筆	七四二
二〇七	明治六年七月八日	皇城炎上ニ付久光忠義二公ヨリ献金ノ件	七四一
二〇七	明治六年十月十四日(?)	岩倉具視卿ヨリ大久保利通へ(?)	七四三
二一三	明治七年一月九日	久光公辞職願	七四三
二一三	同 一月十二日	三条太政大臣ヨリ不許可ノ指令	七四三
二一八	明治七年一月	久光公再辞職願草案	七四三
二二一	明治七年二月十四日	久光公履歴書提出ノ件	七四三
二三〇	明治七年四月廿七日	久光公御召ノ件	七四三
二三五	明治七年五月十五日	久光公へ外国公使接待費等下賜ノ件	七四四
二三七	明治七年六月三日	久光公へ外国公使接待費等下賜ノ件	七四四
二三八	明治七年(?)六月廿二日	三条太政大臣ヨリ大久保利通へ 参朝面会ノ件	七四四
二四四	明治七年(?)十月廿四日	三条実美卿ヨリ久光公へ	七四四
二四四	明治七年十一月三日	天長節ニ付久光公へノ御下賜品	七四四
二四六	明治七年(?)十一月廿九日	大原重徳卿ヨリ島津久光公へ	七四五
二五五	明治八年(?)一月二日	三条実美卿ヨリ久光公へ(?) 海軍指揮命令ノ件	七四六
二五九	明治八年二月三日	三条相国ヨリ木戸召命ニ付大久保へ(?)	七四六
二五九	明治八年(?)五月廿三日	岩倉右府ヨリ島津左府公へ(?)	七四六
二七三	明治九年三月廿五日	池田慶徳ヨリ久光公へノ礼状 久光公ノ和歌共	七四七

参考文献書

三三 嘉永三年十二月三日

齊興公隱退御決意一件 朱衣肩衝茶入下賜

七六

二七四 明治九年三月廿五日

晃親王ヨリ久光公へノ時候御見舞 御写真(六十一歳)添

七六

二七五 明治九年四月四日

池田慶徳ヨリ久光公へ 公ノ出発帰国ニ付挨拶

七六

二七六 明治十一年一月四日

京都晃親王ヨリ久光公へノ年賀状

七六

二七八 明治十一年三月廿七日到着

鉾山技師独逸人「パウル、ヲヂエル」ノ名刺 東京浜町島津三郎君行

七六

二八〇 明治十二年六月十七日

久光公正二位陞叙記

七六

二八二 明治十三年一月二日

京都晃親王ヨリ久光公へノ年賀状

七六

二八三 明治十三年七月九日

島津忠義公ヨリ悦之助殿へ忠字及久字使用許可ノ件

七六

二八四 明治十四年一月三日

京都山階宮晃親王ヨリ久光公へノ年賀状 戊辰役追懐

七六

二八五 明治十七年三月六日

明治六年皇城炎上献金ニ付久光公へ金盃下賜賞状

七六

二八六 明治二十年九月廿一日

久光公從一位陞叙位記

七六

二八七 明治二十年九月廿九日

海防費献金ニ付久光公へノ褒章授与記

七六

二八八 (年代不明)

備前岡山ヨリ養子ノ儀ニ付茂久公ノ御断り状

七六

二八九 (年代不明)

又次郎殿(久光公)登城ノ件

七六

二九〇 (年代不明)

松原正二位書翰

七六

二九一 (年代不明)

本之瀬河原ニ於ケル訓練御覧人数

一番ヨリ四番迄人数合二千六百七十四人野戦砲十挺

七六

七	安政五年七月十五日夜	山田壮右衛門へ斉彬公ノ御遺言	七二
七	安政五年七月廿二日	島津周防公ヨリ新納駿河へ	七三
六	安政六年三月	太守ヨリ久光公待遇ノ件	七四
九	安政六年十月廿二日	周防公ヨリ新納駿河へ 島津豊後退役ノ件	七四
一〇	文久元年三月	久光公藩政輔佐ノ件	七五
一〇	文久元年四月	久光公宗家へ復帰ノ件	七五
二	文久元年(?)	真木和泉ノ義挙計画	七六
一四	文久二年三月	茂久公ヨリ久光公ニノ丸御住居ノ通達	七〇
一四	文久二年三月	久光公東上ニ際シ藩士へノ訓諭	七一
一五	文久二年三月	久光公ヨリ藩士へノ諭達	七一
一五	文久二年四月十日	酒井所司代ヨリ議伝両奏へノ届書	七一
一三	文久二年四月	久光公京都滞在ノ勅書	七一
一四	文久二年四月	右勅書拜見ニ付茂久公ノ仰出	七一
二三	文久二年五月(?)	大坂ニ於テ久光公ノ訓令	七一
二三	文久二年九月	幕府ヨリ茂久公へノ御沙汰書 刀一口下賜	七一
三三	文久三年三月	茂久公ヨリ幕府へノ請書	七三
三三	文久三年三月	久光公後見職許可ノ幕命	七三
六六	文久三年七月廿五日	茂久公ヨリ英艦ノ襲来ニ備フベキ訓諭	七三
		村上銀右衛門書翰 下之関ニテ幕船砲撃ノ件	七三



六三	文久三年八月	久光茂久両公ヨリ第二薩英戦争ニ備フベキ訓諭	七四
六九	元治元年二月	久光公ヨリ撰海防禦建言ノ論達	七四
七二	元治元年七月	禁門ノ戦ニ関スル朝廷ノ褒賞	七六
七三	元治元年八月	禁門ノ戦ニ付幕府ヨリノ褒賞	七六
七四	元治元年八月	禁門ノ戦ニ付一橋慶喜ヨリ茂久公ヘノ感状	七七
七五	明治元年二月	政事改革ノ朝命	七七
七六	明治元年三月	五箇条ノ御誓文 総裁等ノ奉答	七七
七七	明治元年三月	御親征ノ勅語	七八
七八	明治元年三月	億兆撫安ノ御宸翰 総裁等ノ副書	七八
八〇	明治二年六月	久光忠義二公官位昇進賞典禄十万石下賜	七八
八一	明治二年八月	忠義公賞典禄半額返還ノ許可	七八
八二	明治二年十一月	久光忠義二公ニ対シ賞典禄及官位返還不許可	八〇
八三	明治四年九月十日	久光公分家ノ朝命	八二
八四	慶応二年	安田轍藏意書 錢札引替 鑄錢処置	八二
特別解題	『玉里島津家史料』概観と編纂論評	一	八五

邊三 浪士取締ニ付左京有志ヨリ薩藩へノ建言

(表紙)  
「上言」

草莽之賤民国家長大之事件を論し候義、何共恐懼之至ニ御座候得共、輦下ニ居住仕候而且暮見聞ニ触候義ニ御座候間、慨歎ニ不堪多罪不願言上仕候、当今東西諸州ニ脱藩脱走之士民追々有之候風聞承知仕、何共歎息之義と奉存候、

幕府を始奉り、列藩方追々御上京被為遊、急度御公議可被為在御座義とは奉恐察候得共、苦心ニ不堪候俛聊奉申上候、抑諸州浮浪之者鎮撫之御所置被為在度、偏ニ奉懇祈候、既ニ和州・但州等之暴発致候者共之義は、御慈憐至当之御沙汰可有御座事と奉存候得共、外諸国脱藩脱走之士民元來尊攘を唱候得共、其領主・地頭より敝令有之、或ハ正義或ハ尊攘之義を遮而唱へ、同志を催候者共を幽閉禁固之所置御座候故、其同志之者共冤罪ニ処せられ、本志を難達事を或ハ恐れ或ハ激し、無是非脱走仕候而浮

浪之身と相成候義と奉存候、則讚州高松藤川求馬・同国大造山村小橋安造等、兼々尊攘を志シ候者ニ而、同志を論シ申候所禁固せられ候風聞承知仕候、将甲府御嶽社祠官内藤舎人・同主税、是又赤心勤王之者ニ而、同志を論居候所、方今之形勢を恐れ既ニ脱走も可致哉之風聞ニ御座候、右等承知仕候一ニ言上仕候、左候得は同志之者共如何仕可申候哉、進退究迫仕候場合より徒を結び暴発等之心得違ニも相至り可申哉、本来は尊攘之丹心より起り候事共、却而国害を引出シ乱臣ニ陥り候事ニ可相成候は、実ニ恐入候義ニ御座候、仰願くは

公命を諸州ニ下し給ひ、真之有志之者共は其領主・地頭より義理を論し、国家御用之節は素志を為遂可申旨を以而撫育被為度奉存候、左候得は真実勤王正義之者ニ候ハ、急度相守、志氣を畜<sup>(蓄)</sup>へ堅固ニ可罷在と奉存候、最早浮浪人ニ相成候者共其生国へ召返しと申義ニも至り難く御座候ハ、是等は何卒御当地にて東西本願寺、又は智積院等之学寮之如きへ差当候所御召集ニ相成、蔽重之規

則相立候而御扶助被置成下候而、何れ鎖港攘夷之御決定

亥十一月

冊子原寸 縦二八極 横二〇極 五枚

ニ相成可申と奉存候間、自然変事争端をも開き候場合ニ

至り候節、御用ニ被為立御奉公被仰付候ハ、急度忠誠

を尽し可申奉存候、且又諸州ニ潜居之有志之者共も其時

被召出、御用被仰付候ハ、難有奉存、赤心報国本志を可

達と奉存候、然ルを中ニハ血氣之勇意若年之壯心脱走仕

候所、進退切迫より身命を過失可申も可有之、深く以無

慚之事ニ奉存候、何卒右等之事情御洞察被為在御座候而、

寛大之御愛憐を以撫育之御所置之御公議奉希上度懸志ニ

御座候、

尊藩様は御威徳天下之畏服仕、億兆之奉敬慕寄頼仕候所、

且前年来より浪士御鎮静之御義も被為在候御事ニ御座候

間、奉煩

高聴奉懇祈候、卑賤至愚之言、幸ひニ其罪を御科め不被

在候而御採用も被下成、

左京 賤民某

果、軍備之手当等無之所より、攘夷之儀

遺三 福永直之丞ノ攘夷ニ付久光公へノ献言

(表紙)  
「奉」

不肖之私

誠ニ恐多奉存候得共、不容易世態ト奉伺居候処、此節御

旗本御人数之内ニ而御供被仰付難有奉存候儀は何共乍恐

難申上、然処京師之形様弥治乱之境ト奉伺候、然は自ら

御良策被為在候儀は必然ニ奉存候得共、私式茂不及事な

から寝食茂不安程之事ニ奉存候、就而は世評承及候迄之

事ニ而、事実間違而已御座候半と奉存候得共、憂鬱ニ堪

不申候付、乍恐愚意左ニ奉申上候、

一 天下之人氣一和不致、有志之面々致沸騰候基は被

知召上候御事ニ而、攘夷之儀関東ニ而是迄姑息ニ流

主上深思召之詔被為 在、頗に被

仰出候御詔欵ト奉恐察居候得共、五月十日拒絶被

仰出候儀は、今更ニ相成候而は偽勅ニ別而疑敷奉存

候得共、難計知詔ニ而、若弥

叡意ニ候得は甚御無理ニ奉存候、其詔は攘夷ト被

仰出候上は、其計策は武將之職掌可有御座候得共、

只頭上之蠅を払候様被

思召上、急々攘夷ト而已被仰渡候而は謀略茂出来不申、

是迄関東之所置は往事今更無致方事故、此上は

御親征迄茂可被為 在程之

思召ニ候は、此節新ニ深

思召之詔被為 在候付、速ニ攘夷之計策被

聞召上候而献策いたし候様、幕府并諸大名江被仰渡

事ニ奉存候、尤鎖港之義は外夷江達振老ツニ而仇を

退と迎んとの境、誠ニ一大事ニ奉存候、最早横浜ニ

而攘夷之達相成、色々承接茂有之哉ニ世評洩聞仕、

何様之趣意を以相達候哉、最初和親調印之折

朝廷江不奉伺候処、夫より人氣不居合等之趣を以、若

相達候得は江戸は打捨、撰海江軍艦差向候外無之、

左候得は忽兵端相開戦争之外無之、戎情茂無和理詔

を以断ト存候程之趣向不相達、無理ニ及攘夷候得は

名分不正而已ニ無之、五ヶ国之兵一緒ニ引受候場ニ

至可申、然る時は昇平土氣衰弱之上、軍備は無之、

乍残念敵対六ヶ敷奉存候、

一 右付先ツ英夷一國被召放度、夫より二三四ト追々被

為及鎖港度奉存候、其詔は英頗に暴威を張、第一薩

州ニ而蒸氣船奪取海賊之仕形付、日本國中大挙して

人氣不居合趣を以名分ニいたし、此涯時節御見計を

以攘夷ニ被為及度奉存候、左候而外五ヶ國江は前文

通之次第、甚英を悪人氣沸騰いたし候付及鎖港候、

就而は兎角戦争可相成、左候得は致渡来候節、幟印

等見達及砲発候難計、尤亦先年英船幟印相謀、長

崎江入津乱妨いたし候儀茂有之候付油断不相成候付、

以来入港和親引結之儀は断ト御達被為在度、左候得

は邪は英ニ有而、正義は日本ニ無疑奉存候、暴を押へ

皇威を御輝し被成候機会到来ト奉存候、

一 右通御達相成候ハ、亜米理加は開港を始候国柄ニ茂有之、外三ヶ国茂英か為に被及鎖港候訳ニ相成候ハ、合衆国之議論ニ相成、夫形承諾引取候儀は有御座間敷、究理之上は断判六ヶ敷可相成候付、兼而返答之応接振精微ニ穿鑿いたし、一円不聞入場ニ相成候は、英は則手切ニ相成忽戰爭ニ可相成、右付而は合衆国も英之暴は兼而悪居候哉ニ承及候付、窃ニ魯西亜江付入、反間ニ而戎を以戎を打七候御計策は有御座間敷哉、事実不奉存事候得共、術策ニ涉り申度事ニ存居候間申上候、右通中間混雜ニ相成、万一茂魯米等之計を以英入津不致様相成候ハ、誠ニ大慶、乍然其訳を以、又候米等は迄通通商願出候ニ相違無之、其時是否難申訳筋故御許諾両三年茂相立機會見計、小国貿易難相成等之趣を以、長崎迄ニ而商法品

御取究之儀御達被成度、亦其儀不承知ニ而難決申掛候者は御征伐被為在度、何分ニ茂魯之儀は、是迄阿蘭陀同様終ニは御免し被成候ハ、世界之形様は勿論、軍器御取寄之弁利、且は戰爭之一助ニ茂可相成奉存候、右通戎を以打候計策不相調候共、右之訳筋ニ而被及鎖港候得は、合衆国都而之仇恨不相請、本国駈引隙入之内ニ不足之品早々軍備之御手当被為成度、左候ハ、先ツ一国之訳ニ而戰爭之次第御試被成候ハ、塩合茂相分人氣之次第相知可申奉存候、

一 人氣沸騰之病根は、將軍家征夷之職掌不相立、尊王之道無之訳ト奉存候間、速ニ関東之宝藏相開、兵庫刃其外諸所江広大ニ鑄製場取仕立ニ而大砲夥敷作調、撰海之御手当充滿いたし、其上ニ海岸之諸大名江茂御渡相成、一涯攘夷之手当ニ而 將軍家ニ茂京・大坂江滞留、奉安

歡慮候程之勤

王之道相立候ハ、暴論党茂治候半、京師之一条は 將

軍家第一之事ニ而、御委任之上は只管御守衛武威を張、誠実ニ軍備之御手当相成候ハ、弥泰平之基ト奉存候、左候ハ、上を学下故、此節は諸大名茂致手当候ニ相違無御座候、

一 軍備之金子不足候ハ、三都之町人江

勅命を以夥敷出銀被仰渡、諸大名江茂拜領被仰付度、諸色高料、金子乏敷候而は軍備相調不申、兎角 皇国中之全力を以不為及征伐候而は不相成、奸商之義は兼而過分之利欲貪候者故、御国恩奉報一筋可相成奉存候、

一 右付而は当時人氣沸騰之詛を以無拋説を立申上候得

共、此節蒸氣船一条ニ限不申、日本國中軍備充滿いたし居、彼より茂恐居候詛ニ至り居不申候而(虫損) 戎夷之非義取押へ 皇威を輝し候義茂相調不申、天之時を知、時勢を計、敵之長短ヲ察、兵を起候は良將之知所ニ而凡夫之不及所、誠ニ攘夷は御難題未時節参り不申と奉存候、横濱開港より第一人氣相拘候詛ニ

奉存候間、長崎迄ニ被為成候ハ、可然奉存候得共、是以六ヶ敷、一度其儀及断判候得は是非やり付不申候而は不相濟詛故、彼は深被為渡

尊慮度、伏而乍恐奉存候、軍備充実之上不義を押、前件之計策を以一國ツ、御放被成度奉存候、

一 水藩之議論は、攘夷之年限被召延候而茂諸国皆苟安

姑息ニ流果候未故、逆茂軍備は千か千不相調、此上は兵端無理相開、両三四度も及敗軍、天下中死地ニ入不申候而は皇国回復ニは不相成ト一向ニ国論ト申募候由世評承候、誠ニ尤之一筋頼母敷事実々感心之至御座候得共、水戸は全体人材罷在候所ニ承居候処、左様ニ突つまり候議論相立候哉、又は私式之不及所ニ御座候哉、一体士氣衰果候儀は誠ニ歎息之至御座候得共、右之兵を以軍備無之戰場江無理ニ相用及敗軍、有土之面々は過半致打死候は、其余は皆弥臆病神付入、手を余し候半、其節ニ至、有志之面々三千人位罷在候計ニ而は、返而回復ニは不至候而御国

体ニ相拘基ト奉存候、百戦百勝計りすまし候軍ニ而

茂勝負は運ニ寄可申事候処、頭より弱兵を死地ニ入候は上將之計策ニ無御座、人氣沸騰は誠ニ難被黙止訳筋御座候得共、往古新田・足利奏訴、且大塔宮を足利奉害候折茂、暫時兵を被為出候儀、天下大乱ニ相成候趣を以正成御陳奏ニ被及、且亦正行親之遺訓を守、透を伺、数年兵を不出、其砌は

主上は吉野 御籠居、いつれ茂誠に難忍訳筋、近頃ニは浅野家之大石同土之面々、敵打を急といへ共漸々申延し、難忍を忍、透を計、三年目ニ本意を達候儀茂承申候間、暫時難被黙止ヲ被為忍、前文通御手当盛相成候ハ、人氣茂治、土氣茂振ひ立可申候間、其機会見すまし一國ツ、非義を押へ御打払被成候ハ、勝軍無相違、初而之合戦ニ得勝利候得は、弥下町人・百姓迄茂攘夷之腹中相成可申奉存候、仍而軍備は敵御催促被為在度、一日後候ハ、一日、十日後候ハ、十日之御油断ニ相当申候、

一 將軍御上洛之上は何事茂

勅命は幕府江被仰渡、夫より天下中江相触候様被為在度、大敵前ニ置暴論党内乱をかもし候而は、誠ニ外夷之術中大乱之基ニ奉存候、

右ニ付而は御英断疾に御妙策御決定之儀ト奉恐察候得共、不容易世態・世評紛々鬱拘無限切迫罷成候故、不奉顧愚身乍恐此段奉申上候、恐々謹言、

十二月七日

福永直之丞

冊子原寸 縦二八釐 横一九・五釐 一〇枚

通三 綿船事件ニ付土持平八ヨリ藩庁へノ届書

三通

追加三三〇一

(端裏朱書)

小倉より

癸亥十二月晦日

土持平八

長崎製鉄所蒸氣船御借入相成、此節長崎表江御用荷積入廻船之処、土官已下使人等都合六拾八人乗組、豊州小倉

領白野江村青浜沖江致碇船候処、本船釜屋より火起致燒失、乗組之者共追々諸所江游渡致助命、或は汐ニ巻れ洋中江払出溺死之者段々有之、右ニ付御用諸之儀有之、出會可致旨大原林左衛門より掛合之趣、当廿五日申刻時分相達、直様出立、陸路より通行之處五六里山坂之難場、同夜田之浦迄差越、右林左衛門江曳合、猶又水夫等江其場之時機事情細々承合候形行、左ニ申上候、

一長崎製鉄所蒸氣船老艘

但碇式頭・綱式房

大砲式挺

蒸氣廻鉄道具品々相添、

御用荷

一繰綿六百本

一荏子之油拾挺

一唐之土式拾式箱

一光明丹式箱

一御用金百五拾兩余

但右御金之分揚荷

外ニ乗組人自物類品々不相分、

右は長崎製鉄所御用船御借入相成、勿論古船ニ而此節修覆相成賦ニ而長崎江廻船ニ付、本行品物等積入当月廿二日兵庫出帆、同廿四日夜五ツ半時分豊州小倉領田之浦江一旦乗掛候処、長府前田・檀之浦等台場より三四発最初空炮致し、乗合之者如何様相凶之炮発欵と差心得たる由候処、湊口近寄候場合諸所台場より打統実丸致遠発、式拾五六発も打懸候欵、船涯江追々実丸飛越し念遣ニ有之、無致方蒸氣ヲ早日宍里程跡江乗返し、小倉領白之江青浜沖江致碇船候処、無間も船之釜屋より火起、尤風呂之下江繰綿底積有之、右江燃付夫より船張江燃上り、船中之者共必死存詰精々相働消方為致由候得共、何分北風烈敷中々手ニ難及、積荷等惣而致燒失、御用金丈乍漸大原林左衛門外水夫供々はつ平より取卸致格護置、又候右乗返し助船として乗出、且又同浦江肥後船頭儀七郎ニも橋船より乘向候節、最早船



上廻り焼払銘々海中江飛入、或は游渡候者も有之、六拾八人之乗合之内式拾八人致助命、是迄死骸搜方等仕候得共不相見得、右之内岩元市之助便人奥州之産内田伝治死体流寄、其余全不相分、然は汐早之場所、殊ニ時分柄之風烈ニ付、汐巻候而洋中払出候半欵、勿論右死体自然流寄候は直様拙者より可相請取段、委曲田之浦代官・大庄屋・浦奉行等江曳合置申候、且又岩元市之助・内田伝治二人死骸瀬湯江流寄候付、則相請取置、大里御用達重松栄治郎・御国問屋等江相計、田之浦出張役々江案内を受、同浦浄土宗之真楽寺地面借入致内葬、右次第ニ付而は士官之事ニ付、他之見分等不相請候様、其段は最初より申分置候処、御国法通何様共可致旨承得、諸事不都合無之様取計置候、然は乗組之者式拾八人無恙地方江游渡致助命、寒気堪兼候半、依而御本陣村上銀右衛門江取計中、古着綿入類四拾枚致都合銘々渡付置申候、将又御船道具類取揚等付而は、当日迄海荒候故搜方等不相調、其後天氣和候付、則御用

達其外問屋共召列青浜江相渡、現場所細々見分仕候処、最初地方より八九丁も有之哉ニ船手共申出候得共、当分之処は拾五六町相隔、海底拾五尋位も可有之哉、只今帆柱宍丈計焼出洋中江顯れ出、上草類惣而焼失之形ニ相見得、然共碇式頭備付之大炮等相沈候半、依而取揚方之手段仕候得共、迺も一通之事ニハ容易ニ曳揚候儀難相成形ニ浦人共申出候ニ付、御用達之外問屋共江申渡、追而其筋心得之者共江取揚方等之手段細々評儀相約、何分申出候様頼入置申候付、追而形行可申上候、一蒸氣船焼失付、式拾八人之者共陸地江游渡候処、直様同所浦之出張役々は勿論浦人共至極叮嚀致し、左候而辺鄙之場所ニ付<sup>マコ</sup>釈会向等行届兼候付、御本陣村上銀右衛門方江転宿可致旨再三申承、翌廿六日昼時分御本陣江差候付而は、中途六七里之場所ニ而式拾八人江銘々駕籠手当方代官等より致都合、然ニ当日御馳走役飯森辰蔵御本陣江差越、大原林左衛門江面談見舞致し、且又賄料之儀は所仕出を以、一日三度之賄方ニ付而は、

無故長滞在仕候而は却而御面働相成候ニ付、昨廿八日より今日ニ相掛、水夫頭等より已下之者共御国元江差下、右之内水夫頭和田覚左衛門・松元正助兩人は召留置申候、自然乗組之者万一風波ニ依而地方江打寄候欵も難計、其余外ニ誰も存知之者無之故、頻ニ相留置候、一有馬中務様御番頭渡瀬平太夫・大里在番津田廉平・高村權内当分大里江出張有之候処、前件変事聞伝不捨置、直様酒肴等致持參御本陣江差越、右平太夫使之由ニ而津田廉平致見舞、且同廿五日夜白田之浦迄私出張居候処、旅宿亭主を以私江面会仕度段申承、則致応対候処、有馬様内田中伴助より申出候は、前条変事ニ付而は取々風評有之、何れ之筋実正之処承度、且は右御見舞として可差越段、役頭渡瀬平太夫より致承知罷出候段申承、右林左衛門其外水夫共より申承候形行を以相答、尤遠方迄御見舞被下候段厚一札申述置候、

一御船焼失付而は此表風説段々承合候処、最初田之浦江碇泊之処、長府台場諸所より実丸焼玉等数発打掛、右

之内船屋形江一発、船之水涯より掛式発程打当、右次第小倉領田之浦之者共見受候者有之哉ニ而、実は炮丸焼玉之為ニ焼失致し候儀共専申触、迎も自火とは不曳受、依而は成程夜分之事ながら焼玉等打掛旁之次第外見も有之、自火之筋風説難破右之趣意、猶又士官大原林左衛門其外水夫共江再三承合候処、自火相變無之段一函ニ申募候得共、弥其筋共難見受様有之、何れ御評議可有御座哉奉存、為御見合申上候、

一長府より御船江致暴発等候時機事情、猶又探索仕候処、当分下関萩城下より惣頭福原越後、長府より完戸安房已下三百人、先兵之儀は六拾代ニ而、角石と申所江近比より陣屋出来、同所混と詰合、然ニ当月廿四日交代人数参合、尤浪士百五十六拾人当日出張、凡五六百人重居候折柄、蒸氣船通船之相図等聞付、軍粧相整鉄炮其外鎗・長刀・拔身を携追々駈集、大炮等打掛、右すれ玉小倉領江も追々飛越、且又蒸氣船側近く萩之商船石炭積入通船有之、右江式発打当、夫形乗沈、無間も蒸

氣船及焼亡候を見、台場より勝土氣揚、尤当晚は對陣之形ニ而出張夜を明し、翌廿五日銘々曳取候節於陣小屋ニ又候一同ニ凱歌揚、左候而當日異船打沈候故、万々一異人・日本人死体流寄候共一切手掛不致、洋中江突流候様下々江触渡相成、勿論此已来仮令日本之帆印有之候共、蒸氣船打払候様申渡相成候由、

一 当廿五日田之浦江岩元市之助死骸流寄、右脇江はつ平沓艘乗捨有之、如何様も同人乗捨相果候欵、右式助命之者共江承合候得共不相分、然ニ長州は小船より諸所乗廻致見分、右はつ平船押取漕帰候風説有之、折角承合候折、小倉浦奉行脇田重太江右浦方一件に曳合候処、当人より前段ばつ平押取候儀無相違、番所より届申出候形行為心得致案内旨承得、写取別紙為御見合差上申候、

但右一件ニ付而は、乗頭大原林左衛門・水夫頭上床仲之丞・川口熊助上京仕、右同船より葛城彦一儀も同様上坂仕、勿論彦一事私江曳合御用筋儀有之滞泊仕

候折柄、前条異変致到来候ニ付、右一卷等其外防長動静旁細々手を付置存知之訳合御座候間、猶又此節之儀も委敷同人より御聞取被下可置哉、為念此段申上候、以上、

亥十二月晦日

豊前小倉滞船  
唐物縮横目

土持平八

奥掛  
書役勤

長野彦七殿

岩切八兵衛殿

東郷源左衛門殿

文書原寸 縦一六・五種 横八〇九種

追加三三ノ二

(端裏朱書)

「癸亥十二月晦日 滞京中」

小倉領田之浦大庄屋より届書之写

口上覚

今七ツ時分、長州藩中七人乗組船式艘当浦笠石江致渡海、

今朝御届申上候バツタイラ漕婦候様子見受、番人之者よ

り如何様之訳ニ而漕婦候哉と相尋候処、今朝致見分置候

間漕婦候趣ニ而、荒々敷申聞候ニ付而は名前番人より相

尋候処、田辺啓右衛門と申者ニ付届申候処有之候は届可

申旨相聞せ、不取敢漕婦候様子番人より申出候間、早速

罷越見申候処、最早洋中江漕出居、何分手式ニ及不申候

間其仮仕置申候、右付而は自然何様之儀出来も難計御座

候ニ付、流寄候死人外方江所替仕置申候、仍此段御届申

上候、以上、

十二月廿五日

田之浦庄屋

規久田源之助

御浦奉行

御役所

右通写取差上申候付而は、猶又段々承合候処、長州より

漕婦候者は前田・檀之浦出張之奇兵隊浪士共之由承得申

候、此段申上候、以上、

十二月晦日

土持平八

長野彦七殿

岩切八兵衛殿

東郷源左衛門殿

文書原寸 縦一六・五寸 横一〇三寸

追加三三ノ三

長崎製鉄所蒸気船乗組之内致助命候者共、左之通御座候、

土官

大原林左衛門

水夫頭

上床仲之丞

川口熊介

益満次兵衛

遠矢善けさ

中島半左衛門

福留祐右衛門

上木亀次郎

蘭田十兵衛

高江源次郎

原田本右衛門  
 溝口友次郎  
 森永藏五郎  
 同 才太郎  
 鬼塚徳次郎  
 田中仁次郎  
 宮内利介  
 林森之助  
 杉元次郎左衛門  
 井戸口庄けさ  
 池田仙介  
 川添伊八  
 山元源太郎  
 二牟礼正太郎  
 和田覚左衛門  
 松元正助  
 中村彦介

右乗組之内、溺死左之通、

賭夫  
 助次郎  
 政右衛門  
 利右衛門  
 龜太郎  
 小太郎  
便人福昌寺  
 梅嶽  
 熊次郎  
 牛之助  
 けさ介  
 甚四郎  
便人  
 浜崎太平次  
 正太郎  
 休之丞  
右同  
士官  
 宇宿彦右衛門  
 久保十郎

児玉雄之助  
 大田小平次  
 向井仲右衛門  
 坂元城左衛門  
 岩元市之助  
 柳十郎  
 鮫島鉄哉  
機関者  
 梅田市蔵  
 古田嘉助  
 松岡平右衛門  
 上原市左衛門  
大工  
 二之方良右衛門  
火焚  
 池之上庄八  
 浜田伊兵衛  
 西次郎左衛門  
 前田善助  
賄夫差引  
 酒匂藤次郎

便人奥州之産  
 内田伝治  
賄夫  
 為次郎  
 伝次郎  
 半十  
 佐太郎  
 善四郎  
 平次郎  
 助熊  
 便人佐土原之  
 亀吉  
 右通御座候、以上、  
 亥十二月晦日  
 文書原寸 縦一六・五釐 横一七五釐  
 遺書 中川宮?へノ宸翰  
 男山八幡行幸ノ件  
(鑑裏付箋)  
 一 文久三年癸亥

宸筆写  
八幡男山参詣云々

(鑑裏朱書)  
一癸亥年

宸筆写

八幡男山参詣之義ニ付、巨細関白より聞及候と  
存候、各申条不容易義甚心配候、尤社参丈之義ハ精々同  
心催ニ相成候様ニ存候へ共、親征之一義ハ甚心配、此義  
臨此場迷惑候ニハ無之候得共、まさかト申候得は、尤！  
……可為出行候、未撰海江来舟も無之処、卒爾ニ親征出  
行と申も却而狼狽之姿、又夷船を招寄候義東久世・姉小  
路等申入ニ候得共、是ハ従来之願意ニハ齟齬いたす故深  
不承知ニ候、然とて不申出時ハ何モ々々誠以重大之上之  
心配不料候、右ニ付昨夜も段々談候事ニ候、書翰ニ而ハ  
十分之一も難認候間推察頼入候、此場合ニ相成候義ハ其  
方同様之事ニ候、何卒右辺三郎江説得ニテ……依頼之  
件々委細申聞、何分當時之堂上之暴激を急度取押へ之手  
段無之候而ハ、予関白以下失権、只々非職堂上之下役如

何計悲歎候間、右辺ヲ予深々痛心候処申聞候ハ、武門之  
和事候半と存候、何卒深手段逆勢相改り、予以下権威相  
立、名分正明ニ成候様改度候、巨細申度候へ共関白より  
聞取頼入候、三郎任官之義も、関白へ申候得共、薩之義  
ハとふか関白も申出し兼候様子ニテ困り入候、元來心替  
り之訳ニハ無之候得共、又三郎申条一ツモ採用ニ不成、  
予其方等所望之貫徹之模様ハ無之候、予不好件々<sup>(宛)</sup>訳山ニ  
候得共、無致方苦心のミニ付、呉々も三郎之手段頼度候、  
八幡之義ハ参詣ハ致度存候也、

文書原寸 縦一六・三釐 横一五四釐

遺墨 上村直兵衛ノ献策

添書共二通

久光公ノ命ニ応シテ

(包紙ウツ書)  
一上

封

上村直兵衛

追加三五ノ一

御国許旧冬以来、米穀初其外日用之諸色前廉未曾有之高料罷成、末々之者ニ至候而は、別而苦情之趣風聞、疾ニ達

尊聴 御賢慮も被為

在咎と奉恐察候得共、乍恐難被為捨置御事欵と奉存候間、宜御処置は勿論、猶更富国強兵等之御趣法、是亦御急務之御事欵と奉存候、不顧恐此段も別楮を以奉申上候、誠恐惶、

文書原寸 縦一六・三種 横二八・七種

追加三五ノ二

当時天下国家之大計急務被聞召上度被仰渡趣承知仕、私式可奉申上程之件、更ニ覚悟不仕候得共、適奉承知夫形罷在候も別而奉恐入次第御座候付、左ニ申上候、

近来 皇国種々内乱外寇等之御難題も不少筋奉窺得、右は乍恐 御賢察通之御事故詳ニ不奉申上、第一外夷拒絕

之御処置付而は、既ニ去冬從

將軍家為被為及 御屈趣、御触流拜見、乍恐御当然之御形行、誠ニ 皇国之美事とも可奉称欵、乍然此御一挙は不容易一大事、彼ニ十分可勝程之大計、器械両全無之而は、却而無限之禍を醸出、即興廢治乱之界ニも相抱、<sup>拘</sup>実

ニ歎息有余次第欵と奉存候、当時良軍備も整候筋可有御座候得共、未 皇国軍艦之設も不承、就中大砲等之器も彼ニ比候得は、九牛之一毛ニも至兼、唯可勝之理は 皇国之氣質沈勇卓越、分而於 御家国は、義烈武勇衆ニ抽候一筋迄欵と奉存候、乍然戦争と相成候上は、何れ海陸共ニ前段之器械ニ乏候而は、看々義勇も施ニ無術、初終之勝敗如何可有御座哉、将又昨年

將軍家御上洛、品々 御廟議等も為被為 在咎候得共、俄ニ関東江之 御帰城、種々之巷説も被行候処、今般再御上洛、屢御参 内等も被為 在、私式何共難奉窺得候得共、猶更公武御合体、万全之御良策も被為遂候御事欵と、吾人良安堵誠ニ以恐悦之至御座候、乍去何分ニも御



供方其外諸侯様御供之面々迄幾万人相及、人体為差知狭少之京地江充滿、右ニ連物価日二月ニ高踊、衆人殆難澁之筋被窺、困苦之余浮浪人共時ニ乘、此末何様之異条可致到来欵も難計、其外長州之件々実ニ内憂外患之世体と欵可申哉、左候得は免ニ角ニ 皇国押并軍備一涯敵整、沿海之国柄は関東を初、分而軍艦砲台等之製作、且は物価平等之御処置、当時天下之御急務欵と奉存候、乍恐御家国迎も御同様之儀と奉存候間、猶更文武研究、実意ニ基候儀共は勿論、何篇右ニ準候御処置、是亦御国家之御急務欵と奉存、不願恐愚考奉拝呈候、誠惶誠恐、

二月十二日

上村直兵衛

文書原寸 縦一六・三種 包紙原寸 縦 三八種

横 一三七種 横三八・五種

邊云 左近允嘉右衛門ノ献策

久光公ノ命ニ応ジテ

(包紙ウツ書)  
「上」

左近允嘉右衛門」

此節天下国家之大計急務被  
聞召度候付、可申上旨被  
仰渡承知仕候、愚考之趣左ニ申上候、

一内憂外患切迫之時節ニ罷成、危急存亡此事ニ御座候、畢竟人心内ニ乱候も、去ル寅年墨夷東海江入寇以来諸民ハ畏戦之情を逞ふシ、有志之士は憤論を起シ、紛々たる儀ニ御座候得共、幕府廟堂之議論儉安之情より好和を耳心し、遂ニ奉背

叡慮候ニ至り、右之志士致沸騰尊

王攘夷之大義ヲ論シ、諷諫いたし候得共、幕府ニおひて

ハ少も受容する処無之のミならず、志士ヲ刑ニ処し

神州之正氣を抑止せしめ候所為、実ニ以

神州之士たる者之大ニ可惡事ニ御座候、段々幕府之暴政致増長、外夷之待応向弥尽懇情、平伏低頭、彼か爵ヲ不受迄ニ相成、井伊・安藤之姦魁及討伐候得共、更ニ一新する処無之、実ニ痛憤之至ニ御座候、近頃列藩之諸侯追々尊攘之儀ニ付奔走周旋被為成候得共、于今十の六七程も成功ニ相成不申、弥幕府之因循拘泥時勢ニ後レ、残念此事ニ奉存候、併此節ニ至り漸憤論輩ニ被追、横浜鎖港之論起り申候得共、実は畏戦之情不一方処より、海防兵備手を不被付名のミニ而、只今日安閑と月日を被過候より彼暴論輩致蜂起、討幕之論を起し国内動揺無申計事ニ御座候、將ニ此時ニ至而は、何をか大計とすると申せは、かならず天下ノ人心をして一ニ帰せしめずしてハ何事も出来申間敷欵、其策は外ニ全無御座候、只尊攘之誠義名実顯然たる、更ニ無御座候而は人心之帰向する処、曾而有御座ましく奉存候、誠義と申候も外ニハ無御座、幕府をして旧来之弊政ヲ改しめ、第一

朝廷ニ尊奉、公卿・堂上之高貴ヲ敬し、古ノ盛礼を復し己か征夷大將軍の名ニ当り候様ニ有之、万一外夷只今ニ而も拒絶掃除出来候処ヲ期し、直ニ今日より器械ヲ製し士卒ヲ練り兵備敵ニ整候様ニ有之、尤列藩之諸侯江も急ニ其命令を下し而汲々たらしめ、小身之面々江は財ヲ以て兵備ノ料ニ与ふるか、又ハ器械ヲ製して与ふるか、海防兵備片時も不怠様ニ有之候得は、自然人心之帰向する処も定り、専ら暴論輩も心服し、一向死地ニ陥り可申、左様無御座候而は迎も攘夷は出来申ましく、却而暴論輩跋扈いたし、遂ニ国内之干戈と相成神州ハ彼ニ并吞せられ候も難被計、誠ニ痛憤切齒之至ニ奉存候、彼暴論輩も一二人と申程ニ御座候得は、随分之所置も出来可申様ニ御座候得共、天下ニおひて幾千万と申數ハ難被計御座候得は、豈これを制せんや、甚正義壯烈之徒ニ御座候得は、衰弱之幕府ニは却而被制候、斯ニ至てハ兎角幕府ニおひて旧弊を致一新、尊攘之正義ヲ被尽、名実顯然たる処有之度奉存候、當時之

世態ニ罷成申候得は、已ニ何事も下策ニ出申様ニ御座候得は、かならず航海鎖港ハ差置不申候而は、天下之人心不安形勢ニ而、此上ハ拒絶之法ニ相成可申、左候得は緩急之間詳ニ不論してハ不相濟訳合ニ御座候、暴論輩之処ニおひてハ一日も早く掃除いたし度所存も彼か一身之忠潔ヲ専らニするのミニ而も無之、畢竟は幕府ニ諷諫し、天下之人を死地ニ陥るゝの策謀かとも被存申儀ニ御座候、依而は是非前条之通り兵備ニ汲々として士卒を儉安ならしめざるを良とするニ御座候、暴論輩と申候而も、幕府之改政ニ相成誠義之名実相立候ハ、無理ニ暴発ハいたすまじきか、譬へハ今年十月ニハ外夷拒絶ニ相成申ニもせよ、掃除ハマのあたりの事ニ御座候得は、器械十分ニ無之、海防兵備不敵、不教民を用ひて戦ハしむるニおひてハ、決而一戦之内ニ勝敗相分レ、遂ニ弓折レ矢究リ兵勢屈し糧食乏敷、彼に和ヲ乞ふ事ハ必定之理勢ニ而、必和ヲ乞ふに至候へハ、地ヲ与へ貢ヲ進むるニ至るへき、然レハ則積年之

恥辱ニ超過し甚憤恨歎息、臣子之言ニ不忍処ニ御座候、能此時ノ情を愾ふ者ニ御座候得は、いつれの筋今兩三年之間ハ置て海防兵備ヲ整へ、万全之策相立候而、御決心相成申候得は決而天下ノ人心も一ニ定り、共ニ不戴天ノ仇ヲ報センと憤激し一戦ニ及ハ、必

神州之武威海外ニかゝやき可申事ニ御座候半、多算者勝ニ而校計・廟算幾重ニ積り、百戦百勝之謀略を能見究候者ニ而一発有之候ハ、誠ニ武將之職掌ニ叶ひ可申欵と奉存候、尤期限敵ニ御定相成申度、期限御定相成申候上は決而容易ニ御改令ハ宜敷有御座間敷様ニ御座候得は、大概海防兵備相整候上ハ不偽掃除被為在度乍恐奉存候、依之是非今日より器械製作ニ取掛り、期限ニ至らざる内ニハ成就相成候様有之度様ニ奉存候、且又海防之器械大成ニ相成候而も、軍用之糧食ニ乏敷候而は相濟申ましく候、只今より御手を被付度奉存候、愚策試ニ論セン、將ニ有事之日ニ至り而諸方より糧ヲ資ると申事ハ然而出来申ましく候、先外夷海路之要枢

ニ漂泊いたし、遮妨するハ必定之事ニ御座候得は、此  
 時如何せんや、誠ニ可恐之一大事ニ奉存候、只今諸侯  
 領国之体ヲ洞察するニ、実ニ疲弊因乏、粮ヲ京撰ニ運  
 漕するに甚難し、乍然冤角不得止事訳合ニ御座候得は、  
 先ハ列藩之諸侯ニ命し出粮為致度儀ニ奉存候、其位ハ  
 拾万石以上一萬石ニ付百石ツ、出米可有之、左候得は  
 拾万石ニは千石、百万石ニハ一萬石ニ相当可成、其運  
 漕之費用之分ハ遠近之差別なく幕府より償ひ候様有之  
 度奉存候、いつれ京撰兩所江米倉數ヶ所便地ニ被立置  
 度、其便地ハ必ス京師ニ而は東ハ三条四条之繩手より  
 岡崎辺まで、西ハ北野辺、撰ニ而ハ桜之宮第一たるへ  
 し、然レハ東西南北江之運漕宜敷有事之日甚便なるへ  
 し、是非此三ヶ所御立倉ニ相成申度、早手を御付被成  
 度奉存候、前条之大計ハ実ニ天下之大事ニ御座候間、  
 此節不被為行候而は天下ニ尊攘之名実相立不申、人心  
 之帰向する処全く無御座候、弥動乱ニ及ひ  
 神州之大敗眼前ニ相見得申候、誰か是ニおひて長大息セ

さらんや、臣以犬馬之身論天下国家之大計、敢雖不当、  
 至此時豈有顧身命哉、聊以獻微忠云爾、

文久四甲子二月十三日 句読師助  
 左近允嘉右衛門

文書原寸 縦二・三種 包紙原寸 縦二七種

横 一三一種 横三八種

邊三 門松市兵衛ノ献策

久光公ノ命ニ応シテ

〔包紙ウツ書〕  
 上

封

御勘定方小頭  
 御勝手方書役勤  
 門松市兵衛

〔表紙〕  
 上

當時天下国家之大計急務被

聞食度候付、封書を以申上候様被

仰渡、愚昧之私万分之一茂申得候儀無覺束奉存

候得共、不願恐聊愚存之趣奉申上候、

当今天下之形勢不容易時節は勿論之儀ニ付、

公武御合体を人々申募候儀、却而君臣之名義に疎き

議論ニ而無申迄、素より御合体ニ無之候而不叶事候

処、式百余年之泰平に浴し、

幕威分に超過し、申茂畏き事なから

天朝之 御威徳 御衰被為遊候処より如斯議論茂起候

半欬、誠に衰世之然らしむる所人臣慨嘆之至御座候、

乍然時世は時世之所置無之候而不相叶事候付、いつ

れ万端之幕政茂

天朝御窺之上至公至平を以御所置被為 在候処、

公武御合体、本立而道生、方今

幕府之急務と奉存候、

一 征夷之儀  
朝廷之

勅諭ニは御座候得共、

公武御合体之処さへ居り兼、且は軍備半途ニ茂至ら

す候付断然難被行欬、右ニ付征夷之儀先暫御猶予有

之、長崎・箱館両港に被為限夷船之定額且交易之品

數被相究候而通商被仰付度、右ニ付而は是迄より手

広開港之夷情ニ候得は、承伏する所甚六ヶ數可有御

座候得共、是迄幕役応接之次第虚飾を以彼を伏しせ

しめんとするより承伏不致候付、人間固有之実情に

基き通商以来國中疲弊し、万人苦を受永世信情難通、

且非常之備さへいまた調兼候趣を以、実に彼をして

感伏せしめ候様応接有之度、左候ハ、如何成醜夷た

りとも人心有之者感通に至らさむ、即言忠信行篤

敬ならハ、蛮夷之国といふとも行れむの聖語に疑無

之候半と奉存候、左候而万人日用之絹布類を初、其

外不自由之品屹度交易被差止度儀と奉存候、

一 近年御国学大に開け候より神国・皇国・祖国など無

此上国柄に唱つゝ、幕役初実に神国・皇国たる所以  
に不基、外夷応接之次第、虚飾巧言を以するより始

終彼をして信服せしむる事不能、誠嘆息之至ニ御座候、実に皇国ニ候得は、万国を統御まします

大君にましましては、其幕下之役人、本来固有之実意信情を以清直有体に、今日之言行は勿論夷人に対し応接に至る迄、万国を統御まします心得を以万端所置可致之処、虚飾巧言に流れ、弱を以強に飾り、無を以有に巧言し、実に不信を外夷に示すの道理、神国・皇国之名分不相互立、殊ニ國中触達さへも間々虚飾巧言之触流も有之候得は、豈外夷感服して来朝奉貢之期に至る事有之乎、実に悲嘆之至ニ御座候、闇愚之私式申茂乍恐

幕府之御役方此処に眼を開き、实情ニ基き万端所置有之度、いつれ淳朴復古に不至ハ基本難相立欵と奉存候、

一 海岸防禦之儀は、御手厚無之候而不相濟儀は勿論之事候処、既に機会を失ひ候付外夷之憂眼前ニ到来、幕役初痛心狼狽するに至れり、しかしいつれにも無

而不叶事候得共、日本國中疲弊之折に候得は、海岸相拘<sup>(抱)</sup>候御大名貧富ノ御吟味之上軍役金被相渡、五ヶ年限防禦筋、屹と全備相成候様御所置有之、其上鎖港断判有之度、併

幕府茂積金少キ哉ニ茂伝承仕候付、江戸・大坂其外有福之町人等江出銀被仰付度、治乱之境ヶ様之時節こそ商人等之当務ニ御座候半、乱世之憂より今日之不通は堪易可有御座哉と奉存候、

一 長州之一条、罪状之次第<sup>(逐)</sup>一相分り兼候得共、去年八月十八日

御所騒働之一条、専長州長本に相互立、次に

幕府之船を放発ニ及び、且使番を闇殺、旁

朝敵・幕敵難遁、片時茂此罪不被相料候而は不叶事候得共、米仏英蘭四ヶ国之軍艦差向候患不日に有り

と承候得は、第一国体に關係仕候儀ニ付、一日片時茂難差置訳御座候間、長崎江早々御使者被差立、四ヶ国提督等江実情有体を以、長州におめては此方之

罪科難差置儀有之候付、其罪相料候上何分可申入候

付、暫差扣候様被仰達候ハ、異儀有之間敷、其上ニ

而長州之罪早々御料有之候而被為奉安

宸襟候様御所置相付候処、当時之急務と奉存候、

右之件々、既御所置相付候儀茂有之由承及候得

共、從 命令愚存之趣不顧恐奉申上候、誠惶誠

恐謹言、

子

二月十四日

御勅定方小頭  
御勝手方書役勤

門松市兵衛

冊子原寸

縦二四・五種

包紙原寸 縦二六・五種

横一七・五種 五枚

横四〇・五種

邊三 市田隼人ヨリ 國家ノ大事建言

久光公ノ命ヲ拝シテ

(包紙ウラ書)  
「上

封

市田隼人」

當時天下國家之大計急務被聞食上度候付、封書を以奉申

上候様被仰渡趣奉畏候、依之愚昧之私万分之一茂申得候

儀無覺束奉存候得共、不顧恐聊愚存之趣左ニ奉申上候、

方今第一天下之政道致衰乱、夫故諸民致<sup>佛</sup>弘騰、既ニ昨年

八月十八日騒動ニ付而は専長州根本之由、就而は不奉憚

天朝、且不顧襟内致暴業、甚不屈之致方、朝敵は無申迄

事ニ候得共、一先 將軍大坂之城江被致出張、其上長州

旧年以來之致暴働候一条、細精ニ被糾付、其上理非致分

明候上被加当然之罪、左候而京師之儀は一橋公江守護被

仰付、外屯人可然者を被召付、関東之儀は尾張大納言殿・

紀伊中納言殿、此兩侯江守護被仰付候は、決而ケ様之暴

働到来致間鋪、然上ニ諸国海岸は勿論、器械等嚴重ニ致

調達候様被仰渡候は、自然攘夷可致進運、左候而困窮之

諸侯江は応分量為軍備用將軍より賜黄候は、随分諸事手

当速ニ調達可致、乍然將軍御積金茂余計ニ不為在由奉伺

候付、江戸・大坂町人福家之者共江出銀被仰付候は随分

速ニ諸事可相備、いつれケ様之於時節は当然之事ニ而は

有御座間鋪哉、左候而當時諸民致破弊、就而は是迄より  
 異国致交易候訳を以ケ様ニ一統及不自由、勿論諸色高料  
 ニ相成訳茂同様之事ニ而、孰れ交易品被定置、當時日用  
 之品丈は不相成候様被仰渡候は随分納得可仕、尤交易場  
 とても被定置、長崎・箱館此兩港江被定置候而、追々攘  
 夷ニ相成候は随分諸事可相調、三ヶ年計之間ニは決而諸  
 国軍備可相調、いつれ一同人氣不相揃候而は如何様之事  
 茂難調、前文ニ申上通將軍より賜軍備金候は速ニ運達可  
 仕、且及臨時諸国人氣茂致和合、粉骨碎身尽力業可申、  
 当分之処ニ而は逆茂皇国一統之攘夷無覺束、仮令一ヶ国  
 ニ而攘夷有之偶尽人力候而茂、他国ニおひて除攘不相調  
 候而は全尽力之詮無之、孰れ諸国一同海岸防禦厳格ニ相  
 備候上攘夷ニ相成候は、余程思召之道茂可被相行、乍恐  
 此等之趣誠恐誠慎奉言上候、百拜、

二月十五日

市田隼人

文書原寸 縦 一八・二種 包紙原寸 縦三〇・五種

横 二五・五種

横 四五・五種

遺書 穆佐郷士中村敬介献策

久光公ノ命ニ応シテ

〔包紙ウツ書〕  
上

メ

物主土師吉兵衛組

中村敬介敬白

乍恐口上覚

當時天下国家之御大計急務被 聞食上度候間、銘々封書  
 を以支配頭江相付奉差上候様被仰渡趣、謹而奉承知候、  
 依之庸愚之鄙臣誠以千万奉恐入候得共、時世実々忍兼不  
 奉得止事愚存之趣奉申上候、拟如方今時世紛々成立候基  
 は、畢竟外夷之一条より人心積乱仕、無何ト 幕府之御  
 武威茂輕薄罷成候半、長藩杯自佩之振舞仕候茂本 幕府  
 之御勇断無之、速ニ攘夷御決策不被為在処より私ニ破事  
 ヲ候半、乍然天下為御国家、是迄之不正之罪は免茂角茂  
 被為御捨置、何分ニ茂早ク長洲御招相成、内外之情態篤



と御論相成申候ハ、自ら合腹可仕候半、左候而此節は何れも兩年ヲ御限り攘夷御決定被為在、其中ニ都而海岸之御手当敵重被仰出、器械無不足様御備付相成候上、一同攘夷之御手始相成申候ハ、立処ニ神州之御武威海外迄相輝可申儀必然と乍恐奉存候、玆今年明年と攘夷御取延相成申候ハ、已ニ人心緩怠罷成候様ニ茂御座候得共、只今ニ而は一舟之夷賊たり共鏖殺掃攘可仕儀は中々不容易事と奉存候間、乍恐何分ニ茂器械御全備之上と奉仰上候、若於是二年數五六年茂攘夷被為召延候筋共御決策相成申候ハ、尽ク人心潰靡仕、且又不日ニ諸所潜伏之浪輩興起可仕は必然之勢と奉存候、前文海岸之御手当ニ付而は、小祿之御大名様ニ而は存分御全備相成候儀、逆茂六ヶ敷御座候半、就而御当地之御寺院余り過分ニ相見得申候、格別之御靈寺等は実以不容易御事ニ御座候得共、洛外諸所余計之御寺院は都而何卒御取毀相成、其撞鐘前文御大小名様方江御与讓相成、直ニ砲銃御鑄制相成申候ハ、格別御国用ニ相立可申候半、右は御当地而已ニ限不

申、外兩都并諸国一同如斯有御座度、左様御座候ハ、益神州之御武威日二月ニ隆盛ニ成立可申候半奉存候、弥寺院御取毀相成申は御座候ハ、右御寺領は乍恐堂上方江御加領相成候様有御座度奉存候、

御所九門之内江御固之各藩、何れも御当所江大砲ヲ被召居置候は、乍恐堅固ニして不敬之様御座候、右様之勢より自然釀国乱出候半と乍恐奉存候、尤右之大砲は海岸之要所江御銘々被召居候ハ、格別御用立可申候半乍恐奉存候、当時外患内憂とは申中長洲一藩より天下紛然と罷成候茂、去とは近比残念之至ニ御座候半、然ルニ長洲之外誰有之自低之計策可仕、爰におひて返すく茂一日茂早ク長洲御招寄相成、宜正義ニ被立戻候様委曲御論導相成、六十余洲一心一和仕候上ニ無御座候而は、首尾克攘夷は被遂間鋪乍恐奉存候、差当り天下ニ一統米穀而已ニ不限諸色万端高価ニ成立申候は、強テ夷賊之業而已共被思不申、不正ヲ彼レ江為負、是江奸商多ク為生筋と被察申候間、右之奸商逐一御探索之上、早ク被為加

天誅、尽ク諸色下料ニ成立万民易渡世シ様、分而何卒

御良策有御座度、左様無御座候而は日増人心困窮ニ差迫

り、不計も賊心差起り、動もすれば士民は乱ヲ企、士民

は盗ヲ企可申必然ニ御座候半と奉存候、乍恐

東照宮之御仁徳ニ而辱茂昇平殆ト三百年、藩士茂常二月

雪花ニ日ヲ暮し候、世の末ニ而今已ニ治入乱ニ之時至れ

り共可申欵、諺ニモ治乱盛衰は天地ニ如在陰陽と承申候

得は、当今之時世十二八九は擾乱之方近ク御座候半、扱

是ニおひて看々国乱相起り候而は、眼前ニ彼ノ夷賊の計

ニ陥る道理欵共乍恐奉存候、就而は返す〜茂奉恐入候

得共、尚乍此上当時之御威武ニ而

寛仁大慶之被為巡

尊慮、天下巖然と御治定相成候様厚ク被為在

御良策度乍恐奉仰上候、当時洛中洛外貴賤男女童子迄も

世ヲ頼ニ奉仰候は、

御屋形様而已と及承申候付、猶此上ニ茂乍恐急度被為在

御良策度、若今通ニ而長洲御打捨被為置事御治定之上、

御大小名様方追々御暇ニ而京地御引取相成、御在京衆減

少罷成申候ハ、亦々忽焉ト長藩振出、(備之) 倘是迄之

御良策致断虚候は案中と奉存候間、返す〜も深ク被為

在

御大計度、数にもならぬ微臣乍恐寤寐奉仰上候、若又於

爰ニ

幕府之御勇断無御座ニおひてハ、尽ク人氣積乱仕、終ニ国

乱待日ヲ申間鋪乍恐奉存候、

右は匹夫之愚存御時節柄誠ニ奉恐入候得共、

御仁徳ニ奉携リ不奉得止事奉建白候、分過之罪幾重

ニ茂御許有奉仰候、実惶実恐謹言、

子 物主土師吉兵衛組

二月十五日 穰佐郷土 中村敬介 九拜

文書原寸 縦 一八種 包紙原寸 縦二五・五種

横 二四三種 横 三四種

禮器の 福永直之丞ノ献策

久光公ノ命ニ応シテ

(包紙ウツ書)

「奉

福永直之丞」

(表紙)

「奉

天下国家之大計急務申上候様被仰渡、当時明賢公被  
為揃御高論被為在候御事ニ而、私式更ニ趣向茂無御  
座、天下之形勢相伺歎息仕、只此上は御下知次第ト  
而已一途ニ思詰罷在候次第御座候処、猶又御筆を以  
被 仰出候趣奉承知、何共恐入次第奉存候、極々切  
迫之世態御座候処、此上は愚意不御用立と差扣候時  
勢ニ而は有御座間敷奉存、事实は不奉存候得共、観  
察熟慮ニ渡見留等茂相付不申儀、誠以恐多奉存候得  
共、謹而左ニ奉申上候、

一 將軍御上洛涯は、閣老等色々入込候訳茂候半欵と存  
罷在候得共、最早相応之日数茂相立候得共、是迄之

旧弊相改、尊

王軍備之事共、未耳ニ立眼ニ立程之儀、曾而見聞不仕  
事之所、先後第一ニ而余事は打捨、先一番ニ軍備之  
事を始不申候而は不容易人心ニ相拘候訳筋ニ而、一  
日後候は一日之御油断、在京之諸侯は亦夫丈ヶ疲勞  
之基と奉存居候処、事实は不奉存候得共、閣老其外  
姑息ニ流色々疑惑被仰達候儀、当座は畏候而茂其事  
を不行、柔弱因循無限旨承、甚残念至極奉存、

將軍之職掌不相立、実ニ

御赤心通之事速ニ不相用候ハ、頻ニ暴論相立奉申上  
度奉存候得共、能々思慮ニ及候得は、大事を計ニは  
逆茂短慮之謀略ニ而は大変之儀ニ而、内を乱し候而  
は終ニ攘夷之期限茂無御座、就而は婦人如キ之幕役  
御相手ニ而天下之一大事、乍恐

御強腹共御残念共可被 思召上候、就而は深重誠ニ  
恐多奉存候得共、頻ニ 御万慮ニ被為及、是非  
將軍家御立直し被遊度、左様無御座候而は攘夷之

叡慮候而茂御手不被為延而已ニ無御座、建武之乱無相

違奉存候間、

御趣意是非御成就被為在度、伏而奉存候、

一 右ニ付而は申上程之事ニ而茂無御座候得共、御家中之内五人・拾人・三拾人・五拾人茂党をなし承之筋

ニ而、諸藩江敵敷及討論極々一統沸騰之姿ニ而、諸藩之内同腹之者茂候ハ、俱々終ニは閩老等江茂拜謁相頼、又は幕役御勘定奉行等江茂迫り候時宜相成候ハ、致恐怖運立候一計ニ而は有御座間敷哉、甚敷ニ至り候節御差留相成候ハ、可然哉と奉存候、

一 長州之儀、天下之罪人国辱之恨、速ニ討亡度は山々奉存候得共、何分ニ茂過半人望相離候、

將軍家旧弊伐而捨候様相革候而改哉、人皆仰程之所置相成不申候而は、人心相治不申所置次第ニは、長州ニ而究乱相成候者茂正義ニ復し候者茂御座候半欵、左候得は大慶無此上、且は長州之勢ひを抜候訳ニ至可申哉、尤亦諸藩之内ニ茂長州同腹之者茂難計候付、

幕府御正之上

勅命を以、長州之罪御糾被遊度、其上ニ茂後悔不致、

暴徒之所置不相付不奉謝候は、其折は無相違諸藩等一致可罷成、左候得は弥内を固し外を征する之訳ニ而、其上

王兵を以御征伐被為在候ハ、速ニ御平定可被成候、一度干戈を邦内ニ動候時は殘党諸所ニ起、暫時は不穩而已ニ無御座、弥 將軍家を恨候而災を朝暮ニ醸之患無之共難奉申上、乍然此儀は返而幕役魂入替之方ニは宜欵共奉存候、

一 右ニ付、当時被為揃候賢侯之所は別段之御事ニ奉存候得共、外ニ大小身之内ニ茂御高論奉助候而、幕役等江迫り候程之御人物は被為在間敷哉、深く夫等之所茂御聞合被為在度、若御人品茂候ハ、早速 御召ニ而御評議被為在度奉存候、尤亦御簾本幕役之所ニおひては悲歎至極ニ御座候得共、只御見限り打捨被為置候而茂相濟不申哉、兎角御簾本之人氣より御立

直し相成不申候而は、閨老等迄之罪而已ニ而茂無之哉、是迄関東之所は一体有志慷慨、役筋等江評論申立候者は追退、又は押籠候風調之哉ニ茂承及申候間、其言不被入ト玉を抱て隠居候茂難計、上暗ければ下益甚敷、上弱ければ弥弱訊ニ而、当時幕役之所ニ而は、右等之人物引揚候儀は逆茂六ヶ敷奉存候間、此節は裏手之方ニ而、一橋侯等江被仰談、是非御探求被為在度、忝人英雄御求得被成候得は、類を以て集候訊ニ而追々人物茂可被為得、其上ニ役筋等之所大更改ニ被為及度、其子細はたとへは、御勘定奉行拾人之所ニ奸物之甚者両三人御退相成候而茂、其跡役ニ相成候者格別之人物無御座候而は矢張其旧弊ニ流込候訊ニ而、痛候酒壱斗之所ニ式三升捨候而清酒入足候道理、全其詮無御座、其人物被召出候上は人々ニ依役務被仰付、都而御改易被為在度事ニ奉存候、誠ニ幕役之所迄は余計な御事と奉存、人望相離候將軍家ニは御座候得共、職掌不立相禿候場ニ相成

候得は大乱故、天下之事ニ

御心勞被為在候上は、夫等之所迄茂一橋等江茂深く被仰達何様可有御座哉、今更後れ候事ト奉存候得共、愚慮之余り奉申上候、

一 千変万化御手被為尽候上、最早御手数数茂無御座場ニ相成候ハ、是迄 將軍家之罪不殘御挙被遊、夫ニ付

御心勞被為尽候得共、不取用趣一々歴然ト被書載、最早 朝議被為出候而茂不詮立趣ニ而、御歎願之御書付を以御断ニ而、御暇之義両伝奏衆江表向被差出、早々 御発駕之御手当被為在度、左候ハ、其事天下ニ相知候は、人氣相離候徳川家故弥相離候基故、一橋等被為入候付而は、逆茂夫形ニ而は被為濟間敷、面白事茂何事欵到来可仕哉、左候ハ、幕役茂醉を醒候事茂可有御座、又

朝廷ニ而御免しは千万有御座間敷奉存候、

一 右通之御事ニ相成候而茂幕役因循不取用、万々一御

暇御願濟相成候ハ、早速

御発駕被為 在度、左候得は諸浪人・長藩人等大挙して可致入京、

將軍危ニ至リ候ハ、閣老等恐怖いたし夢覚候半、空を見不申候而は逆茂是迄之旧弊心底立直不申候、右

通方一

御下向之時宜相成候ハ、

宮様・前関白様等江

將軍家何様申立候而茂御暇不被

仰出様御謀略御深密ニ被 仰上置候ハ、諸藩茂罷

在候故、

主上之御所ニ於は 御懸念被為在間敷、尤御家老其外

御人数被揃置度、左候而其機會ニ応し、又々

御召ニ而暴風之砂を巻勢ひニ而

御上京被為在候ハ、御英名弥天下ニ響渡候末ニ而

英雄群出奉附添、臨氣応変之御計策はいか様共可被

為調候間、其上ニ茂徳川家不立直候は、天下中大挙

ニは千万無相違候間、其節は

王兵を以御討罰被為在、一挙ニ天下を治

王道ニ被為復度、左候而征夷之御計策ニ被為及度奉存候、就而は誠ニ空論ニ御座候得共、世態觀察之愚意

乍恐奉申上候、

一 外一策ニは 將軍軍備之手当等閑ニ打すかし、御手

ニ不被為及候ハ、成行

朝廷江被仰立、摂・河・泉之町人江献金被

仰出、此御方様御手ニ而製鉄所御取仕立之上、大

砲製造、砲台築方、玉菓等之製作所御建立被成何様

可有御座哉、左様御座候は、弥

將軍之任を失ひ天下之人望離尽し候訳ニ而、不容易

儀御座候得共、前条ニケ条より外有御座間敷哉ト奉

存候、乍然右通之事ニ相成候而は、幕役共奸智は極

々飽迄深キ者共故、悪様ニ夷戎江申含、天下之攘夷

を恨を薩州に請引受候而茂不容易事故、先ツ下策ニ

奉存候、

右は至愚之甚敷を茂不奉願、誠ニ恐多奉存候得共、

意底之忝奉申上候、誠恐惶謹言、

二月廿二日

福永直之丞

文書原寸 縦二八種

包紙原寸 縦 二八種

横二〇種 八枚

横四〇・五種

遺器 川上勘解由ノ献策

久光公ノ命ニ応シテ

(包紙ウツ書)  
「上

川上勘解由

封

「

當時天下国家之大計急務可奉申上旨承知仕、私式迎も右之重大之事件ニ相協候心付も無御座候得共、兼而之愚考淺見、左ニ奉申上候、

當時天下人心紛乱ニ付而は、畢竟外夷通商より事起候間、何れ外夷之御所置涯々嚴重不被仰出候而は、弥人心沸騰

いたし可申候間、先第一摂海辺、其外海岸都而国々大名江嚴重之台場・大砲、海辺之大小ニ応し一二ヶ年之間、屹と年限被相定、其内ニは是非十分相備、各国軍艦襲来候而も速ニ掃攘相調候様可有之旨

勅命有之度、就而は小身大名ニハ自力を以涯々十分海岸防禦手当行届兼候向も可有御座候間、右人数江は幕府より軍用金差出候様

朝廷より御達有之度、左候得は此涯武備嚴重行届人心致一和、外夷何程襲来候而も、日本全国を以攘斥相整可申儀と奉存候、然共長崎一港之處、是迄蘭国・唐国免許之通、屹と国法を相守候約条ニ御座候得は、一港丈ハ御免ニ相成候而も可然哉と奉存候、攘夷一条ニ付而は長州甚差急暴論を相立、既ニ國中紛乱之由、今形被召置候而ハ益暴威を振、終ニハ天下之大事ニ致關係可申儀は案中之事御座候間

勅使を長州江被差立、去年八月以来之罪を被相料、暴論を相立天下之妨ニ相成長州江罷在候浪士之輩等、長州よ

り急度所置可致旨御達相成候ハ、是迄暴ニ募候とハ申  
なから

朝命を重し決而承服可仕、万一承引不仕候ハ、諸大名よ  
り人数差出候様被相達、違

勅之罪を被相糾候外ニ計策は有之間敷哉と乍恐奉存候、

誠惶謹言、

子

二月

川上勘解由

奉

文書原寸 縦一六・五種

包紙原寸 縦二九・五種

横 一四七種

横四三・五種

通四二 新納清之丞ノ献策

久光公ノ命ヲ拝シテ

(包紙ツラ書)  
「上」

封

一番御旗本

村橋昇組下

「新納清之丞」

天下国家之大計急務献白可仕候様承知仕、乍恐左之  
通申上候、

一 近年外夷大ニ切迫、中国殆と被汚腥羶之勢と相見得、  
実ニ 神州之威儀不相振、莫大之耻辱実以長歎息之至  
御座候、就而は直様ニ掃蕩いたし是迄之汚名一挙ニ興  
起、 神州之武威振立候様被為在

御所置度日夜感涙仕候得共、只今ニ而は諸御藩国機械  
全備不仕、右之御藩ニ較候得は御国元ニは随分機械相  
調候様ニ相見得候得共、是以昨年御城下戦争之時ヲ考  
察仕候得は、乍恐彼之十一分ニも未及之様ニ相見得、  
右不備之兵を以彼と戦争ニ相及候得は、弥敗算在我が  
案中之事ニ御座候、機械之不願全備ヲ外夷請讓仕度候  
様紛々相唱候哉ニ承候得共、此等之言ニ而は誠ニ一時  
之論ニ而深慮遠謀之策而は無之、終ニ不測之事且夕ニ  
差迫り申候半、尤外夷ニ付は数年来日本世界中周施、  
我之地理形勢委細致測量候得は日本内訌之病ニ而、急  
速打攘候而は加下棄候、同様ニ而身体危、何れ内訌之



事有之候上は不幸之時機ニ而、加參葉候而我之元氣を  
擁培仕度奉存候、右様ニ候得は急速ニは攘夷之儀難仕  
奉存候、且五ヶ年・十ヶ年之年限ヲ相立攘夷引延候而、  
其内機械調度候様議論も承候得共、今成ニ而は逆も日  
本中其中機械全備難計奉存候、何卒急々今日より日本  
中攘夷之心持ニ而諸藩国機械被召調度奉存候、左様御  
座候得は人氣興起いたし、積年之汚名相購申候半、乍  
併延々罷成候而は、乍恐依諸藩而は因循姑息之旧弊難  
計御座候間、此節御諸侯方

朝廷江御召ニ罷成、御会 朝之上、御銘々精々機械被  
為召備候御敵血之盟を被為召建、以来因循苟且等ニ而  
御違盟之御方被為在候ハ、被為受 玉命ヲ御諸侯方  
へ鼓ヲ打鳴し被為責御罪狀度奉存候、疲弊或は未就之  
御藩も被為在候ハ、御互ニ被為在御救助、只管精実御  
戮力被為在度奉存候、左候得は機械全備、遂ニ日本内  
訖之事一新いたし、武威海外ニ奮起申候半、何卒右様  
被為在御所置度奉存候、扱又外夷交易之儀、是迄御許

容被為在来候得は、直様御免罷成而は不宜、乍然近年  
来甚敷罷成、五穀類迄も致交易、竟ニ日本中饑渴之体  
ニ相及、実ニ可歎之至ニ御座候、以来は横浜・長崎兩  
所商署被為定置、日本中不用之物貿易之品ニ相立、五  
穀類其外日本要用之物一切交易召止、万一不守之者共  
御座候ハ、敵科之御所置有之度奉存候、彼より御交易  
之品物ニ付て、衣類等は只今ニ而は無用之物ニ御座候  
間、機械類御交易有之度奉存候、是迄は外夷往々貿易  
之大望申立、其通御許容無之候得は虚喝を以相威し、  
畢竟彼之虚喝ニ被欺御免罷成、是ニ而は実ニ日本之元  
氣無之、以来は彼之不被威虚喝ニ日本之規則振立候様  
被為在 御所置度、左様御座候ハ、急速攘夷無之候而  
も何ぞ日本之汚辱とは不罷成候間、右通交易御免有之  
候而、其内海岸之御防禦御座在度奉存候、

一長藩ニ付而は、無限暴事取構可惡之甚敷者ニ御座候得  
共、此節は天下治乱之機ニ御座候得は、是非今般御召  
相成候而、御歴々御会 朝之上是迄之罪狀被為在御責

替、其上外夷一条前条之趣を以誠実御諭ニ相成候ハ、至暴之長藩とは乍申懣懣服仕申候半、列藩御召ニ相成候而長藩之分御召ニ不相成候而は、愈暴激相寡候は案中之事ニ御座候、成程暴藩故御召ニは不相成咎ニ御座候得共、実ニ天下安危之機ニ御座候間、旧悪不被為拘公平正大を以御所置有之度奉存候、左候而長藩之様被為遊亡命候七卿之御方々も御同様御召帰罷成度、今通ニ而は

朝廷之名義不相立、以後暴事蜂起不測之憂眼前ニ相見得申候、七卿之御方々内実ハ暴激之者共より被為遊御誘引候半と愚察仕候間、是以御帰京之上は御大怒を以輕罰之被為在御所置度奉存候、長藩之儀暴事之至ニは御座候得共、畢竟攘夷之一事不相振候処より右様私暴相奮候得は心志之分は左迄可惡事ニは無之、攘夷一条ニ付而は一昨年攘夷之御勅命相下、成程其時は押々之御勅命ニは御座候得共、

幕府を始御諸侯方已ニ御承知ニ相成候処、幕府於横浜

購金御与有之、其上私ニ被為在御下洛、右等之事ニ候得は随分

幕府ニも間隙も御座候得は、此上は是迄之事は一切不被為在御採用、公平正大之御所置可然奉存候、且長藩征討有之候而も容易之事ニは御座候得共、其より日本中動揺いたし長藩同轍之屏藩も難計、左候而内乱紛々ニ而畢竟機械も難召調、蚺蝮之勢遂ニ外夷之術中ニ陥り候は案中之事ニ而実ニ歎息之至御座候、長藩之儀、<sup>(實)</sup>実ニ国辱相濟度御座候得共、右様切迫之世態ニ候得は、御大恩を以神州之為被為在

御尽力度、是迄は始終薩長争威之様相見得、当時柄可歎之至御座候間、幾度も御解諭有之度候間、御一和之処被為在御所置度奉存候、

一九門御警固ニ付而は、小銃・鉦礮召備、過重之御警衛奉恐入候、乍併長藩并浪人御警ニ候得は、右様火器盛ニ不被召備候而も、御制様ニ付而は外ニ御大策御座在度候間、何卒火器之分は御取除ニ罷成度、九門御番

所人数も多分之至御座候間、是以両三人計廻番被仰付  
而可然奉存候、扱京中昨年来諸色一切沸騰いたし、今  
通諸藩多人数入込ニ罷成候而は今日之疲弊甚敷、竟ニ  
は諸国中疲弊差迫、機械之御手当も難被為召備候様相  
見得、実ニ長歎至極ニ御座候間、急速平準之被為在  
御大策度奉存候、

一幕府ニ付而は、非常之世態ニ御座候得は、江戸之城之  
様被為入候而は事之緩急不便利ニ而御座候間、以来は  
浪華城之様被為入度、左候得は京師御警衛之便ニも相  
成、尤長藩諸浪人之御牽制十分之御権策ニ相成申候半、  
何卒此節被為在 御転城度奉存候、左候而以来 御勅  
命相下り候節は事々 幕府江御命し、 幕府より御諸  
侯方江相下候様御座在度、左様無御座候而は、暴論者  
流氓ニ私策を狭ミ、御公家・御歴々之様蹈入長藩之覆  
轍到来仕申候半、右様暴事紛々罷成候も、畢竟 幕府  
之命感無之処より出生仕申候得は、以来は 王命ニ御  
基キ一入被為在 御精研度、左様御座候得は、 幕府

之命感振興、日本中一和之風罷成候半、左候而京師御  
警衛、以来は一ケ年之御交代を以、御三藩程被為在

御衛京候而可然奉存候、洋夷出没之世態ニ候得は、暫  
くハ海岸無之御方被為在御滞京、海岸之御方は直様御  
帰国相成、海岸之御手当急速被為在度、万一京師変事  
到来も候ハ、 幕府被為入、大坂ニ候得は随分緩急相  
務り申候半欵、何卒 幕府浪華城之様被為在 御転城  
度奉存候、

右は実以愚策恐多奉存候得共、当時之世態不堪感慨、  
区々之情難黙止献白仕申候、所謂愚夫言之、而明主  
扱之と申言も御座候得は、何卒不惡様  
御採用被成下度奉存候、誠惶謹言、

子  
二月  
一番御旗本  
村橋昇組下

新納清之丞

文書原寸 縦 一八種 包紙原寸 縦二〇・七種

横三六〇種

横二八・五種

禮置 森喜藤太猷策

久光公ノ命ニ応シテ

(表紙)  
「上」

此節當時天下國家之大計急務可申上旨被 仰出之  
趣、謹而承知仕、不肖をも不顧、乍恐左ニ奉言上  
候、

一 外寇之儀は人心憤発之機会を不失、此涯攘斥被遊候筋  
一 利有之候得共、武備不相整理事御所置可難被成、又  
武備全備之上攘斥被遊候も一利有之候得共、兎角武備  
全備之期は十年を出可申、夫迄被延置候而は却而人氣  
相弛、有志之者は沸騰仕、終ニ

皇国挽回之程無覚束、依之今四五年も被延置、其内屹  
と武備御手を被為附候様有御座度、其御手当向は先人  
氣鼓舞被遊候外有御座間敷、是迄慷慨激烈、人心一和  
無之次第、畢竟皇化不振外夷之侮を受候事に有之候、  
就而は王侯嶮を設而其国を固之意ニ基き、第一風化之

源ニ有之候

帝都ニ御座候得は、迅速ニ土木を起し、摂海は勿論其  
外夫々御手を被為附、天下之耳目を拭候程之御造作被  
為在候ハ、四方仰望、闔国令無して吾先ニと武備ニ  
手を附候儀疑無之、左候而時変ニ応し御制度も御変革  
無之候而は決而不相濟事ニ而、是迄御政事混と 幕府  
江被仰付置候得共、国事御取扱向 將軍家片時も京地  
難被為離砌柄、且 幕府之儀

帝室翼戴之為ニは御座候得共、或ハ争奪ニ及ひ、或ハ  
朝令ニ逆ひ、却而

帝室衰微罷成、其弊不少、長大息之至御座候、鼓動致  
し安き世運、千載之一時不可失之機会ニ候得は、速ニ  
上古之御制度ニ被為復

神聖天下を經綸し給ふ意ニ基き、向後 將軍家京地江  
被召置、

朝廷ニ而御政事御取扱被仰付輔翼いたし候様、第二左  
之六ヶ条通、銘々旧弊を改煩苛を省、十日之視る処御

変革被仰付御相当可有御座、如斯御手を被為附候得は

富国強兵之策略は勿論、名実相当方端簡易相成、風俗

一新して武備攘夷御手当等も厳重行届候様相成候付、

万民も正暴となく慷慨沸騰之志気忽和団ニ及び、海内

を以一城郭とし、無遺憾各職分ニ安し可申、左候ハ、

今日之職務至而力を用ひ易く、事業日を追而熟得可仕

候、右通王政一統大本大義相立候時は、小末ニ至而は

不勞して治定可仕候、何分前文一二之件々、人氣鼓舞

之要枢、武備之事所由起ニ而、追々緩急ニ随而御所置

被為在候ハ、四五年ニは彼是平定して皇化四表ニ光

被し、屹と治強之廉も相見得、余威を以寇賊御誅伐有

之候様罷成可申候付、其節断然攘夷之明令被為在、可

然哉奉存候事、

一 征夷大將軍混と京地江被召置候上は、江戸之城江は御

三卿方等より城代被仰付、且諸国海辺之城下は都而引

払、海辺之儀は戦地相設候様被仰付度儀と奉存候事、

一 京師江向後大小名交代相勤、摂海江は夫々持口之場被

相立、是亦交代警固有之、可然奉存候事、

一 五畿内之年貢、御蔵江徴納被仰付度奉存候事、

一 公家之儀は大小名ニ御取立有之、近畿之地内又は御領

等江夫々被召移、向後天下之賢才を御選舉被遊、御用

途ニ被召仕、公家・武家之差別無之様有御座度奉存候

事、

一 皇子

皇孫御雉染ニ而寺院江被為入候儀御取止被仰付、向後

御連枝之御世嗣無之御方江御養子、又は御縁与被為在

候筋可然儀と奉存候事、

一 大小名は受領名通称ニ相用、其外受領名不用様、且容

貌之儀一統惣髪、服章之儀は都而官服相用、無位無官

之者は素袍相用、貴賤高下各服色を以差別有之候様有

御座度奉存候事、

右之通御座候、誠恐誠惶謹言、

二月

二階堂部組伍長

森 喜藤太

文書原寸 縦二九種 横二種 八枚

遺器 園田彦五郎献策

久光公ノ命ニ応シテ

(包紙ウツ書)  
「上

封

川上勘解由組

園田彦五郎」

臣微才茂無之奉申上候儀奉恐入候得共、また不奉申

上候儀茂其罪不少奉存候故、愚存之趣左ニ奉申上候、

一乍恐此節就

御上京ニ而は、御国動揺天下御危薄之御時節、何共奉

恐入候、追々

御参内 御登城 御廟算ヲ以讓夷(讓)、此筋と御決定ニ茂

不相成哉ニ、右ニ付稍もすれは讓夷御差急キ之御方も

御座候哉ニ承、是は美以不容易事ニ而、只今讓夷之儀

御治定相成候而は不相濟御時節と奉存候、つらく

天下之形勢案考仕候得共、実ニ御危薄之御時節、何卒

讓夷之儀は今五六年茂被召延度、左様御座候而は恐懼

之姿ニ相見得候得共、いつれ十分ニ士氣は振ひ立候而

茂讓之器なく而はいか様共可為術茂無之、たとへ一度

は勝を得るとも再応之患如何とも奉存候、願くハ天

下諸侯へ御配金被為在度、左候時は器茂十分ニ相備、

何時なりとも可懼勢ひ無御座候、此儀は是非ニ有御座

度、万国勇士爰ニせまり候而は、こゝろハいか程猛く

おもひ立候而茂弛ミ可申端茂可有御座奉存候、

一兵庫より大坂迄之海岸ニ早々台場御築造被為在度、左

候而二十封度以上之大砲十分御備置被成度、同所は第

一之海要ニ御座候、大砲之儀は俄ニ鑄方茂六ヶ數御座

候間、無御抛外夷ニ公義より御達之趣も御座候ハ、

こゝろ安く御請可仕と存候、扱追々軍艦なども諸国へ

御取入有御座度、終ニは夷国を茂此方より寄而可討勢

ひに茂相成候ハ、なにとなく恨茂絶得可申、一向ニ

讓夷御急き被為在候は、当座は事いさきよく世にひら

き人氣茂振ひ可申、一度は兔も角再応之うれひ如何と奉存候、其節ニいたりて和睦ニても相成候時宜ニハ、今先きに茂申上候通五六ヶ年御延ニ相成候ハ、却而天下ニ御威光も振ひ可申欵奉存候、扱台場は広太之御金入ニ茂可相成候、是は兵庫・大坂之富家へ

尊王之御為御用金差上候様、屹と被仰付度奉存候、  
一長府一向謙夷之

勅命を重し、外夷之帆影さへ相見得候得は致砲発、誠ニいさきよくハ候得共、今更ニ相成候而はケ様之御時節ニ茂上京等不致、三条公其外公家衆偽計ヲ以おひきいたし、其上追々浪士なと相招き、今形ニ而は一國籠城ニ相見得、天下之混乱を相待姿ニ御座候、今形ニ而は一変眼前と奉存候、とふか無事之御取計被為在度、  
一先乍恐

勅命ヲ以上京被仰付度、左候時は不奉畏と申儀は有御座間敷、其迎茂不奉承知、弥籠城罷在候ハ、早々御征兵御差向、御征討茂可然奉存候得共、窮城之敵ニ御座

候得は大ひニ味方を損し可申、願くハ近國之諸侯へ境

目堅く御守らせ被成候ハ、兩三年不過不戦候て滅國

うたかひなく奉存候、當時は天下之人心動揺いたし罷

在候砌ニ而御座候得は、何事茂 公武御合体いよく

御治定之上欵と奉存候、扱取沙汰承候得は、外夷長府

へ軍艦數艘差向ルと之事、いよく実説ニ茂御座候ハ、

公義はいまた御結契之事ニ御座候間、無御抛和を被為

入度奉存候、一寸迎も彼ニ被取候而は、かしこくも

神州之御武威ニ茂相障、甚以奉恐入事ニ御座候、

一此分通諸國御大名 御参勤被為在度、当京は御普代・

外様御大名六頭位宛、繰廻ヲ以七ヶ年位ニ而交代被為

在度、左候而浪士なと御取締敵數御座候時は、永世御

長久無此上御事と乍恐奉存候、

一京中日増ニ諸色高料ニ成立、右はけしからざる事ニ御

座候、万民之苦を省察等茂不仕、利を得るヲ以道ニす

るハ商人之習俗とハ乍申、時勢茂不弁甚以不屈之仕業、

屹と御变革被為在度奉存候、扱從 公義は勿論京町富

家之ものへそれく之等ヲ以

尊王之御為御用金差上候様屹と茂被仰付度、左候而今  
日ニ御苦ミ被為成候 公家方へ御配金被為在度、天下  
之万士頻ニ所望欵と奉存候、

一粟田山境内へ被召立候塩硝藏之儀、外ニ宜敷場所御見  
合被為在度、又は今形被召置候ハ、番人被召置度、只  
今之様人家相離れ候而ハ、当時柄いか様邪惡之者有之、  
万一夜ニ差越、番人差殺塩硝被盜取欵、または火を付  
候茂難計、第一は岡崎御屋敷眼下ニ見卸す場所ニ御座  
候間、追々は御遙衛ニ茂相成可申奉存候、

一此節被召列候人数士節相乱し申儀ニは無御座候得共、  
一先時節之規則相立候様御沙汰被為在度、乍恐奉存上  
候、扱一ヶ月ニ一度位は岡崎之御屋敷ニ而一隊之訓練、  
不時ニは大砲之連発など被仰付度、是は万国万士恐懼  
する之良策欵とも奉存候、

一山科宮様御儀茂 尹宮様御連枝之御事ニ茂御座候間、  
御同様御付人被為在度、万国万士之目当ニ茂可成事ニ

御座候間、第一ニ御人撰被為在度、乍恐奉存候、

一諸武芸ニ出席之人ニは、何欵御沙汰被為在度、第一士  
氣之励みニ茂相成事ニ御座候間、惠承之儀奉恐願候、  
一当年中ニ茂 御滯京被為渡御模様ニ茂被為在候は、被  
召列候人数之内、実ニ困窮之者も有之哉ニ御賦金ニ而  
不相足と申儀ニは有御座間敷候得共、多人數之家内相  
抱、またハ老母なと有之哉之人も承、難有被成下候跡

御扶持米ニ而介命は仕候得共、寒暑之時服彼是江有之、  
実ニ君子之御義は勿論、父子之情合もふたつながら難  
忍、交代ニ而茂御吟味之上被仰付候ハ、何様被為在候  
哉、しかし此儀は人氣ニ茂相係候訳合、殊ニ時節ト申、  
何共難被申奉恐入候、

一大島外二島之儀茂いまた空地御座候由、精々御吟味有  
御座度、第一之御国産いづれ富国強兵なくてハ公武之  
御為、且は讓夷之御良策六ヶ數、乍恐奉存上候、

右は 御採用之一端ニ茂不罷成儀と奉恐懼候得共、  
存寄之趣奉申上候、誠惶敬白、



子  
二月

園田彦五郎

文書原寸 縦一八・五種 包紙原寸 縦二六種

横 二四八種

横四〇種

追加五 御徒目付伊集院甚助ノ建言

京都ニテ国家ノ大事ヲ建言セヨトノ久光公ノ

命ヲ拝シテ

(包紙ウツ書)  
「上」

御徒目付

伊集院甚助

私事兵庫江差越居候処、御国家之大事存寄申上候

様、日限を以被仰出候由承知仕候、最早御用ニ茂罷

成申間敷奉存候得共、兼而愚存之趣左ニ申上候、

一此節 將軍家御上洛諸御大名方御上京ニ付而は、

朝議御評決之上被遊御引取、是迄之通江府江御參勤相

成筋御座候哉、當時之形勢伝奏衆より御直達之御模様

ニ相見得、尤諸家方永久之屋敷構御手相付候形ニ而は、

鎌倉以前之振合ニ被為復候御仕向ニ御座候哉、草野之

人心疑惑仕次第ニ御座候、何れ之筋ニ茂此大綱一途ニ

御治定無御座候而は、幕府之命令茂不被行、天下治平

之期有御座間敷哉、攘夷等之儀は枝葉之事ニ而、今形

ニ而は往々各国互ニ榮利を争ひ、長州如キ之事教限な

く到来可仕哉、余事は被捨置、此大根元不乱様ニ御評

議第一之御事ニ奉存候、

一當時浮浪之者迄も天下之大事を謀議いたし候向に成立、

下情上ニ通し候分は誠ニ目出度事ニ候得共、等を越上

ニ達候弊風、亦其害不少儀ニ奉存候、夫々役筋ニ相付

申出候様、屹と綱目不乱様御処置有御座度奉存候、

一世界五大州之内アセヤ州は、大形人之貌も同く、殊ニ

唐国は上古より聖賢生れ、天理明に人倫之教正敷、礼

義相備ひ中華と称し、外国は皆夷と唱候儀尤之事ニは

候得共、終ニ威徳衰へ韃靼之有と成しは、唐人共中華

自漫片腹いたき事ニ御座候、我国上古

神皇代々生し給ひ、君臣之道明かにして

皇統連綿たる事四海無双、君子国と称し候事実ニ無故儀ニあらず、併中古天竺之仏ニ迷ひ、過半は彼の指揮

に陥しは自漫もいたしかたき事ニ御座候、外四大州は

或紅毛茶色目にして貌異なれと、近来追々相開け、尊

君愛民之道は異ならず、然はいつれ茂天地同胞之者ニ

而獸類ニは無之故、天之御心ニは親疎なく、天下之品

物といへとも互ニ有を以無に通し生育を遂度思召ニ御

座候半、四方ニ交を絶、湊を鎖し、専彼を夷賊ト賤め

かたき儀ニ奉存候、其上方今和親交易御約定相成居候

上は、無故攘夷に及候而は、彼義ニして我不義ニ当り

可申、併我国有用之品物生民之苦に成程之数は渡へき

事ニ無御座候間、実意を以相断差留可被宜事ニ御座候、

彼か欲る所之白糸・椎茸・茶・昆布・するめ之類、格

別害なき品は長崎等辺鄙之地ニ而屹と法度規則被召立、

無用之翫器を禁し、我国ニ而俄ニ製造なし難キ軍鑑・

大砲等之品と交易し、万代永久之防禦器械を相備候様

有御座度奉存候、白糸は貴人有用之品ニは御座候得共、

都会之地ニおいては下賤之者迄も絹布相用無限驕に御

座候間、貴人之外一切禁止して、都而綿類用候ハ、格

別之事ニ茂罷成申間敷事ニ奉存候、

一此節兵庫并泉州堺之台場す多付之大砲一覽仕候処、い

つれ茂短筒之上ちひさく、異国軍艦と戦争之実用ニは

如何可有御座哉と疑惑仕候、各国之台場も同様之事共

ニ而は有御座間敷哉、器械相備居候所無覚束儀と勘考

〔可カ〕仕候、

右は近比憚多奉存候得共、存付之俣不顧多罪奉言上

候、誠惶謹言、

二月 伊集院甚助

文書原寸 縦一六・七種 包紙原寸 縦二四種

横 二七六種 横三四種

遺書 大政委任ニ付將軍ノ奉命

合二通

三月七日

追加四六ノ一

征夷將軍儀、是迄通

御委任被遊候上は、弥以

叡慮遵奉、君臣之名分相正、闔国一致奏攘夷之成功、人

心帰服之所置可有之候、国事之儀ニ付而は事柄ニ寄、直

々諸藩江

御沙汰被為在候間、兼而

御沙汰被成置候事、

三月

文書原寸 縦一七・五 横四三・五

追加四六ノ二

都而是迄之通御委任之儀、蒙

御沙汰奉畏候、然上は御国政向都而前々之通差図仕候事

ニ御座候得共、

叡慮之趣は無御腹藏相同度候、此段奉申上候事、

関東政事向不行届之義も御座候ハ、無御遠慮 御  
教諭被為在候様奉願候事、

文書原寸 縦一七・五 横四七 横

遺書

本田源吾ヨリ久光公へノ建言

二通

造士館振興ノ件

追加四七ノ一

(包紙ウラ書)  
一上

〇

┌

乍恐口上

臣至愚恭ク謹テ惟ルニ、造士館之儀ハ、先公深ク御賢慮

ヲ以御手召付サセラレ候得共、其詮無之、誠ニ以悲歎之

次第御座候、殊ニ学校ハ国家之枢機ニシテ、人才ヲ養育

スル要所ニ御座候、然処方今之世態甚タ危急存亡之時ニ

テ、益学校ヲ盛ニ振興シ、人傑ヲ養成イタシ、早ク天下

興復ノ地盤ヲ居ヘ、御当家一藩ヲ以大義ノ一筋ヲ天下ニ唱ヘ、振古所無之、大恥辱ヲ一時ニ雪キ、

王威ヲ海外ニ耀シ、国家太平之大治ヲ敷度御座候、兔角此ノ事ニ付テハ、先後本末御座候、学校ヲ振興シ、人品之得失ヲ相正シ、人才ヲ養育スルヲ以本始トシ、富国强兵之事ヲ末終トス、斯ル天下之大変ニ臨テハ英傑多不能居候テハ迎モ存分ニハ参ラスト奉存候、根本枝葉・大小緩急之差別モ不弁、口弁而已尊攘之義ヲ唱ヘ候輩モ往々有之哉ニ承及ヒ、是ハ無益而耳ナラス、彼カ計中ニ陥溺シ恥ニ辱ヲ重ヌル場ニテ、実ニ

王朝之武威モ土泥ニ汚サレ、何以先人ニ地下ニ見シヤ、賢キ御見聞モ被為在候如ク、天下之人心沸蕩イタシ、姦吏因循ニシテ動レハ朝威ヲ輕蔑ス、何ヲ以

勅旨可被為致貫徹哉、於是始ニ造士館ヲ一新シ、二ニ書籍方、三ニ集成館、一涯盛ニ奮起リ候ヨウ御手召付サセラレ度御座候、学校ニ於テハ人才ヲ養ヒ、各其者ノ長所

ヲ取、向々之職掌御宛ヒ被為遊候は自ら本立道生ル道理ニテ、兵備モ調ヒ国力モ充滿可致儀モ候ハンヤ、タトヘ敵藩トハ乍申、挙テ大義ヲ天下ニ信ヘ行ヒ、敢テ祖宗之令名ヲ不辱コト、夙夜臣憂慮スル所御座候、論語顔淵篇子貢問政章之終ニ、自古皆有死民無信不立ト有之、コレハ体立用行ハル、ノ道理ニテ御座候、御仁政ト申モ成程君上之所ハ、御仁愛施サセラル、思召如山海被為在候テモ、賢徳之有司無之候テハ、難有御仁沢モ下ニ不被候、然ハ仁政ノ本ハ在得賢才、得賢才之本ハ在学校、学校ハ養賢徳之本ニ御座候、就中御歴々方ハ勿論、寄合之衆追々御国政ノ要路ニ当ラセラル、御方々ニ御座候得は、第一館中エ御出席相成、一涯御勉勵不被為致候テハ、別テ如何ノ御事ニ御座候、何レ根本培養シテ枝葉ヲ達シ、先後本末之序ヲ以、万事御手召付サセラレ度御座候、右之通御手召サセラル、儀モ被為在候は、親近遠疎富貴貧賤ニ不被為拘、賞罰ノ明法ヲ確乎ト召立サセラレ、兪其明法ヲ踐行ハセラレ度、コレ明君之御良法ト奉存候、仰キ願

クハ、臣申ス旨ヲ御取用ヒ可被遊饒モ御座候は、万分ノ  
一ツ 国精ヲ祐クル一助ニモ可罷成饒モ御座候ハンヤ、返々  
モ体用之所深ク御吟味被為在度奉存候、臣敬テ頓首、

甲子五月

本田源吾

文書原寸 縦一六・七種

包紙原寸 縦二・八種

横八四・五種

横二八・三種

追加四七ノ二

(包紙ウツ書)  
一上



┌

乍恐口上

鄙野微軀之臣猥リニ奉汚賢明、妄言之罪雖無所遁、臣タ  
ルノ職分敢テ不可不申、當時之急務先度申上候如ク、造  
士館之儀、時勢ニ疎ラスヨウ正実ノ学風振興シ、御領  
國中礼義廉恥之風俗引起サセラレ、上下一同心ヲ合、忠  
貞之道ヲ尽シ候ヨウ、御誠実ヨリ御手召付サセラレ度奉

存候、如此 皇国之汚名ヲ一洗シ、上古之正道ニ興復イ  
タシ候ハ、根本不立ハ十分之一ツモ存分ニハ参兼可申候  
ハンヤ、兩三度迄 御上京被為遊、有名ノ御大名方ト細  
々国是之御論弁ニ被為及、殊ニ御建言迄モ被為在候得共、  
遂ニソレ程ノ御趣意難相立、徒ニ御誠心ヲ劳苦イタサセ  
ラレタル而已ニテ、愚直之臣誠ニ残多奉存候、於是臣内  
意 御当家ニ於テ富国強兵之名実相立、天下ニ大義ヲ唱  
ヘントノ所存ニ御座候、此等ノ事ハ第一士風ヲ相正シ、  
忠貞志士之氣ヲ恢弘スルヲ以先務トス、正学行ハレ風俗  
廉直ナル時ハ、国家危急ノ憂ナキコトハ天地必然ノ道理  
御座候、伏テ惟ニ、先公右等ノ事ニ付テハ、大小本末  
之所能ク御見留被為在候也、館中ノ儀御手ツカラ学的迄  
モ認サセラレ御手召付サセラレタル御事ニ御座候、左候  
得は其低召置セラレ候テハ、別テ如何ノ御儀御座候、瞬  
速国家ヲ盤石ニ居置ル、ノ御処置被為在度奉存候、体立  
用行ルハ万古不易ノ道理ニテ、古人往々国家ノ為ニハ本  
末体用ヲ論議イタシタルコトニ御座候、殊ニ論語・孟子

体用之外有之マシク候、最近思録十四篇ノ如ハ、国事ニ

引当吟味イタシ候得ハ、過不及之憂ハ無之也ト奉存候、

右ノ如ク御手召付サセラル、ニ於モ、只館職ノ者共エ浮

華訓詰ノ学風ヲ相改メ、国家実地ノ学問イタシ候ヨウ、

屹ト法律ヲ立御委任被為在迄ニテ、外ニ計策ハ無御座候、

菅藤田東湖弘道館ノ惣宰ト成、大弊五事ヲ挙テ曰、心術

不正者不宜居館職、正人実学不宜廃業、撰職之選不宜在

彪、史業督課不宜迫蹙、虚文紛飾不宜助長、是則学問ノ

標的ト奉存候、今造士館ノ儀

先公御筆之意ニ相戻リ、習俗難改、日々浮靡因循ニシテ

礼義廉恥ノ俗全ク無之候、畢竟其大弊ノ由テ来ル所ヲ得

ト熟考仕候ニ悪弊之流出スル根原有之候ニ付、迎モ御趣

意難相立奉存候、然レトモ一大事ノ儀ニ候得ハ、草野臣

強テ非可申儀、賢明御見察之上御英断相成度奉仰候、恭

惶敬白、

六月朔日

本田源吾

文書原寸 縦一六・七種 横九三・八種

包紙原寸 縦二・五種 横二九種

遺書ハ 今藤新左衛門ノ国防守戦論

久光公へノ上書

（包紙ウラ書）  
一上

今藤新左衛門

論天下急務

今藤新左衛門

嗚呼方今之事勢。其当天地大变革之時欤。古之所謂夷狄。

不過曰蝦夷・三韓・蒙古而已。大抵雖叛服不常。而不過

以窃拠一隅侵擾一方。其討之或

天子親征。或命大将。常能奏功。遂不至以憑陵中原也。

夫今之所謂夷狄。非古之夷狄。其強弱固不可同日而語。

其堅艦利器。剏古今所未有者。以此遍歷万国。以謀貿易。

而当其鋒者。智勇俱無所施焉。則其待之道。彼扼腕忿

憤之論。非所能弁之也。亦因循苟且之見非所能為也。古

今事勢雖不同。然待夷狄之道不過。三策而已矣。曰守。

曰戰。曰和。然斯三者。必相須而濟。不可執一而論之也。

而論其先後。則莫先於守。而戰與和次之。杜牧有言曰。

上策莫若自治。而浪戰為最下。牧之論。古今不易之理也。

內必有自守之力。而後戰與和可得而言矣。苟我之力未充。

守備未整。人心未固。而與之議和。則適足以啓彼之侮而

長其驕。若是則其所以邀求於我者無所不至。而一旦憤然

與之戰。則一敗塗地。不能復振。遂以制命於彼矣。故必

自守之計已立。百戰百勝之形已成。而後欲戰則戰。欲和

則和。其權常在於我。而不為彼所制矣。然則當今之大計。

亦可以知耳。方今將軍諸侯。並聚京師。至今國是猶

未定。國異其論。人殊其見。天下紛然。未知所歸向焉。

且穀餽騰貴。財力耗屈。上下俱困弊。一旦兵連禍結。變

故百出。天下將有不測之患。當此之時。雖有智者。莫復

善其後矣。是故欲立自守之策。又莫先於定國是也。昔者

宋李綱。上書於高宗議國是。其說專務自守之策。而攻戰

則候於可為之時。夫宋之於金。不共戴天之讎。而其志在

混一中原。其擊之似不宜以一日而遷延。且當時群臣。率

皆畏懼戰。以講和為得策。而獨綱力主恢復。以破和議

之說。然其論乃若是。亦可以見緩急之序也。且夫今之洋

夷。皆以貿易為主。其擊之。非有一日不可緩之勢。我之

所以具器械修守備者。固得以優為於其際。或曰。然則方

今自守之策。宜先何施而可。曰

朝廷下明詔於天下。大治守戰之具。課幕府及諸侯。相

撰海及兵庫等要扼之地。築炮台。安大炮。列國各置戍兵。

諸侯悉就國。益治其政。富國強兵。守備完整。而後我之

強盛不可犯之勢立。而彼亦有所憚。不敢肆。若此則戰與

和。唯我之所欲。且至夫長藩人及亡命不逞之徒。亦皆曉

然知上意之所在。不能復立異論。斂手以俟命。是必然

之理勢也。苟不能早定國是。而諸侯率重兵。久聚京師。

日費千金。內外窮困。其弊有不可勝言者。詩曰。瞻烏爰

止。于誰之屋。居今之時。無變今之道。天下之事。實未

知其所底止也。謹論。

包紙原寸 縦二七・五種 横四〇・五種

遺器 久光公ヨリ參觀交代復旧ニ付幕府ヘノ建白

千二百七十号ノ写ニアリ

本文書ハ一二七〇号文書ト同文ニ付省略ス

文書原寸 縦 一六・八種 包紙原寸 縦二九種

横二五五・五種 横四一種

追加〇 將軍進発御用掛前衛後衛一覽







（表紙）

御進発御用掛 全









							御進發御用掛
村松出羽守 <small>同</small>	坪内河内守 <small>同</small>	竹本隼人正 <small>御發取</small>	酒井飛騨守 <small>御發取</small>	松前伊豆守 <small>同</small>	阿部豊後守 <small>同</small>	松平伯耆守 <small>御發取</small>	

							
諏訪安房守 <small>御發取</small>		木村兵庫頭 <small>同</small>	小笠原摂津守 <small>御發取</small>		井上信濃守 <small>御發取</small>	黒川近江守 <small>同</small>	神保佐渡守 <small>大御守</small>




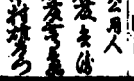




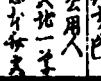
佐山八十次郎	宇田川平七	大久保徳岐守	溝口能登守	服部加賀守	野田下總守	須田淡路守	

			御進發御宿割	丸	衣	市	夷	
小旗綱吉守	馬	井上信濃守		丸	衣	市	夷	丘山與八郎
				湯淺守二弟	折込勉守	佐友清守	中修美守	

								○同河内國丹波
								柳本崇吉守
								桑生川次守
								乙中 守三
								小畑權吉守
								井上右八守
								中村七次
								○同河内小倉守
								羽田六次
								池谷守也
								小泉吉和
								後藤福助
								東浦清守
								茂村雙守
								赤坂信忠守
								西村六守
								坂本吉守
								東海守

<p>御馬印</p>  	<p>御馬印</p>  	<p>御馬印</p>  <p>從四位侍從 阿部豊後守 十五石 奥州白川 公用人</p>	<p>御馬印</p>  	<p>御馬印</p>  	<p>御老中</p>  <p>從四位侍從 松平伯耆守 十五石 丹後宮津 公用人</p>	<p>御進狼御供奉御役人</p>
--	--	--	--	--	--	------------------

<p>御馬印</p>  	<p>御馬印</p>  	<p>御馬印</p>  <p>松平周防守 四品 六万石 公用人</p>	<p>御馬印</p>  	<p>御馬印</p>  	<p>從四位侍從 松前伊豆守 三万石 公用人</p>
--	--	--	--	--	--


















<p>御馬印</p>  	<p>御馬印</p>  	<p>御馬印</p>  <p>從五位下 土岐山城守 三万石 上州沼田 公用人</p>	<p>御馬印</p>  	<p>御馬印</p>  	<p>從五位下 御若年寄 遠山信濃守 八千石 美濃東 公用人</p>
--	--	---	--	--	--






<p>御馬印</p>	<p>上立 中よき</p>	<p>後五位下 増山對馬守 三石</p>	<p>御馬印</p>	<p>上立 中よき</p>	<p>後五位下 立花出雲守 三石</p>
	<p>谷保の</p>	<p>勢州長</p>		<p>公用人</p>	<p>公用人</p>

	<p>酒井壹岐守 五石</p>			<p>竹本隼人正 五百石</p>		<p>御側衆 五十石</p>
<p>馬</p>	<p>馬</p>	<p>馬</p>	<p>馬</p>	<p>馬</p>	<p>馬</p>	<p>馬</p>

	<p>同頭取 一石</p>						
<p>馬</p>	<p>馬</p>	<p>馬</p>	<p>馬</p>	<p>馬</p>	<p>馬</p>	<p>馬</p>	<p>馬</p>


									
馬	修永 <small>二百表</small> 修永 <small>二百表</small> 修永 <small>二百表</small>	馬	秩父榮枯 <small>二百表</small> 秩父榮枯 <small>二百表</small> 秩父榮枯 <small>二百表</small>	馬	必願市券 <small>二百表</small> 必願市券 <small>二百表</small> 必願市券 <small>二百表</small>	馬	伴世 <small>二百表</small> 伴世 <small>二百表</small> 伴世 <small>二百表</small>	馬	坊之向 <small>三百表</small> 坊之向 <small>三百表</small> 坊之向 <small>三百表</small>

																		
馬	丸川 <small>二百表</small> 丸川 <small>二百表</small> 丸川 <small>二百表</small>	産木 <small>二百表</small> 産木 <small>二百表</small> 産木 <small>二百表</small>	石田 <small>二百表</small> 石田 <small>二百表</small> 石田 <small>二百表</small>	出聖 <small>二百表</small> 出聖 <small>二百表</small> 出聖 <small>二百表</small>	約身 <small>二百表</small> 約身 <small>二百表</small> 約身 <small>二百表</small>	村田 <small>二百表</small> 村田 <small>二百表</small> 村田 <small>二百表</small>	成徳 <small>二百表</small> 成徳 <small>二百表</small> 成徳 <small>二百表</small>	野石 <small>二百表</small> 野石 <small>二百表</small> 野石 <small>二百表</small>	大系 <small>二百表</small> 大系 <small>二百表</small> 大系 <small>二百表</small>	野石 <small>二百表</small> 野石 <small>二百表</small> 野石 <small>二百表</small>	成徳 <small>二百表</small> 成徳 <small>二百表</small> 成徳 <small>二百表</small>	小治 <small>二百表</small> 小治 <small>二百表</small> 小治 <small>二百表</small>	村田 <small>二百表</small> 村田 <small>二百表</small> 村田 <small>二百表</small>	約身 <small>二百表</small> 約身 <small>二百表</small> 約身 <small>二百表</small>	出聖 <small>二百表</small> 出聖 <small>二百表</small> 出聖 <small>二百表</small>	石田 <small>二百表</small> 石田 <small>二百表</small> 石田 <small>二百表</small>	産木 <small>二百表</small> 産木 <small>二百表</small> 産木 <small>二百表</small>	丸川 <small>二百表</small> 丸川 <small>二百表</small> 丸川 <small>二百表</small>

																	
馬	今坂 <small>二百表</small> 今坂 <small>二百表</small> 今坂 <small>二百表</small>	林系 <small>二百表</small> 林系 <small>二百表</small> 林系 <small>二百表</small>	劍術 <small>二百表</small> 劍術 <small>二百表</small> 劍術 <small>二百表</small>	松小 <small>二百表</small> 松小 <small>二百表</small> 松小 <small>二百表</small>	河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small>	河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small>	河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small>	河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small>	河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small>	河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small>	河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small>	河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small>	河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small>	河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small>	河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small>	河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small>	河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small> 河武 <small>二百表</small>

 <p>修庭軍之志 三百表 馬</p>	 <p>三柄虎巻 三百表 馬</p>	 <p>漢任八舟 三百表 馬</p>	<p>○同教授方</p> <p>六百表 三百表 百五十表 百五十表 百五十表 百五十表 百五十表 百五十表 百五十表</p> <p>戸田定吉舟 木村練舟 柳系姓舟 井上八舟 小川重舟 児玉番舟 大茶切舟 久川菖舟</p>
--	---	---	--

<p>忠内以三 三百表 馬</p>	<p>○同世彦海 三百表 馬</p>	<p>布能候舟 竹舟助舟 方田安舟 吉取津舟 福川小舟 上世西舟 修茂源舟 鈴木舟</p>	<p>○槍術師範役</p> <p>加茂米舟 三百表 馬</p>
---------------------------	----------------------------	---	---


 <p>約舟志彦舟 三百表 馬</p>	 <p>勝舟八舟 三百表 馬</p>	 <p>松浦友舟 三百表 馬</p>	<p>○同教授方</p> <p>三百表 三百表 三百表 三百表 三百表 三百表 三百表 三百表 三百表</p> <p>平岩舟 友以包舟 松尾舟 長橋舟 佐舟 多舟</p> <p>○同世彦海</p>
--	---	---	--

○砲術師範校	石壁豊次身	芝山金三身	万六万代	朝築正次身	榎本中次身	付 玉老身	長谷川孝老	湯上源平身	窪田基之助	林源茂公身	坂字源之助	坂本後入身	那田彦彦身	齋藤 善次身	竹内新次身
--------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------

○同敷校方	長田忠家身	林泉彦次身	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬
	長田忠家身	林泉彦次身	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬
	長田忠家身	林泉彦次身	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬
	長田忠家身	林泉彦次身	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬	坂 馬

○同世行名所	小橋康之助	本名石房	松原正太郎	奥野与三郎	荻田次郎	吉原	三浦	小畑	早川	今井	川橋	伏見	大久保	小橋
--------	-------	------	-------	-------	------	----	----	----	----	----	----	----	-----	----










<small>二百五十石</small> 長田孫一舟	<small>二百五十石</small> 針尾鐘吉舟	<small>二百五十石</small> 江口英吉舟	<small>二百五十石</small> 岩松吉舟	<small>二百五十石</small> 冷木孫吉舟	<small>二百五十石</small> 中島孫吉舟	<small>二百五十石</small> 之谷隆吉舟	<small>二百五十石</small> 大久保健吉舟	<small>二百五十石</small> 菊山康吉舟	<small>二百五十石</small> 吉松藏吉舟	<small>二百五十石</small> 赤塚龍吉舟	<small>二百五十石</small> 上田信吉舟	<small>二百五十石</small> 松平政吉舟	<small>二百五十石</small> 戸田孫吉舟	<small>二百五十石</small> 栗田孫吉舟
-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------














 大尾源方	<small>二百五十石</small> 筒外於長吉	<small>二百五十石</small> 龜里津吉舟	<small>二百五十石</small> 小世米吉舟	<small>二百五十石</small> 舟多孫吉舟	<small>二百五十石</small> 鏡深天敏方	<small>二百五十石</small> 金子基吉舟	<small>二百五十石</small> 岡根孫吉舟	<small>二百五十石</small> 千人頭	<small>二百五十石</small> 窪田孫吉舟	<small>二百五十石</small> 赤坂次	 馬
---	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-----------------------------	-------------------------------	-----------------------------	--


 石坂孫吉舟	<small>二百五十石</small> 萩系吉舟	<small>二百五十石</small> 陸軍御奉行	<small>二百五十石</small> 竹中丹後守	<small>二百五十石</small> 溝口伊勢守	<small>二百五十石</small> 陸軍御奉行	<small>二百五十石</small> 長田孫吉舟	<small>二百五十石</small> 長田孫吉舟
--	------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------




























 馬	 河野伊与守 二百石	 步兵御奉行	 大為守	 <small>河野信元 河野信元 河野信元</small>	 <small>河野信元 河野信元 河野信元</small>	 <small>河野信元 河野信元 河野信元</small>	 <small>河野信元 河野信元 河野信元</small>	 <small>河野信元 河野信元 河野信元</small>	 <small>河野信元 河野信元 河野信元</small>	 <small>河野信元 河野信元 河野信元</small>	 <small>河野信元 河野信元 河野信元</small>	 <small>河野信元 河野信元 河野信元</small>
				 <small>河野信元 河野信元 河野信元</small>	 <small>河野信元 河野信元 河野信元</small>	 <small>河野信元 河野信元 河野信元</small>	 <small>河野信元 河野信元 河野信元</small>	 <small>河野信元 河野信元 河野信元</small>	 <small>河野信元 河野信元 河野信元</small>	 <small>河野信元 河野信元 河野信元</small>	 <small>河野信元 河野信元 河野信元</small>	 <small>河野信元 河野信元 河野信元</small>

 馬	 平岡越中守 三百石	 馬	 戸田肥後守 十五百石	 馬	 久世下野守 二百石	 馬	 富永相摸守 三百石	 步兵頭	 馬	 小出播磨守 二百石
										 <small>小出播磨守 小出播磨守 小出播磨守</small>

 馬	 井上啓次郎 五百石	 馬	 深津弥左門 七百石	 馬	 森川莊治郎 三百石	 馬	 岡田左一郎 三百石	 馬	 德山綱太郎 三百石	 馬	 城部 三百石
											 <small>城部 城部 城部</small>

 都筑 鍊太郎			 朝比奈 織之丞			 山角 玄之丞			 小堀 小吉之丞			 長田 玄之丞			 竹村 内膳助			 天世 電次之丞			 松平 玄之丞			 藤原 玄之丞		
--	--	--	---	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	--	--	--	---	--	--	---	--	--	---	--	--

 後志 辰次之丞			 二田 勝之丞			 赤木 陽之丞			 秋山 清右之丞			 八田 篤之丞			 市川 末吉			 松田 平三之丞			 石文 常之丞			 天世 珍之丞			 松本 玄之丞			 友成 玄之丞			 赤川 大之丞			 幸田 夫八之丞		
---	--	--	--	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	---	--	--	---	--	--	---	--	--	---	--	--	---	--	--	---	--	--	---	--	--	--	--	--

 米田 哲次之丞			 上米 玄之丞			 内原 玄之丞			 平泉 玄之丞			 大塚 玄之丞			 篠田 玄之丞			 石川 玄之丞			 山角 玄之丞			 赤川 玄之丞			 赤川 玄之丞			 赤川 玄之丞			 赤川 玄之丞		
---	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	---	--	--	---	--	--	---	--	--	---	--	--	---	--	--

十二百 長子直	二百 久保綱之身	二百 松平大之身	二百 石井友之身	二百 竹村亦之身	二百 下松益之身	二百 山口久之身	二百 綿部光之身	二百 左波忠之身	二百 川村梅之身	二百 寺橋揚之身	二百 安藤左之身	二百 防能隆之身	二百 本多吉之身	二百 早登隆之身	二百 松田重之身	二百 大久保法之身	二百 宇津海之身	二百 木田隆之身
------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	--------------	-------------	-------------

二百 久世龍之身	二百 尾崎大之身	二百 坂方昭之身	二百 依俤松之身	二百 山田鈴之身	二百 松平友之身	二百 植木進之身	二百 尾系隆之身	二百 坂本化之身	二百 大河内清之身	二百 児島休之身	二百 堀之身	二百 大久保正之身	二百 大坂隆之身	二百 田中依之身	二百 山下之身	二百 小川雄之身	二百 小坂美之身	二百 小川美之身
-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	--------------	-------------	-----------	--------------	-------------	-------------	------------	-------------	-------------	-------------

二百 松平大之身	二百 古田又之身	二百 松平友之身	二百 織田重之身	二百 松浦巳之身	二百 藤原之身	二百 佐久乃八之身	二百 田代傳之身	二百 尾田隆之身	二百 小次隆之身	二百 長坂血隆之身	二百 千田隆之身	二百 川平隆之身	二百 大久保和之身	二百 下松隆之身	二百 山田隆之身	二百 石川隆之身	二百 尾田隆之身	二百 松平隆之身
-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	------------	--------------	-------------	-------------	-------------	--------------	-------------	-------------	--------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------

招有坊一弁	坂本平左衛門	久川安公弁	○同少段改修奉	是 勇方	山角礮之助	古山清之助	保坂右次	木田中久弁	若山保方	○同總次	波田力之弁	織戸名吉	若原段之助	坂田清之助	杉木利一弁	乙中貢作
-------	--------	-------	---------	------	-------	-------	------	-------	------	------	-------	------	-------	-------	-------	------

騎兵頭	五百兼	貴志大隅守	馬	山角礮之助	馬	○隊長兼改修奉	藏次右弁	目下清之助	田角清之助	○同系次	杉原十之助	乙川修十弁	波色三之助	長 吉弁
-----	-----	-------	---	-------	---	---------	------	-------	-------	------	-------	-------	-------	------

大谷全秀	田村江彦	○同少段改修奉	折 多一弁	御持小筒組頭	馬	松平信濃守	馬	大平鑛次郎	馬	天野 一	馬	○同系次改修奉	松平保之助
------	------	---------	-------	--------	---	-------	---	-------	---	------	---	---------	-------



<p>組 九百石 頭 一 美田造 馬</p>	<p>組 四百石 頭 二 太田 筑前守 馬</p>	<p>組 四百石 頭 二 林田 玄馬 馬</p>	<p>組 三百石 頭 三 本多 日向守 馬</p>	<p>組 三百石 頭 三 御書院御番頭 馬</p>	<p>組 三百石 頭 三 米倉 丹後守 馬</p>
------------------------------------	---------------------------------------	--------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------

<p>組 三百石 頭 三 中津 内通 馬</p>	<p>組 五百石 頭 五 八木 但馬守 馬</p>	<p>組 五百石 頭 五 長谷 宗基 馬</p>	<p>組 三百石 頭 三 柴田 越前守 馬</p>	<p>組 三百石 頭 三 板谷 経之丞 馬</p>	<p>組 三百石 頭 三 水野 伊勢守 馬</p>
--------------------------------------	---------------------------------------	--------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------

<p>組 七百石 頭 七 神長 勇 馬</p>	<p>組 三百石 頭 三 室賀 美作守 馬</p>	<p>組 三百石 頭 三 水谷 友之丞 馬</p>	<p>組 三百石 頭 三 嶋津 伊豫守 馬</p>	<p>組 三百石 頭 三 赤保 宗房 馬</p>	<p>組 四百石 頭 四 御小性組御番頭 馬</p>
-------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	--------------------------------------	--

<p>○大御目付 三十五石 馬</p>	<p>朝倉播磨守 五十五石 馬</p>	<p>○御性組御番頭格 五十五石 馬</p>	<p>松平河内守 三十五石 馬</p>	<p>因幡院 三十五石 馬</p>	<p>酒井安房守 五十五石 馬</p>
-----------------------------	-----------------------------	--------------------------------	-----------------------------	---------------------------	-----------------------------

<p>塚原但馬守 三百石 馬</p>	<p>駒井相摸守 二百七十五石 馬</p>	<p>大久保紀伊 六十石 馬</p>	<p>神保佐渡守 九百石 馬</p>	<p>田澤對馬守 二百石 馬</p>
----------------------------	-------------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------

<p>○因組 馬</p>	<p>星野清三守 百石 馬</p>	<p>○小姓友 百石 馬</p>	<p>井上信濃守 二百石 馬</p>	<p>松平對馬守 三十五石 馬</p>	<p>○御勘定奉行 三百石 馬</p>
------------------	---------------------------	--------------------------	----------------------------	-----------------------------	-----------------------------

○ <small>一ノ</small> 松野之平二	○ <small>二ノ</small> 松野之平二	○ <small>三ノ</small> 松野之平二	○ <small>四ノ</small> 松野之平二	○ <small>五ノ</small> 松野之平二	○ <small>六ノ</small> 松野之平二	○ <small>七ノ</small> 松野之平二	○ <small>八ノ</small> 松野之平二	○ <small>九ノ</small> 松野之平二	○ <small>十ノ</small> 松野之平二	○ <small>十一ノ</small> 松野之平二	○ <small>十二ノ</small> 松野之平二	○ <small>十三ノ</small> 松野之平二	○ <small>十四ノ</small> 松野之平二	○ <small>十五ノ</small> 松野之平二	○ <small>十六ノ</small> 松野之平二	○ <small>十七ノ</small> 松野之平二	○ <small>十八ノ</small> 松野之平二	○ <small>十九ノ</small> 松野之平二	○ <small>二十ノ</small> 松野之平二	○ <small>二十一ノ</small> 松野之平二	○ <small>二十二ノ</small> 松野之平二	○ <small>二十三ノ</small> 松野之平二	○ <small>二十四ノ</small> 松野之平二	○ <small>二十五ノ</small> 松野之平二	○ <small>二十六ノ</small> 松野之平二	○ <small>二十七ノ</small> 松野之平二	○ <small>二十八ノ</small> 松野之平二	○ <small>二十九ノ</small> 松野之平二	○ <small>三十ノ</small> 松野之平二
---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	----------------------------

○ <small>一ノ</small> 岡下	○ <small>二ノ</small> 岡下	○ <small>三ノ</small> 岡下	○ <small>四ノ</small> 岡下	○ <small>五ノ</small> 岡下	○ <small>六ノ</small> 岡下	○ <small>七ノ</small> 岡下	○ <small>八ノ</small> 岡下	○ <small>九ノ</small> 岡下	○ <small>十ノ</small> 岡下	○ <small>十一ノ</small> 岡下	○ <small>十二ノ</small> 岡下	○ <small>十三ノ</small> 岡下	○ <small>十四ノ</small> 岡下	○ <small>十五ノ</small> 岡下	○ <small>十六ノ</small> 岡下	○ <small>十七ノ</small> 岡下	○ <small>十八ノ</small> 岡下	○ <small>十九ノ</small> 岡下	○ <small>二十ノ</small> 岡下	○ <small>二十一ノ</small> 岡下	○ <small>二十二ノ</small> 岡下	○ <small>二十三ノ</small> 岡下	○ <small>二十四ノ</small> 岡下	○ <small>二十五ノ</small> 岡下	○ <small>二十六ノ</small> 岡下	○ <small>二十七ノ</small> 岡下	○ <small>二十八ノ</small> 岡下	○ <small>二十九ノ</small> 岡下	○ <small>三十ノ</small> 岡下
------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	-------------------------






○ <small>一ノ</small> 石野	○ <small>二ノ</small> 石野	○ <small>三ノ</small> 石野	○ <small>四ノ</small> 石野	○ <small>五ノ</small> 石野	○ <small>六ノ</small> 石野	○ <small>七ノ</small> 石野	○ <small>八ノ</small> 石野	○ <small>九ノ</small> 石野	○ <small>十ノ</small> 石野	○ <small>十一ノ</small> 石野	○ <small>十二ノ</small> 石野	○ <small>十三ノ</small> 石野	○ <small>十四ノ</small> 石野	○ <small>十五ノ</small> 石野	○ <small>十六ノ</small> 石野	○ <small>十七ノ</small> 石野	○ <small>十八ノ</small> 石野	○ <small>十九ノ</small> 石野	○ <small>二十ノ</small> 石野	○ <small>二十一ノ</small> 石野	○ <small>二十二ノ</small> 石野	○ <small>二十三ノ</small> 石野	○ <small>二十四ノ</small> 石野	○ <small>二十五ノ</small> 石野	○ <small>二十六ノ</small> 石野	○ <small>二十七ノ</small> 石野	○ <small>二十八ノ</small> 石野	○ <small>二十九ノ</small> 石野	○ <small>三十ノ</small> 石野
------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	-------------------------




 <p>頭紐 富永忠房 水門下</p>	 <p>中川備中守 十石 中川</p>	 <p>頭紐 二百表 多兵衛孫次 少右衛門守 馬</p>	 <p>須田久左門 九百石 須田</p>	 <p>新御番頭 御書奉令 馬</p>	 <p>林式部少輔 五百石 林 馬</p>	 <p>西御九御留守 馬</p>
--	--	---	---	--	--	---













 <p>馬</p>	 <p>諏訪安房守 四百表 諏訪</p>	 <p>御小性頭最叟 馬</p>	 <p>頭紐 二百表 修者六兵衛和 中谷中丁 馬</p>	 <p>岡部備後守 二十石 岡部 馬</p>	 <p>頭紐 百表 左兵衛忠房 中谷中丁 馬</p>	 <p>勝田左京 三十石 勝田 馬</p>
--	---	---	---	---	---	--

 <p>馬</p>	 <p>石谷安藝守 二百五十石 石谷 馬</p>	 <p>内藤土佐守 二百表 内藤 馬</p>	 <p>坪内豊前守 五百表 坪内 馬</p>	 <p>木村備後守 三百表 木村 馬</p>	 <p>野村丹後守 三百五十石 野村 馬</p>
--	---	---	---	---	---


										
	大久保下野守 <small>三百石</small>		依田伊賀守 <small>三百石</small>		神原主殿頭 <small>三百石</small>		池田伊豫守 <small>三百石</small>		跡部備中守 <small>五百石</small>	御小性衆
馬		馬		馬		馬		馬		

											
	木造肥後守 <small>二百石</small>		永田駿河守 <small>五百石</small>		諏訪甲斐守 <small>十石</small>		池田大隅守 <small>七十石</small>		村松遠江守 <small>五百石</small>		酒井民部少輔 <small>五百石</small>
馬		馬		馬		馬		馬		馬	

										
	石川近江守 <small>三百石</small>		進佐渡守 <small>十石</small>		松浦越中守 <small>三百石</small>		加藤筑後守 <small>百石</small>		溝口相摸守 <small>百石</small>	金田日向守 <small>三百石</small>
馬		馬		馬		馬		馬		


											
馬	内藤因幡守 三十一石	馬	酒井備前守 五十四石	馬	荒井伊勢守 三十一石	馬	松平兵庫頭 三十一石	馬	松平米女正 三十一石	馬	竹本美作守 三十一石

											
馬	土屋伊賀守 三十一石	馬	久貝相模守 三十一石	馬	蜷川左衛尉 五十一石	中興徳性殿				馬	藤井若狭守 三十一石

											
馬	関越前守 三十一石	馬	松平伊勢守 五十四石	馬	久永出羽守 三十一石	馬	水野河内守 三十一石	馬	稲葉紀伊守 三十一石	馬	岡部加賀守 三十一石

 馬	 山ノ中勢 十七百石	 馬	 本多初監 二百表	 馬	 三上少左衛門 六百石	 馬	 大沢少左 三百表	 馬	 本郷丹後守 五十石
--	---	--	--	--	--	--	--	--	---

 馬	 加茂衣色 十一百石	 馬	 美宗玄忠 十五百石	 馬	 向安森 九百石	 馬	 筒井次左衛門 九百石	 馬	 渡辺修理 千五百石	 馬	 鈴木百以郎 十石
--	---	--	---	--	---	--	--	--	---	--	--

 馬	 服部加賀守 三百石	 馬	 荒尾大和守 三百表	 馬	 横山紀伊守 三百表	 馬	 野田下総守 三百表	 馬	 須田淡路守 十石	 御小納戸頭取衆
--	---	--	---	--	---	--	---	--	--	--

河田 助之丞 三百表 馬	宇田川 平七 三百表 馬	石川 岩房 三百表 馬	後志 宗之丞 三百表 馬	河小畑 宗光 三百表 馬				







有賀 源次 百表 馬	松平 右次 五百石 馬	半志 清之丞 百表 馬	永井 内允 三百表 馬	門宗 信十郎 五百十五石 馬	中目 権之丞 三百表 馬			

系 宗之丞 三百表 馬	波 根 清之丞 五百石 馬	万 永季之丞 二百五十石 馬	吉 康 八之丞 百五十表 馬	古 尾 忠之丞 七百石 馬	松平 九之丞 九百石 馬			



沢間渡 守 三百表	尾文忠 守 三百表	平宗全 守 三百表	森 守 三百表	近谷 守 三百表	秋田勝 守 三百表		
馬	馬	馬	馬	馬	馬		


酒井 守 三百表	坪内久之 守 三百表	右田力 守 三百表	野田吉 守 三百表	川 守 三百表	保田 守 三百表	
馬	馬	馬	馬	馬	馬	








水野 守 三百表	中橋 守 三百表	吉松 守 三百表	木城 守 三百表	善山 守 三百表	大沢 守 三百表	
馬	馬	馬	馬	馬	馬	








 <small>十石</small> 大久保 <small>九百石</small> 馬	 <small>十石</small> 中 <small>九百石</small> 馬	 <small>十石</small> 酒田 <small>九百石</small> 馬	 <small>十石</small> 坪内 <small>三百表</small> 馬	 <small>十石</small> 三宅 <small>三百表</small> 馬	 <small>十石</small> 大久保 <small>二百石</small> 馬
--	--	---	---	---	--

 <small>十石</small> 松田 <small>三百表</small> 馬	 <small>十石</small> 細井 <small>六百石</small> 馬	 <small>十石</small> 丹持 <small>五百石</small> 馬	 <small>十石</small> 阿部 <small>二百表</small> 馬	 <small>十石</small> 渡辺 <small>二百表</small> 馬	 <small>十石</small> 加茂 <small>四百石</small> 馬
---	---	---	---	---	---

 <small>十石</small> 松倉 <small>三百表</small> 馬	 <small>十石</small> 為我 <small>八百石</small> 馬	 <small>十石</small> 山本 <small>三百五十石</small> 馬	 <small>十石</small> 岩根 <small>九百石</small> 馬	 <small>十石</small> 於菟 <small>五百石</small> 馬	 <small>十石</small> 門前 <small>五百石</small> 馬
---	---	---	---	---	---

								
	全田之丞 三百表	有田之丞 六百表 小幡物屋上		勝之丞 百表		松下大之丞 三百表		山崎健之丞 百表
馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬

							
					没乐神 三百表		松浦九系 十五百表
馬			馬	馬	馬	馬	馬

							
今堀之丞 百表	三指虎 二百表	修虎軍 三百表	河東源 三百表		上野源 三百表		竹内之丞 三百表
馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬














百五十石	安藤 兼光	三百石	長谷川 健兵衛	三百石	加茂 英兵衛	池部 方	百五十石	若田 重兵衛	百五十石	紅林 勘十郎	百五十石	伊藤 忠兵衛	百五十石	河野 清三郎	百五十石	山田 忠兵衛	百五十石	久保 重兵衛	百五十石	根岸 重兵衛
------	-------	-----	---------	-----	--------	------	------	--------	------	--------	------	--------	------	--------	------	--------	------	--------	------	--------






百五十石	日向 波三郎	百五十石	富田 重兵衛	百五十石	橋本 重兵衛	御旗奉行	百五十石	松友 佐治	百五十石	山崎 重兵衛	百五十石	柳 鋤壽	百五十石	石房 重兵衛
------	--------	------	--------	------	--------	------	------	-------	------	--------	------	------	------	--------

百五十石	仙石 権蔵	百五十石	御持筒頭	百五十石	松平 信之	百五十石	若我 主水	百五十石	水野 主権	百五十石	朽木 大智
------	-------	------	------	------	-------	------	-------	------	-------	------	-------

 加茂鐵之助 三十石 馬	 本間孫五郎 十石 馬	 友次源次郎 三百石 馬	 三枝右左衛門 十石 馬	 三吉平吉 三十石 馬	 三枝右左衛門 十石 馬	 三枝右左衛門 十石 馬	 三枝右左衛門 十石 馬	 三枝右左衛門 十石 馬
--	---	--	--	---	--	--	--	--








 戸田實平 五百石 馬	 上野七右衛門 四石 馬	 三友力之助 三十石 馬	 水谷源次郎 二十石 馬	 大友保右衛門 五十石 馬	 田村右左衛門 二百石 馬	 田村右左衛門 二百石 馬	 田村右左衛門 二百石 馬	 田村右左衛門 二百石 馬
---	--	--	--	---	---	---	---	---






 小俣頼之助 十石 馬	 小俣頼之助 十石 馬	 竹内日向子 六十石 馬	 木村左衛門 三十石 馬	 津田右左衛門 十石 馬	 佐野源次郎 十石 馬	 佐野源次郎 十石 馬	 佐野源次郎 十石 馬	 佐野源次郎 十石 馬
---	---	--	--	--	---	---	---	---

 井上元七郎 <small>百石</small> 馬	 新見山内 <small>三百石</small> 馬	 牧野修徳 <small>三十石</small> 馬	 向山栄六郎 <small>百石</small> 馬	 清田鐵次 <small>六十五石</small> 馬
--	--	--	--	---

 松井孫八郎 <small>十七百石</small> 馬	 長田六左衛門 <small>十三百石</small> 馬	 山田十重 <small>千五百石</small> 馬	 木下善三郎 <small>十石八石</small> 馬	 池永鑄次郎 <small>三十二百石</small> 馬	 伏屋七之助 <small>千三百石</small> 馬
--	---	---	--	---	--

 大屋栄母 <small>千五百石</small> 馬	 松浦玄祐 <small>三十五百石</small> 馬	 池田鑄次郎 <small>三十石</small> 馬	 岡本三右衛門 <small>十石</small> 馬	 松平次金右 <small>一千石</small> 馬	 松平鑄次郎 <small>六百石</small> 馬
---	--	---	---	---	---

						
松平玄洋 馬	津口友太郎 馬	所使番元 馬	村越二十舟 馬	本多左内 馬	関保右衛門 馬	水谷善清 馬

				
小堀大守 馬	大森金兵衛 馬	酒井政子 馬	有馬式部 馬	朽木徳六 馬

					
大坂左衛門 馬	产田徳三郎 馬	阿保進右衛門 馬	酒井岩太郎 馬	松平金人 馬	市井一守 馬







山田十右衛門 十五百石 林田十右衛門	木原長三郎 一季八石 木原長三郎	永井大之丞 十石 永井大之丞	寛助長三郎 十四百石 小田原十右衛門	依田清之助 十石 依田清之助	渡邊長三郎 十五百石 渡邊長三郎		
馬	馬	馬	馬	馬	馬		










竹尾戸一舟 十二百石 竹尾戸一舟	柳生五郎 十百石 柳生五郎	井戸大内丞 二十五百石 井戸大内丞	藤合右衛門 十百石 藤合右衛門	城隍人 二十石 城隍人	松平重才 五十石 松平重才		
馬	馬	馬	馬	馬	馬		

山田十右衛門 二十石 山田十右衛門	飯沼左衛門 二十石 飯沼左衛門	永見大之丞 三十百石 永見大之丞	二好内丞 二十百石 二好内丞	松平重才 十五百石 松平重才	古跡長三郎 三十百石 古跡長三郎		
馬	馬	馬	馬	馬	馬		

 馬	 池永徳公舟 二十五石 馬	 仙石清吉舟 二十石 馬	 建於徳公舟 十石 馬	 黒田又吉舟 十一石五斗 馬	 安友徳公舟 十五石 馬	 松平修儀 二十五石 馬
--	---	--	---	--	--	--

 河野初吉舟 十五石 馬	 伏屋吉舟 十三石 馬	 牧 修理 十二石 馬	 長田六吉舟 十二石 馬	 松野孫八舟 十五石 馬	 松野八舟吉舟 九石五斗 馬
--	---	---	--	--	--

 若根政吉舟 十六石 馬	 松野初吉舟 十五石 馬	 吉川全次舟 十石 馬	 長谷川以三舟 四石七斗 馬	 水上鏡吉舟 三石 馬	 小笠原秀吉舟 二十六石 馬
--	--	---	--	---	--





 上馬 馬	 井上左衛門 九百石 馬	 山田 馬	 田村 八百石 馬	 所沢地所 馬	 松平 二百石 馬	 松平 馬	 松平 千石 馬	 松平 馬
--	--	--	---	--	---	--	--	--






 素山 五百石 馬	 飯沼 二百石 馬	 余部 三百石 馬	 楠 五百石 馬	 所沢 馬
---	---	---	--	--

 中條 馬	 川村 馬	 松平 馬	 中條 馬	 所沢 馬
--	--	--	--	--



 石川左内 <small>五百石</small> 馬	 蝶川部 <small>五百石</small> 馬	 奥津 <small>一百石</small> 馬	 本多 <small>五百石</small> 馬	 相下 <small>二百石</small> 馬
--	---	--	--	--

 友成 <small>二百石</small> 馬	 竹葉 <small>二百石</small> 馬	 茶屋 <small>六百石</small> 馬	 間文 <small>四百石</small> 馬	 山元 <small>六百石</small> 馬
--	--	--	--	--

 友成 <small>二百石</small> 馬	 若板丹 <small>百石</small> 馬	 内者 <small>百石</small> 馬	 同組 <small>百石</small> 馬	 河腰 <small>百石</small> 馬
--	--	---	---	---

<p>○表 ○表 ○表</p> <p>下茶 中茶 中茶 中茶</p> <p>湯修業一舟 中治丸一舟</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>
---	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------

<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>
---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------

<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>	<p>○表 ○表</p> <p>馬</p>
---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------



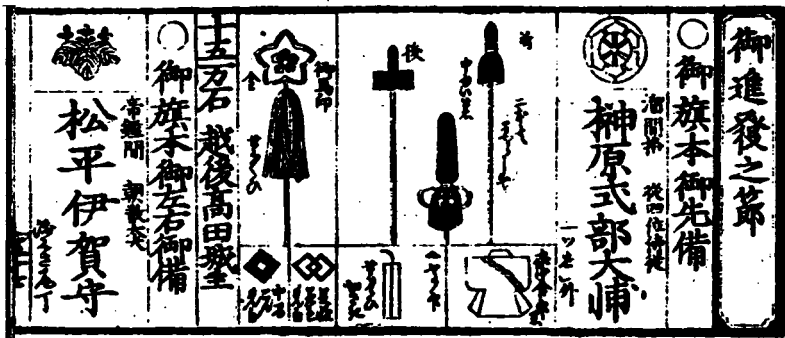
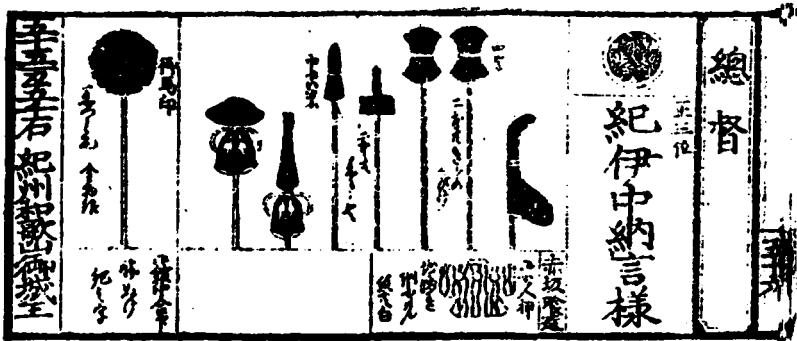
○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

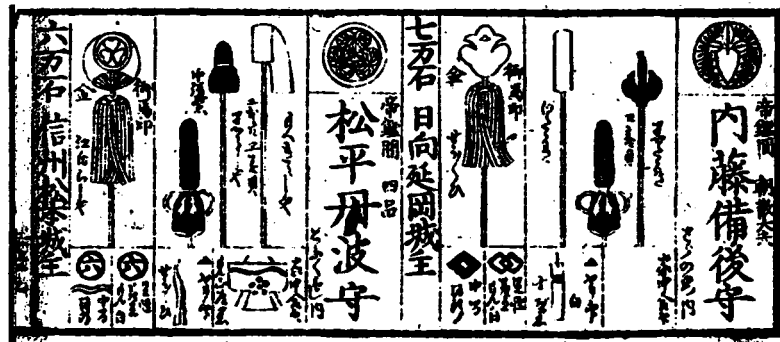
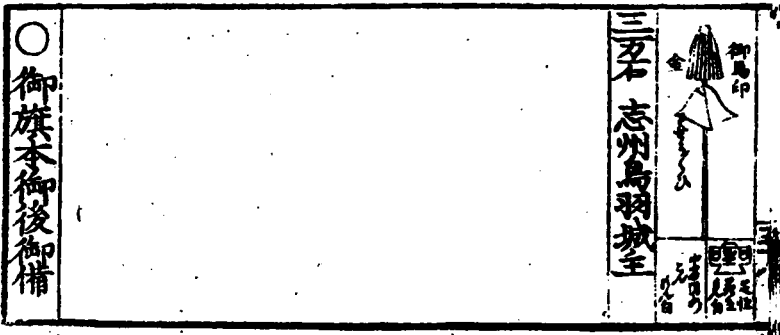
○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰	○小川良辰
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

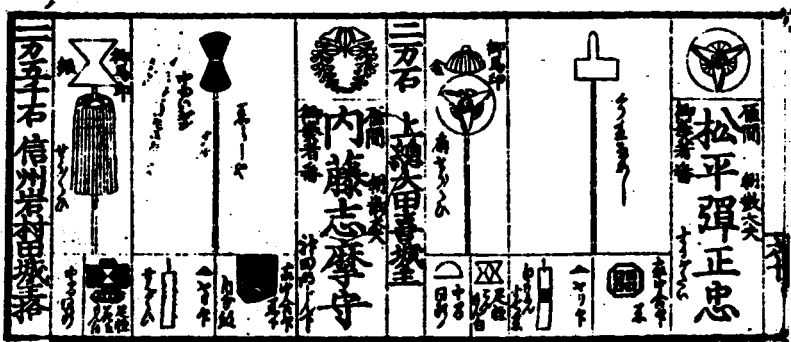
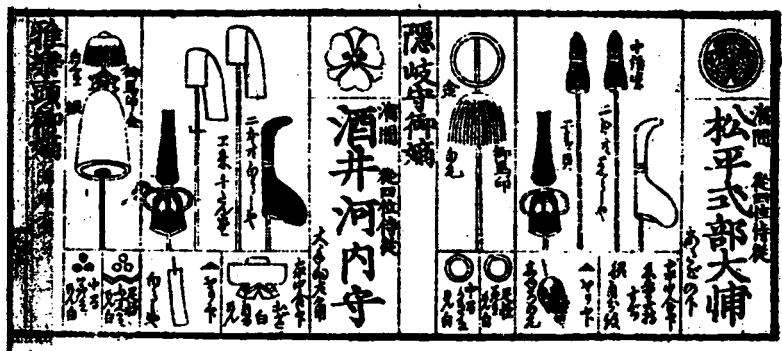
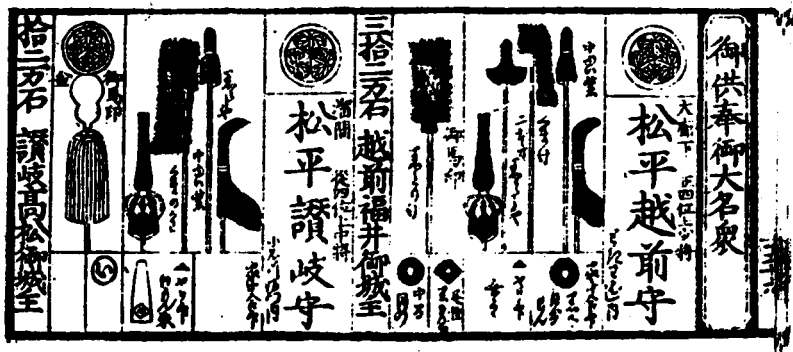





















<p>三石 越後守板垣主</p>		 <p>井伊兵部大輔</p>	<p>五石 河津藩主</p> 			 <p>井伊掃部頭</p>
------------------	---	---	--	---	---	--

 <p>平岡丹波守</p>	 <p>田沼玄蕃頭</p>	 <p>酒井飛騨守</p>	 <p>水野和泉守</p>	 <p>本多美濃守</p>	 <p>酒井雅樂頭</p>	<p>御進登節御留守</p>
--	--	--	--	--	--	----------------

 <p>溝口主膳正</p>	 <p>津車越中守</p>	 <p>上杉式部大輔</p>	 <p>南部美濃守</p>	 <p>酒井左門尉</p>	 <p>松平刑部輔</p>	 <p>松平下總守</p>
--	--	---	--	--	--	--

	
三河 松平	大寶 佐竹
河内 確堂	從四位上 京奈

横帳原寸 縦六・八種 横一六種 六〇枚

慶應元丑年五月開板

京都三條通

出雲寺文次郎

大塚齊藤

河内屋茂兵衛

同 伊丹屋善兵衛

江日本橋通五丁目

須原屋茂兵衛

江芝柿町

岡田屋嘉七

岡所

内野屋弥平治

江横山町

御節 出雲寺文次郎

邊聖 栗原又楽 (信充) 官位令ノ冠位講義等

(包紙ウツ書)  
「御書附」

三通

追加五一ノ二

官位令講義卷一

上古被髪ノ説アリ、此処江此図ヲ入、

上古ウズノ説アリ、此処へ入、

同ヒサコハナノ説アリ、

皇朝冠位ノ初ハ十二階ノ処へ 此冠ヲ入、

次二十九階、

次ニ廿六階、然シテ

大宝ノ卅階トナル順次ニ御座候、

信充

追加五一ノ一

栗原又楽殿より被差出置候筆墨紙等相渡候通帳江

同人認被置候写

去丑八月被 仰付候、

類聚国史 二百卷

日本後紀 四十卷

右は書写校正

令講義 凡百五十冊

職原抄私記 凡十五冊

日本紀私読本 凡六十冊

右著述入用書物代并筆墨紙料

文書原寸 縦一五・七種 横三五種

文書原寸 縦一五・五種 横二七種

追加五一ノ三

(表紙)  
「たれかミ ひさこはな 冠位令講義  
函之料」

官位令・衣服令の内へ差加可申心組にて、多年貯置候肖  
像千三百余人、其外器物ハ儀制令・軍防令・戸令・雜令・

田令等へ入可申と存候分二三種宛、是又三千種ほとも所持仕候内、此被髪・うず・ひさこはな・冠位十二等ミナ暗記のことに候間、本書御うつし取ならてハ御用立申間敷、且老眼細図仕り兼候間、白圭召連不残為写申度奉存候、

信充

被髪 上古の体



ひさこはな 十六歳以上  
廿歳まで



但 貴人の御上

和泉金熊寺  
彦五瀬命真影如是

上宮太子真影

あけまき 十六歳以上  
廿歳まで

中男 戸令



十五歳以下少男



十五歳以下少女



大和  
西大寺伎楽部少男少女の体

うず 廿一<sup>オ</sup>以上<sup>上</sup>男子  
木枝を以てとむる



冠位 皇太子 法隆寺菅叙太子  
かくの如し



トリスラコト  
撮総如<sup>レ</sup>囊  
着<sup>レ</sup>縁

日本紀景行天皇の御宇より

推古天皇十一年より

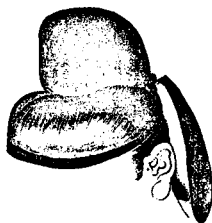
たしかに之也

元日着<sup>二</sup>鬘華<sup>一</sup> かくの如し

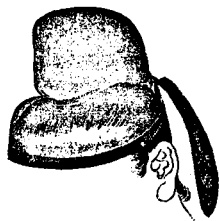


西大寺資財中ニ真物アリ

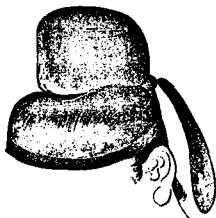
冠位 大徳深紫の縁<sup>ヱ</sup>



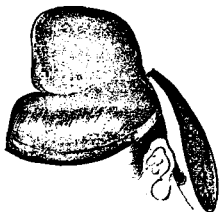
小徳 深紫の内に  
浅紫あり



大仁 浅紫



小仁 浅紫の内浅紫



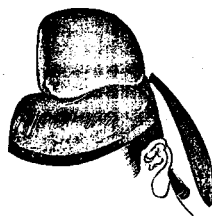
大礼 深緋



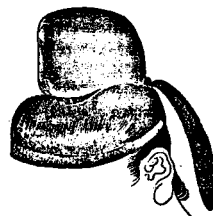
小礼 深緋の浅



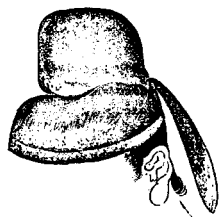
大義 深緑



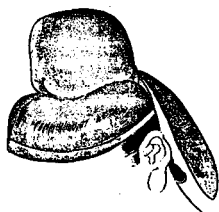
小義 浅緑



大信 浅緋



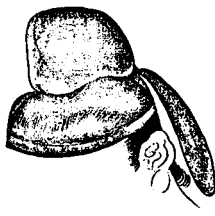
小信 浅緋の浅



大智 深縹



小智 浅縹



右以暗記託白圭穿之、他日以真本改之、

冊子原寸 縦二七・七種

包紙原寸 縦三九・二種

横 二〇種 一一枚

横 二五・七種

遺聖 在京諸大名参内日割仰出書

(端裏朱書)  
乙丑十二月より丙寅正月迄

丑十二月廿六日分其外共、来寅年正月四日在京之諸侯方

御参

内被 仰出候事、

但年頭御礼也、

奥ニ記

戸田大和守様、寮御馬 御拝領之事、

大久保主膳正殿、京町奉行被 仰付候事、

本多美濃守様、老中願之通被免溜詰之格被 仰付、

任 高野

右近衛権少将 保建朝臣

叙 庭田

正二位 重胤卿

正五位下 阿野 実允

藤波 言忠

右十二月廿七日 勅許

藤島 藤原助順

右、禁色昇進等、十二月廿九日

勅許、

丹羽左京大夫様、御再願之通御暇被下、正月元日御発足之事、

南部美濃守様、此度限御名代ニ而三ヶ月詰、御再願之通相済、正月四日仮建所江参上、三ヶ月詰御褒美頂戴、年頭御礼も申上ル、

南部監物殿

来寅年、当地三ヶ月詰御警衛、夫々割当可被仰付候処、

進発ニ付而は供其外ニ而人繰差支候付、先春中之御警衛

計、其余は追而可被仰付由之事、

正月より 上杉弾正大弼様

三月迄 南部美濃守様

稲葉民部大輔様

右之通、十二月廿九日其筋より申来候、

寅年正月

井上河内守様御上坂、差急付名代ヲ以 天氣御伺被成候



事、  
事儀不相分

二条関白様以来御役料五百俵も年々被進、且近来格別御

用多端之折柄、一際御勦勤被成、且

御所より被 仰出之趣も有之候付、別段之訳ヲ以御在職

中米七百五十俵も年々被進候旨、其筋より申来候事、

永井伝八郎様、従五位下信濃守被仰付、正月四日、松平

民部大輔様初参 内、年頭御礼被申上候事、

正月御式写

元日 四方拝 撰家中  
節句

二日 大床子御膳

三日 早節 式部今宮

常陸宮

右大臣 前右大臣

三室戸三位 三室戸新三位

右三位中将 左京権大夫

和光朝臣 治光

四日 外様公卿 殿上人

五日 千秋万歳

六日

七日 白馬節会

八日 仁和寺宮 内々門跡

御修法

九日 黒御所

随心院准后 大乘院門跡

一乘院門跡 随心院新門跡

外様入道

十日 諸礼 非藏人

十一日 神宮奏事始

十二日 賀茂奏事始

十三日

十四日 太元帥法後七日阿闍梨

十五日 御吉書 毬打

十六日 踏歌節会

十七日 三毬打

慶応元年（1865）

十八日	東本願寺
十九日	舞 御覽
廿日	養源院 法洛院
	南禅寺 五山
廿一日	護淨院 小池坊
	智積院 連台寺
	本国寺
廿四日	和歌御会始
右	
叙	中御門
正三位	經之卿
同	高倉
從三位	永祐朝臣
同	穂波
同	經度朝臣
同	樋口
同	靜康朝臣
正四位下	中園
同	実知朝臣
同	清水谷
同	公考朝臣
從四位上	外山
	光輔朝臣

同	油小路
同	隆董朝臣
從四位下	萩原 員種
同	冷泉 為紀
同	植松 雅徳
正五位下	石井 行知
同	河鱈 実文
同	裏松 良光
同	園 基資
同	北小路 俊堅
同	徳大寺 公弘
同	難波 宗明
同	藤井 行徳
從五位上	勅許
右正月四日	
松平肥後守様、旧臘山陵御修補速成功術奏、	御表附御
狩衣御拝領由、	
戸田大和守様、同断付寮御馬鞍置御拝領、且越前守様先	
祖忠次様、從四位下	

宣下、尚越前守様御太刀一振御拜領相成候由、  
仙台侯・大村丹後守様・丸亀侯等御着一件二付、御名  
代此節伺  
天氣之事、

尚年頭 上使中条左衛門督様、二月四日五日頃上京之由、

任  
侍從 正親町三条実愛卿男童形  
公勝

左京大夫 交野 時菖卿  
三室戸

左兵衛佐 藤井 和光朝臣

右馬權頭 行徳

叙  
從一位 徳大寺 公純公  
倉橋

從三位 藤原家理男 泰頭朝臣  
家盛朝臣

正四位下 清岡

去る四日分

正五位下 長延 菊亭故実順四男  
愔季

同 八条 陸吉

從五位上

從五位下 藤谷為彦男五才  
藤原為靜

正月十五日 勅許

野宮家雜掌西池永水儀、從六位下大膳少進、正月十五日  
勅許、以来西池大膳少進と相名乗申候、

但 山陵奉行依奏野宮家侍此度御取立ニ相成候事、

貢獻昨丑年分御品御治定、獻殘御品 関白様・議奏・云

奏ニ御進上可相成候事、

右献上御勤御使、半上下御着用御治定、

近衛 忠房公  
辭左近衛大將  
右馬寮御監等

賜隨身兵仗 叙從一位 御同人様

御推叙

一条 実良卿

兼左近衛大將 為左馬寮御監  
御推任

正月十八日 勅許

萩原右衛門佐様・市橋下総守様娘御縁組、御願之通相濟

候事、

正月十九日在京諸侯舞御覽拜見被 仰出候事、

右正月十九日

朔平御門前御警衛、丹羽様被免、稻葉民部大輔様御家来御警衛之事、

土州様

溝口様

吉田様

当夏三ヶ月詰被 仰付候事、

三月二日

文書原寸 縦一四・三種 横三六〇・五種

邊臺 松平備前守家来ヨリ朝廷へノ伺ニ対スル指令

一昨十五日被 仰出候御別紙之内、尽衆議と之御文言

召之衆・諸侯上京之上公儀を被為尽、差掛候儀は詰

合諸侯・諸藩士等之會議被

仰付候儀ニ御座候哉、  
下札  
書面之通

諸大名同被 仰出等は於兩役取扱候と之御文言、諸侯より御兩卿江伺差出候節は、衆議を被為尽御決定之上、御兩役を以被 仰出候義ニ御座候哉、

下札  
尤於重事は尽衆議を候之上取扱候事、尋常小事は直ニ取扱候事、

支配地と之御文言、山城国之地御領所之儀ニ御座候哉、

又ハ徳川領地を被 仰候儀ニ御座候哉、

下札  
支配地之儀は

禁裏御領所之儀ニ候、

十月十七日

松平備前守  
家来

去ル十七日 別紙之通

御所江被仰立候所下ケ札之通被 仰出候、此段相達候、  
十月廿日

文書原寸 縦一七・二櫃 横九二櫃

通書 諸藩上京ノ朝命追加

(端裏書)  
十月廿五日伝

奏日野大納言様より雑掌ヲ以御渡」

御用之儀有之被

召候、期限来月中ニ必可有上着事、

但用迄出来有之候向ハ、不拘期限早々上着可有之事、

十月

文書原寸 縦一六・四櫃 横二九・三櫃

通書 八田喜左衛門ヨリ松浦市郎兵衛長年へ

忠久公及丹後局ニ関スル質議

五通

追加五五ノ一

内話

島津家元祖忠久ハ頼朝の他腹の長男也、内実ハ 高倉院の御落胤也と申伝候、母ハ比企判官能員の女丹後局高倉院にて頼朝ニたまハリし人故右の説あり、故ありて撰州住吉杜頭ニ誕生有之、此時関白基道公御行懸ありて、直様御拾ひ取、忠久暫く陽明家にて御養育ありし由申伝候事、

一 島津御莊ハ日向国諸県郡也、基道公江被相伝候莊園也、島津の地名ハ島と津の多き所故ニ云ともいひ、又島門の転語とも云、人丸の歌ニ島門を見れハ神代しおもほゆ、といへるハ即それとも言へり、島津の国造ハ志摩国なる事論なきを、日向の島津ニ由縁ありとの説今少し委く承度候、

一 今の島津家ハ忠久より始りて、元来日向ニ島津家と云ハなかりし也、忠久下向ノ已前ハ王制ニ而大監某所領也、尤上古ハかの地諸君のをさめし所也、景行帝熊襲ことむけ給ひし時御通行ありし道にて、みあへ奉り

し事なと書記(紀)ニ見えたり、

右すへて只々暗記のまゝにて間違あるかも不存候、猶

得と勘考可断候事、

文書原寸 縦一六・五種 横六三・二種

追加五五ノ二

一 忠久ハ高倉帝の御落胤と云事の明証承度候事、

一 丹後局ハ高倉帝の官女なる事ハ、愚管抄又ハ頼政集ニ

もその名相見得候、此丹後と云人、忠久母なるや否や

の事、

一 惟宗氏ハ姓氏録ニ相もれ候故、家系不相分候事、

一 大隅国ニ志摩・答西の地名ありといへとも、同地名ハ

何方にもある事にて、島津の国造ニ由縁ある事、未鑑

ならず、猶つはらにその訳承度候事、

文書原寸 縦一六・八種 横二七・三種

追加五五ノ三

一 八王子子氏か家系相分不申候而ハ、忠久島津家再興之子

細相分不申候間、どふそ系図を以御示し被下度、又島

津国造之末如何相成候哉、且日向島津荘と申地名、い

つ比より出候哉、由来承度、何分 主人病床ニ而御著

書微妙之御説よミ致候儀、此涯出来兼候様子ニ付、何

とそ先大綱一通り御書取被下候やういたし度願上申候

事、

一 忠久島津家再興之事、分明相分申候ハ、系図相調、訖

と子孫ニ相伝不申候而不相叶事候間、神代より忠久迄

ノ系行御認可被下候、尤夫迄御骨折不被下候而ハ、御

発明の詮相立不申哉と奉存候間、呉々も可然御願申上

候事、

一 拙著襲峯一覽入御覽申度候へ共、瓦版ニ而上本取計候

筈ニ而遣置候間、成就之上差上可申候、外ニも相認置

候ものも有之相同度候へ共、皆脇方へ遣置候間あとよ

りと存申候、

文書原寸 縦一六種 横六七・八種

追加五五ノ四

(封紙ウツ書)

一松浦君

申上置

八田拜

ノ

ノ

乍末筆御答書別而感佩至極候、先御返し申上候間、

御入手可被下候、猶御直々縷々相うかゝひ可申候、

過日ハ御念書被下候処、取込中不能貴答、甚以失敬之至

御海容可被下候、今日ハ四ツ時分御光来被下候様申上置

候へとも、御使口上間違申候哉、然処只今勤場より早々

出殿之儀申来心外之至、尤少時ハ御待申上候へとも御光

臨無之出勤仕候、御頼之染筆物ハ甚不出来、丹顔之至候

へ共懸御目申候、且別夜前宿番中認置候間御覽可被下候、

猶其内何日ニ而も御光来奉希候、返々今日ハ不都合之至

御座候、先ハ御断迄、艸々九拜、

七日

文書原寸 縦一六種 横五九種

追加五五ノ五

別啓、島津家始祖神考にも明白相分感佩無申候、しか

し神代幽契之旨ハ普通之人分兼候事候間、猶一通り祖神

より忠久迄之所、系図ニ御調御遣被下度奉頼候、尤一度

ハ主人も被懸御目度、小子ニも御直談承り度候へ共、暫

くハ間も可有之候間、其内右系図御調被下度、呉々も御

頼申上度、此旨宗助様ニ宜御伝被下度御頼申上候、以上、

八田喜左衛門

正月廿五日

松浦市郎兵衛様

文書原寸 縦一五・五種 横四七・五種

遺奏 京都ニテ長州ヨリ幕閣へ提出ノ歎願書

三月朔日留守居三宅万太夫義、稲葉閣老江持参、

公用人松井鉄之助を以差出候事、

天朝江は差出不申候、

芸州より取次長州歎願書、卯三月五日京都ニ而差

出候写

長防士民一統泣血奉歎願候、抑 主人父子積年来奉対

天朝・幕府忠敬之道相尺度、身家困苦艱難をも不顧、御

旨意筋を奉粉骨奔走、遂ニ海内一致、生民塗炭ニ不苦様

仕度との外無他之心事は、追々

勅諭台諭之旨も被為在候、巨細被為 知食分候処、闔国

感奮之余り、乍恐其後之御沙汰ニ疑惑を生シ候哉、過ル

子秋、少壯之者主人父子之意筋ニ違背シ、於京師奉恐入

候始末ニ立至り候族も有之、就而は主人父子一円承知不

仕義ニは御座候得共、何共奉恐入候次第、早速夫々所置

申付、御託之筋相立候処、惣督尾州前大納言様、巨細被

為聞召届、速ニ御解兵被 仰出候も、畢竟右京師之一条

形跡を以論候得は、素より奉恐入候次第ニ候得共、其情

実御酌量被成下候得は、海隅辺僻之国柄、頑固愚直之性

質よりして

勅諭台諭之旨を重し、誠心感奮之余り確乎之過候心底よ

り差起り候次第等遺漏被為知分被下候事と一統難有奉存、

不遠御寛大之御沙汰被 仰出候御事と奉存候処、丑冬ニ

至り再び大小監察御役々

天幕之御耳目として御下向、家老之者被 召出、主人父

子誠意より私共一統臣子之分無余義、情実迄不残被為聞

召届、巨細御承知との御事ニ付、此上は最早平常御寛典

之御処置被 仰出候御事と一統奉渴望居候処、不測も昨

寅夏ニ至り、闔国意外之御達面被 仰出、主人より右一

途として差出置候名代家老之者江は不被仰達、却而御拘

留ニ相成、闔国疑惑不形候ニ付、其砌追々情実を尽し

御願申上候得共、分毫も不被聞召分、俄ニ御軍勢被差向

領内御侵掠、無辜之人民塗炭ニ苦候次第ニ付、乍恐

聖天子昔聖明仁慈之

御思召共不被奉考、就而は素より不相好義ニ御座候得共

不得止、聊カ防禦之方便等仕、御役々様方御轅門迄罷出、



名代御拘留始末御処置振奉伺度所存罷在候所、御老中松平伯耆守様江御拘留之家老被召出、巨細之情実御聞届も被成下、其後幕府御内命を以、勝安房守殿態々被差下、鄭重御思召之程をも入々被仰聞候処、其辺之御筋道は今以如何御沙汰も無御座、折柄御休兵被仰出候得共、暫時御見合との御事ニ付、何時御思召とも無之、急襲等出来候も難計と闔国安堵不仕候ニ付、其段尊藩様迄申出置、不得止最前之持場ニ而其後之御沙汰奉待上候事ニ御座候、然ル処七月

將軍薨御被為成候由、不一形奉驚嘆罷在候所、到御末乍恐

主上御不予、遂ニ

崩御被為遊候御様子奉伺候而は、殊更驚愕悲歎恐懼罷在候次第ニ奉存候、恭しくも奉考候ニ、

先帝聖明仁慈之御質を以寛仁大度之

叡慮を被為廻、最前より之次第一々御歴被為遊候御事ニ付、主人父子之誠意は申上候迄も無之、闔国臣子無余義

情実をも巨細被為

知食分、連々御寛典被仰出候

御思召も被為在候御様子切ニ奉伝聞、難有奉存居候処、恐多も今日之御様子奉伺候而は此余歎願可仕手段も有之間敷欵と、闔国別而悲歎罷在候、当節

新天子御踐祚、加之將軍御宣下も被為在候由、就而は先帝御寛仁之

叡慮ニ被為基候而、於長防君臣共何卒霈然之

御恩沢奉蒙候様被為成、速ニ平常御寛大之御沙汰筋被仰

出被下候得は、大早之膏雨同様、於父子最前より悲敬之

誠意、且海内一致生民塗炭ニ不苦様仕度との鄙衷も相届

候而已ならず、闔国士民一統別而難有感泣可仕候間、何

卒此段被為聞召分被下候様、泣血再拜奉歎願候、激切屏營、惶懼無已、

二月

長防士民中

朝廷御大変ニ付而は深奉恐入、御領内屯兵引揚候段、前日以使者得御意候、然ル処収兵之義は、昨秋以来両度陳

述仕候次第二而、猶今般一統士民之情実別紙之通罷在、

於尊藩は素より国情御承知之御事ニ付、士民とも御依頼

仕、且防長之折柄無余義御借地仕候事も有之、御領内之

此間恐有脱字

義は収兵仕候得共、豊石両地ニ至り候而は及一戦、幸守

禦をも得候仕合、後來之所如何之勢を醸し候も難計と、

只管懸念仕居候ニ付、両地之所は弊国御所置平常如故之

御沙汰被 仰出候迄は、行形人数出張罷在候、此段御含

置被下候様仕度候事、

右之通

覚

今般

朝廷御初政綱紀御維新之時相成、就而は国内士民ともよ

り別紙之通歎願申出、私共ニ於而も同様日夜希望罷在、

毎々御手数相掛愧謝之至ニ御座候得共、臣子不得止之情

実御酌取被下置、宜敷御取計之程一統至願奉存候、此段

安芸守様江被仰上被下候様奉頼候、以上、

毛利大膳

二月

家老中

右之通

(裏表紙ニアリ、朱)  
「丁卯三月五日」

冊子原寸 縦一四・五釐 横二〇釐 九枚

邊墨 処士大野綱之介ヨリ久光公へノ願書

薩藩へノ召抱ヲ請フ

重役へノ副書ト共ニ二通

(包紙ウツ書)  
「丁卯四月」

口上書

大野綱之介」

追加五七〇一

丁卯四月、処士臣大野綱謹再拜言於島津侯閣下、臣本生

僻壤之郷長蓬蒿之中、加之受性頑劣、心胆怯弱、不能識

宇内之形態、経世之安危、抱愚守短矐屈草莽、既于此幾

数年矣、且臣於他技芸一無通其道者、嘗少酷好学問、孜々

矻々不俟奨励、乃稍雖似解其句読釈、其章句者於経籍之

深、人事大義未能一分得其道也、雖然學之數年、粗識所以國恩之不可不報、及所以徒手優遊、而偷生於其義未可是以欲認主求任委實以効力也、蓋已久矣、嘗或語臣、閣下內仁而外義、憂國如身受土而躬吐握之勤、三百諸侯未可有比閣下者也、於是乎臣仰閣下之下風、慕閣下之高義、欲奉一身以致命、然而道路逼塞、里程遼遠、加之貧窶窮窘、不能整行裝、而免田野、則日瞻望九州、延頸企足、徒飛魂於天涯焉耳、頃者或復語臣、閣下身親携諸侯帥大衆雷發九州而來京師也、臣竊自奮曰、百年之機會不可以失、不如身一詣閣下、拋擲頸領而待其命焉、乃独免草莽涉山川、得以昨宵入都下也、閣下若察臣之愚忠、恕臣之狂直、使給一鐘之祿、而微得伸其驚足、雖瘦骨粉碎腸膈断裂、臣亦不肯怨之也、且人有此志而無此勢、其志不能以世行也、有此勢而無此志、其勢亦不能復以世行也、然則勢与志相須、而天下之事始能濟其美焉耳、今夫蓄其勢而備其志、德義有余而慨然于神州之安危者、閣下之外未聞有其人也、是則臣愚險等犯分所以委命於閣下而不顧也、

閣下若不問其文之鄙陋与狂妄之罪、而採唯其所以丹心仰慕閣下之者、則幸甚干黷尊嚴、恐惶待罪死罪罪罪、

島津侯閣下

大野綱九拜

文書原寸 縦二八・二種

包紙原寸 縦四〇・三種

横四〇・三種

横二八・二種

追加五七ノ二

副書

一御廟猷御繁端之御時節、身之愚陋をも不顧、叨リニ尊閣を搪揆仕候段、其罪至極雖然、愚臣閣下之高風を仰慕仕候心難黙止、且草莽之輩相集り談論致し候ニ、当今国力を不惜、宇内之隆替、朝廷之安危を以て其任と被成候者、閣下之外不可有之と、則愚臣僭險之罪を不憚、閣下を冒瀆して、所以欲効犬馬之勞ニ御座候、尤田野を免跡致し候筋、一片之書物も持參不致之処、猝然閣下江罷出候ニは口上書成共無之候而は如何と、故昨宵倉卒ニ粗愚腸を前文ニ吐述仕候、依而章句之潤色

等は更ニ不致候間、唯其赤心を御賢察有之候ハ、多幸之至ニ御座候、

一愚臣元総州某之藩ニ生し、幼ニして江門ニ遊学致し、

学業半塗（途カ）ニシテ四方之志を発し、上州・野州・信甲之間を経曆致し、尾濃間ニ滞在致し居候事已ニ一年、然

ル処閣下大衆を帥ひ皇闕を守衛すと承り、早速濃州大

田駅を発し、昨夜都下ニ到着仕候、当今実ニ四方騒然、

不容易之時節、愚臣若驥尾ニ着事を得て以て国恩之一

分を報する事を得ば、則大幸之至ニ御座候、以上、

御重役中

御重役中

処士

大野綱之介九拜

文書原寸 縦二八・二釐 横二四・五釐

遺書ハ 山階宮御書留

同文二通

久光公へ

追加五八ノ一

〔端裏朱書〕  
「丁卯山階宮御書留」

一公家は反而御錠口外、幕人は御内儀常住之事、

一行幸・御幸、表は幕人出金云々、実は堂上・撰家家来

無下行、御供迷惑より云々の事、

一皇族出家之事、

上古は奉仏より或内変より、中古ハ御食料無之故ニ、

飯ニ仏食ヲ以而云々、近代ハ諸門跡・尼宮・正院家へ

悉く撰家・親王・華族・堂上之為金穴、故ニ奉仏ニハ

ナク金穴云々、

一幕府より出万俵、妖巫猾積之奢侈料已ニ云々、

天朝之御満足ニ不相成云々、

一折角御取立之御馬屋下木は、悉く旧院松林本ノ通り俵江、上

木は野宮取計ニ而、東宮御殿御用木ニ被用、又は閑

院宮江被進、又ハ紛失候事、

一兩役辺云々、即今云々難事歎、忠良之人各唱候ハ、忽

其人讒間ニ可遇云々、

一国事長官 撰家・親王・清花・大臣家之中両三人、

一国事次官 撰家・親王・清花・大臣家・堂上三位以上、

一 国事判官 堂上四位・五位、殿上人六位藏人、  
一 国事主典 非藏人・上下北面・地下官人五位以上、  
議奏 撰政思召次第、

伝奏 同断、

職事 同断、

官位 同断、

神事 同断、

節会 同断、

文書原寸 縦一六・八極 横三一極

追加五八ノ二

本文書ハ追加五八ノ一号文書ト同文ニ付省略ス

文書原寸 縦二四・七極 横三四・五極

邊莞 山階宮ヨリ久光公ヘノ国事御相談  
(端書、朱)  
丁卯六月 山階宮御書

石見心得ニ認メ候、

今度四藩共寛々在京、国政辺十二分云々之上、帰国ニ相成候得は、万方可賀勢ニ候得共、万々一如容堂被称病俄然帰国ニ相成候様之義も候ハ、実ニ歎ケハ敷候、寔乍鹿忽極密申入候、

一 仁和寺宮還俗之事、

兼々左京より委曲内談候事ト存候、別段新家ニ而還俗出仕ト申様ニも相成候ハ、十二分之事、万一新家六ケ敷義ニ候ハ、山階宮養子相統辺而還俗出仕は相成間敷哉、尤内府公も親王多相成候ハ、弥々不被為在よし内々承知候、九・鷹辺は別而少ク存候、甚六ケ敷義共ト存候得共勘考可頼候、

一 先日申入候国事長官・次官・判官・主典等之愚説は、尤六ケ敷事と絶念候、乍去何共残念之形勢故、国事諫官ト申役名被立、中山・橋本・大原・烏丸・万里小路・徳大寺其外可然人体、諫官ニ被選舉候術は有間敷哉、参政・寄人再興は執柄家甚以惡ミ候得共、諫官は又々意も名目も変り候事故、万一御聞入も不可計哉ト被存

候、尚勘考可頼候、

一議奏本役ハ先ニ正三卿・柳原卿・長谷卿・葉室卿、此上江醍醐亜相加入ニも相成候ハ、可賀事と申候、

一武伝は即今之形勢ニ而は、木偶人同様之人反而無茲而

宜哉、日野亜相之外ニ中院・広幡辺之人ニも相成候ハ、幸ト存候、

一広橋・久世・六条・野宮等万人之風評不宜、定而人望

ニ違事故ト存候、鷹司前関白殿過日六条・広橋再出ト仰候、是ハ不被為在候方

天朝之御益ト存候、

一鷹司大納言殿、先日比は正議(候)高論驚入候所、此節大ニ

奉幕説ト相成候、勘考ト被存候、世人説ハ有栖川宮ト

鷹司殿トわ称普請料金申立之外別段近親之辺而從幕府大金進上候由、実否如何、

一先帝崩御後は尹宮之權消失、即今は摂政殿・桜木殿・

鷹司前関白殿、右を三公ト称し大権ニ候、内府公・九条亜相・鷹司亜相、三公ニ准シ權有之候、一条左大臣

殿・尹宮・徳大寺右府公、是茂大同小異之者ニ候、

一先日大隅守入来候得共、早出ニ而残念ニ候、何卒実話渴望ニ候得共、近衛様御時宜熟考之上取合可給候、

一先年之例も候間、参

内退出掛ケ薩亭江推参候而も宜候得共、過日会津大盛会招請云々之辺も候間、差扣候方互ニ益ト存候得共、

桜木公・内府公御成自然節は、一同推参ト申義は出来間敷哉ト存候、

六月一日

文書原寸 縦一四・三釐 横一二一・七釐

邊云 谷村小吉 (昌武) ヨリ松浦長年へノ礼状

忠久公ノ御実父ニ就テ

(紙控) 一島津家御巻条書也

但御系譜考証三冊并ニ中将様御褒詞之写、谷村より之兩通写等、先年差上候兩通ハ先日も上候

追加六〇ノ一

〔異筆〕  
「奉書紙ニツ折」

猶時分柄折角御厭御尤奉存候、將この唐筆手印まで御贈いたし候、御受納候へく候、

未得實顔候得共、弥御堅氣可被成御座愛度被存候、扱此度島津家始祖神之考書、態々此人松浦市郎兵衛殿を以被差出候ニ付、右之冊子桃岡・八田翁より相受取、即中將殿江差上候へハいと御怡之至ニ思召候、就而御下向なされたく事ながら、当家江相伝ニ候事跡とは悉相違候間、何分疾々右下巻之方御覽なされたきとの事、ケ条書御合候而、便宜次第御差登せ之程頻々待入可申候、猶委細は右市郎兵衛殿より御直聞可被下候、幾久敷御音信可申承候、恐々謹言、

卯

七月十八日

認

皇都より  
薩摩藩

谷村小吉

昌武



松浦  
長年君  
侍史

追加六〇ノ二

〔異筆〕  
「白半截巻封紙」

猶々、下巻之方世々しまつ記くたざるやふことの御事候ハ、そのよし先方へ御伝へ御尤奉存候、

残暑烈敷御座候得とも、愈以御安泰可被成御座奉恭賀候、  
儲は過日之冊子、即而奉備

御覽候処、御文章方旧来之御記録は勿論相違尤候間、御不審紙御下札などあそはしたく思召候へとも、却而之事故、いつれ下巻之方疾々御覽なされたしとの御沙汰奉存候間、遠国之事ニは御座候へ共、便宜を以何分早々右之趣御申越シいたし度奉存候、將右著述之人物、いと殊勝之事など御意あそはし申候、此分承計草々如斯ニ御座候、  
い細参を以書外可宜と申上略候、頓首、

七月十日

八田知紀大人  
御もとへ上ル

谷村昌武

年号月日

官位姓名奉

文書原寸 縦 一六極 紙捻原寸 縦 一〇極

横二〇〇極 横二・六極

同別紙

会津宰相

桑名

邊一 薩長へ討幕ノ密勅其他

長芸薩土四藩へ

官 姓名

右二人、久滞在輦下、助幕賊之暴、其罪不輕候、依之速  
可加誅戮旨被 仰下候事、

月 日

名

某 殿

詔、源慶喜藉累世之威、恃閩族之強、妄賊害忠良、  
数々棄絶

長藩へ別紙

長門宰相

同 少将

王命、遂矯先帝之詔而不懼、擄三万民於溝壑而不  
顧、罪惡所至、神州將傾覆焉、朕今為三民之父  
母、是賊而不討、何以上謝先帝之靈、下報三万民  
之深讎哉、此朕之憂憤、所在諒聞而不顧者、万  
不可已也、汝宜体朕之心、殄戮賊臣慶喜、以  
速奏回天之偉勲而、惜生靈于山嶽之安、此朕之願、  
無敢或不懌、(本文百卅五字)

戊午以来、邦国多事 天步艱難之砌、東西周旋其勞不尠  
候処、幕府暴戾之余譴構百出、遂ニ乙丑・丙寅之始末ニ  
及候得共、從來為 皇国竭忠誠候父子之至情徹底、於  
先帝願命之際茂深被留 叡念候、依之今般 御遣旨御継



述、本官本位ニ被復候間、速ニ可有入 朝、愈以干城之  
勤不可怠旨 御沙汰ニ候事、

年 月 日

尾紀水三藩へ

官 姓名

詔、源慶喜繼幕府兩世逆謀、無蔑 天朝、荼毒黎  
民、罪惡貫盈、勢將覆滅 神州、 皇上赫怒、命  
各藩伐之、因 詔、五畿七道大小幕府親藩恩顧大小  
名、至陪從吏卒輩、宜弁大義、達時勢、服事  
皇室、各自竭報 国之忠、若夫有拘私恩、戾公道、  
拒勤 王之師者、以与朝敵罪討之、「本文百一  
字」

年号 月 日

官位姓名奉

贈大納言光圀勤 王家、肆 不滅厥宗、使得  
奉祀、其勿疑懼、時属屯難、内外多虞、宜率  
寬典、俾存厥祀、

諸藩へ

徳川慶喜幕府兩世之姦謀を継ぎ、 天朝を蔑如し、万姓  
を苦ましめ、 神州を傾覆せんとす、 今上偏に 先帝  
之叡慮に悖り、蒼生の倒懸に苦むニ忍ひ給はず、此度長  
芸薩土の四藩に

詔して被誅伐候、就而は六十余州之大小藩ハ申ニ不及、  
陪從吏卒の末に至る迄、厚き 御趣意を会し、国体を弁  
へ、 朝廷に服事すへきハ勿論ニ候、万一大事を謬り、  
幕府の私恩を執し、違背の者有之に於而は叛人之党類た  
るへき旨 御沙汰ニ候事、

年号 月 日

名

某 殿

水戸贈大納言光圀、 王室へ勤功之廉茂不尠、依之 宗  
家の祀を被存候間可致安堵候、  
内外多難之折柄百事寬典ニ被処、於徳川家茂被存其祀候  
間可致安堵候、

神社へ

右同文

右之通列藩へ被 仰出候、於社人之輩茂同様相心得、報  
国之志不可怠之旨 御沙汰候事、

仏寺へ

右同文

右之通列藩へ被 仰出候、於僧尼修験之輩茂其分可相心  
得旨 御沙汰候事、

農商へ

徳川慶喜暴威に募り、 天朝を無蔑し万民を苦め、殆  
神州を覆さんとするニ至る、其罪難被為捨置、依之今般  
職掌被 召上、諸藩へ征討之 詔被 仰下候也、其 御  
趣意全く 神州之危難を救ひ、万民を安堵せしむるニあ  
り、士民之輩疑惑を抱かず、各生業を営み、従前幕府の  
裁断ニ預り候事件は太政官代へ申出へき者也、

年号 月

△癸亥 勅勘公卿へ

藤原季知  
藤原実美  
源通禧  
藤原基修  
藤原隆調

右、今度以厚 思召被 免 勅勘、復本位候間速入京、

弥可励忠勤旨 御沙汰候事、

（付紙）「此条前ノ条ト前後ス、改ムベシ」  
壬戌落飾公卿へ

入道前内大臣  
入道前少将  
入道前中將  
入道前中務大輔  
右、今度以 思召被 免蟄居、直復初服参 朝可有之旨  
被 仰出候事、

丁卯差扣朝紳へ

実在朝臣

公董朝臣

公寿朝臣

隆聚朝臣

候事、

年号月日

冊子原寸 縦二七・八釐 横二〇・五釐 八枚

右、被 免差扣候旨被 仰出候事、

公卿已下、

癸丑以来未曾有之國難、先帝頻年被惱 宸衷候御次第、

殊ニ顧命之際ニ至リ、深被遣 叡慮候始末ハ群臣所知ニ

候、依之今般被決 叡慮、列藩已下へ被 命候処、則如

前文候、就而ハ 王政復古御國威挽回之基被為立候間、

自今幕府并撰閑廢絶、先仮に総裁・議定・参与の三職を

撰はれ、太政官代にて万機可被為行、総而遷都以前ニ溯

洄し、搢紳・武弁・堂上・地下の別なく至当の公議を竭

し、天下と休戚を同しく被遊候 叡慮ニ付各相心得、旧

來驕惰の汚習を洗ひ、尽忠報國之誠を以可致奉 公旨被

仰出候事、

勅問御人数国事御用掛・議 奏・武家伝 奏、総而被廢

遺三 外国、長防、五卿処置ニ付薩土芸三藩ノ奉答

口上之覚

御用之儀有之候間、明廿日巳刻無遅々

禁裡御所仮建所江重役・留守居、家来之内参上可有之候、

此段可相達旨両伝被申付候、以上、

両伝奏

十月十九日 未刻

雜掌

御次第不同

紀伊様

尾張様

加賀様

越前様

阿波様

安芸様

立花飛彈守様

南部美濃守様

松平三河守様

御留守居中

追而刻付を以御廻覽、日野家江御返し可被成候、以上、

左之件々伝奏より御口達、畢而御書取御渡しニ相成、

召之諸侯上京迄之処取計向伺候廉々、

一当地三ヶ月詰并口々御固メ大名割、御両役ニ而御取調之上夫々江御達相成候哉、又ハ是迄之手続ニ而取調申

上候而、達し方は御両役ニ而被成候哉、

一禁裏御料并御入用筋之義、御料所向は小堀数馬ニ而取

計、御入用筋ハ是迄之通之取扱ニ仕置可申哉、

一大宮御所御造立御入用国役金之義は、已ニ達済ニハ相成候得共、此後収方等取扱之義、是迄之手続ニ而可然

候哉、左候ハ、其段諸大名江御両役より御達有之様致度候、

一五街道・脇往還宿々人馬之義、先ツ是迄之通被成置候儀ニ御座候ハ、其段御両役より御國中江御触達相成候儀に可有之哉、

一山城・大和・近江・丹波四ヶ国并ニ撰家・宮門跡・堂上方御家領、其他寺社領・大名領分江關係致候公事出入、京都町奉行所ニ而取扱来候廉々ハ是迄之通取扱、

呼出等ハ其主人々々江掛合ニ及可申哉、

一刑法之儀は、

召之諸侯上京之上御取扱可相成と存候へ共、夫迄之処仕来之通ニ而宜敷哉、

一所司代戸田大和守御附兩人勤向ハ、是迄之通ニ而宜敷

候哉、

一兵庫開港ニ付金札通用之儀ハ、町人・百姓融通之為ニ而申上済ニ而出来相成居候間通用相成候様仕度、

十月廿日

一 近々上坂之聞有之候実美以下脱走人之事、

一 外国之事、

右尚 召之諸侯上京、公論衆議之上御決定ニ相成候へ共、先差向候取扱之処尋被下候事、

召出、廉々 御下問被

仰付候儀ニ付、謹而奉言上候、

一 徳川家取扱掛之廉々、当時伺出之通被

仰付置 召之諸侯會議之上、御確定被遊可然哉ニ奉存候、

今日被尋下候件々は、明廿一日中両役之内江必返答可有之事、

一 明後廿二日

御用之儀有之候間、今日之通已刻可罷出候事、

十月廿日

右ニ付三藩申値之上、左之通御返答書薩藩内田仲之助を以議奏江差出候事、

今般、幕府政權を

朝廷江奉還仕候次第、誠ニ以復古之御大業數百年來之英断ニ御座候而、御国体御变革、宇宙間ニ御独立可被遊御基本ニ候得は、微賤之私共迄深く天下之為メ

ニ奉恐悅候、就而は衆庶議事之意を以、諸藩士共被

召之諸侯會議初発ニ

御裁断被

仰出、長防御所置同時相成可然哉ニ奉存候、

一 外国取扱之儀は暫時越方之通ニ被聞、 召之諸侯會議之上、

皇国一体を以

朝廷之御条約可被為結、尤兵庫開港之処は今般大改革を以、国体交換之次第談判ニ及び被差延候而可然哉ニ奉存候、

右件々、當時在京仕候三藩之者共同意仕候ニ付、乍

恐連名ニ而申上候、尤書外猶又口舌を以言上可仕候、

誠恐誠惶頓首謹言、

丁卯十月廿一日

松平修理大夫内

関山 糺

松平安芸守内

辻 将曹

松平土佐守内

後藤象二郎

福岡藤次

神山左多衛

文書原寸 縦一七種 横二八九・二種

遺奏三 慶喜二条城ニ於テ將軍職辞退ノ発表

(端裏書) 十月廿七日二条

御城おゐて大目付松平大隅守殿より御渡」

臣慶喜、昨秋相統仕候節、將軍職之儀固ク御辞退申上、

其後厚蒙

御沙汰候付御請仕奉職罷在候処、今般

奏聞仕候次第も有之候間、將軍職御辞退奉申上度、此段

奏聞仕候、以上、

十月廿四日

諸藩上京之上、追而可有 御沙汰、夫迄之処是迄之

通相心得候様

御沙汰候事、

文書原寸 縦一六・五種 横五三種

遺奏四 幕府ヨリ八ヶ条ノ伺ニ対スル朝廷ノ指令

(端裏書) 十二月廿二日伝議より御渡」

一幕府より御伺八ヶ条之事、

御附紙

右八ヶ条は 召之諸侯上京之上規則被立候得共、夫

迄之処是迄之通可心得事、

但当地三ヶ月詰并口々御固メ大名割之一条は、是

迄之手続キニ而取調、於申渡は兩役取扱之事、

放役 山崎權太夫

一五卿上坂之事、

同

同役

自然上坂候得は諸侯上京迄之処、於浪華滞留之事、

同 小川 縫殿

但從

メ

朝廷可申渡事、

引入 家老 黒田 美作

一外国之事、

同

メ

召之諸侯上京之上御決定可相成候得共、夫迄之処

差向候儀有之候得は、諸侯上京迄差延候義、外国

大野忠右衛門方隠居

之情ニ通候兩三藩と申合せ可取扱事、

御納戸頭 被仰付候 大野 直記

文書原寸 縦一六・四種 横八〇種

御納戸頭ニ 進ム 河村五太夫

右去ル十二日進退

邊室 筑前藩奸臣処罰ノ人名罪名

十日方より城中不穩聞得有之候と之事、

御納戸頭裏判兼帶

文書原寸 縦一六・三種 横五七・七種

押隠居

大一等之姦 小河伝右衛門 太宰府受持

右同役

邊室 徳川軍ノ京都伏見鳥羽方面ニ於ケル配備

放役 大塚七左衛門

瀧川播磨守所持

同役

追加六六ノ一

二通

〔端裏書、抹消印アリ〕  
〔会津人懐中書〕

〔朱、以下同シ〕

瀧川播磨所持之書付  
徳川慶喜叛逆軍配之次第

黒谷

「二大仏

高力主計頭  
横田伊豆守

歩兵二大隊  
砲兵二門

騎兵三騎  
築造兵四十人

会藩四百人  
砲一座

右攻撃前日大仏江  
出張之事

佐久間近江守

河野佐渡守

歩兵二大隊

安藤瑯太郎

砲兵四門

長堀越前守

遊百三十人

騎兵三騎

築造兵四拾人

会藩四百人

砲一座

右攻撃前日黒谷ニ出張候事、

一二条御城

大久保主膳正

徳山出羽守

歩兵二大隊

砲兵四門

騎兵三騎

佐々木只三郎

見廻組四百人

本国寺 貳百人

築造兵 四十人

騎兵 四騎

右攻撃前々日出張繰入候事、

一伏見

城和泉守

窪田備前守

歩兵一大隊

大沢頭一郎

歩兵一大隊



間宮鉄太郎

砲兵六門

新撰組

百五拾人

騎兵三騎

築造兵四十人

右攻撃前日出張候事、

一鳥羽街道

竹中丹後守

秋山下総守

歩兵一大隊

小笠原石見守

歩兵一大隊

谷土佐守

砲兵二門

桑名

四中隊

砲兵六門

騎兵三騎

築造兵四十人

松平右近將監

家来三十人

右攻撃当朝鳥羽ニ出張、東寺江向候事、

一淀本營

騎馬三騎  
別手組拾人

松平豊前守出張差図次第京都繰込候事、

松平豊前守

一小隊四十人

宇賀甲斐守

二小隊

戸田采女正人数

五百人

一橋本関門

酒井若狭守  
人数

松平下総守

一西之宮

酒井雅楽頭

松平阿波守

人数

撤兵

半大隊

一中隊

頭取一人

一兵庫

須田敬一

撤兵半大隊

大砲二門

一大阪蔵屋敷

天野加賀守

塙健次郎

撤兵九小隊

吉田直次郎

砲兵二門

一大阪御城御警衛

会藩  
四百人

戸田肥後守

「後」

奥詰銃隊八小隊

「前」

大久保能登守

松浦八郎五郎銃隊

四小隊三浦新十郎

撤兵四小隊

但

御城御門ニ勤番

二小隊ニ相心得候事、

天野釣之丞守城砲

一御城外廻り関門十四ヶ所

小林端一

歩兵一大隊

外ニ外国人旅宿廻り巡邏之  
(ママ)

事、

一 紀伊殿人数

天王寺真田山并市中巡邏之事、

一 御城廻り巡邏

会藩

板倉伊賀守人数

一 松平刑部太輔 御門ニ勤番

但戸田采女正江交代

一 松平伊予守人数 天保山

一 稲垣平左衛門人数

大仏兵糧護衛

一 松平讃岐守人数

黒谷同断

一 福王駿河守・庄勤兵衛附屬

一大隊

右は天津より三条大橋迄操込候事、

一 御城近傍一円市中巡邏之事、

撤兵組

一 奈良街道小堀江

牧野駿河守

右攻撃懸り口御賦被遊置候由ニ而写置者也、

文書原寸 縦一五・九種 横二八・九種

追加六六ノ二

瀧川播磨所持之書中

徳川慶喜叛逆軍配之次第

一 奈良街道小堀口 牧野駿河守

一 御城近傍一円市中巡邏 撤兵組

一 福王駿河守・庄勤兵衛附屬一大隊

右は天津より三条大橋マデ操込候事、

一 松平讃岐守人数 黒谷同断

一 稲垣平右エ門人数 大仏兵糧護衛

一 松平伊予守 天保山

一 御城廻り巡邏 会藩・板倉伊賀守人数

一 松平刑部太輔 御門々勤番

但戸田采女正江交代

一 紀伊殿人数 天王寺真田山并ニ市中巡邏

一 御城廻り関門十四ヶ所 小林端一 歩兵一大隊

外ニ外国人旅宿廻り巡邏之事、

一 大坂御城御警衛

戸田肥後守 大久保能登守 奥詰銃隊八小隊

杉浦八郎五郎 三浦新十郎 銃隊四小隊

撤兵 四小隊

但御城御門ニ勤番二小隊ニ相心得候事、

天野釣之丞 守城砲

一 大坂蔵屋敷

天野加賀守 塙健次郎 撤兵九小隊

吉田直次郎 砲兵二門

会藩 四百人

一 兵庫

須田敬一 撤兵半大隊 大砲二門

一 西之宮

酒井雅楽頭人数 松平阿波守人 半大隊

撤兵一中隊 頭取一人

一 橋本関門

酒井若狭守 松平下総守人数

一 淀本營 騎兵三騎 別手組十人

松平豊前守出張差凶次第、京都江操込候事、

松平豊前守 一小隊四十人

室賀甲斐守 二小隊

戸田采女正人数 五百人

一 鳥羽街道

竹中丹後守

秋山下総守 歩兵一大隊 小笠原石見守 歩兵一大隊

谷土佐守 砲兵二門 桑名四中隊 騎兵三騎

築造兵 四十人 松平右近將監家来 三十人

右攻撃当朝鳥羽ニ出張、東寺江向候事、

一 伏見

城和泉守

窪田備前守 歩兵一大隊 大沢願一郎 歩兵一大隊

間宮鉄太郎 砲兵六門 新撰組 百五十人

騎兵三騎 築造兵 四十人

右攻撃前日出張之事、

一二条御城

大久保主膳正

徳山出羽守 歩兵二大隊 砲兵四門

騎兵三騎 佐々木只三郎 見巡り組 四百人

本国寺 二百人 築造兵 四十人

騎兵四騎

右攻撃前二日出張操入候事、

一大仏

高力主計頭

横田伊豆守 歩兵二大隊 砲兵二門

騎兵三騎 築造兵 四十人

会藩四百人 砲兵一座

右攻撃前日大仏江出張之事、

一黒谷

佐久間近江守

河野佐渡守 歩兵二大隊 騎兵三騎

安藤璆太郎 砲兵四門 築造兵 四十人

会藩四百人 砲一座

右攻撃前日黒谷江出張之事、

冊子原寸 縦二六・二櫃 横一九・四櫃 四枚

邊七 鳥羽伏見開戦以来ノ戦況

薩軍死傷者

正月三日

一七ツ時分鳥羽街道応接不相調戦争始ル、

一同日七ツ半時伏見同断、

一同夜五ツ時分竹田街道襲兵戦争始ル、

同四日

一鳥羽筋淀近辺迄追討、

一竹田筋・鳥羽筋之追討ハ会兵、

一 伏見賊兵敗走、

同 五日

一 鳥羽・竹田・伏見三口之官軍一ニ会して、淀小橋辺まで賊兵追払、賊兵八幡まで敗走、

同 六日

一 官軍大会して八幡賊兵之屯所ヲ敗り、橋本宿まで追越、

同 七日

一 休戦兵張此方人数、八幡諸所へ二三小隊ツ、張出相成候、

同 八日

一 休戦之処、昨日慶喜会桑引列、浪華城ヲ退去、東歸いたし候由、

同 九日

一 官軍薩摩浪花へ繰出、昨日賊散兵華城ヲ焼払、昨夜大和辺へ宿陣いたし候注進有之、斥候江差出候、

右、十日立高崎便申来候、

死三十九人

手負九十一人

文書原寸 縦一六・八釐 横五一・五釐

邊六 鳥羽伏見ノ戦ニ於ケル薩軍人数届書

此度賊徒御誅罰相成候処、豊後日田并長崎辺司吏悉逃去、

人民騒然之折柄、無頼之者其虚ニ乘シ乱妨之聞得有之、

不取敢国許より少々之兵隊差出、鎮撫方は勿論

王政帰順之道手ヲ付置候得共、最早粗人心相定候向御座

候ニ付、都而人数引揚候様申越候間、右之趣被

聞召置被下度、此段御届申上候ニ付宜敷御執奏奉願候、

以上、

正月廿九日

薩摩少将

二月十四日御達

御親征大総督

有栖川帥宮

同参謀

正親町中將

西四辻大夫

西郷吉之助

林 玖十郎

錦旗奉行

穂波三位

河鱒大夫

同持手

平岡掃部権助

上田右兵衛大尉

河野宮内大録

山中右近番長

山本左近府生

橋本左近番長

三沢右近番長

橋本伊勢介

富島左近將曹

改為

東海道先鋒兼鎮撫使総督

庭田 民部少録

同副

同参謀

改為

東山道先鋒兼鎮撫使総督

岩倉 大夫

岩倉 八千丸

同副

同参謀

乾 退助

宇田 栗園

北陸道先鋒兼鎮撫使総督

改為

同副

同参謀

奥羽鎮撫使

同副

同参謀

海軍総督

同参謀

高倉三位

四条大夫

小林柔吉

津田山三郎

九条大納言

沢三位

大山格之介

世良周助

聖護院宮

庭田大納言

中山前中將

伊東外記

増田左馬進

右之通、被

仰下候事、

明三日、太政官代行幸御先回被

仰下候、御承知ト存候得共為念申入候也、

二月二日

俊政

薩摩少將殿

今般御一新ニ付、明後三日辰刻、二条城太政官代江御親

臨被為在候旨被

仰出候事、

但

行幸之義、総而御輕便ヲ主と被遊、月中數ケ度

御親臨之

思召ニ候間、猥リニ供奉等不相願、兼而申達候事、

於武官モ供堂上同様、侍二人僕兩人可召連事、

二月朔日

御通筋堺町御門ヲ二条通

御順路

追卯刻無遅々先可令参 朝給候也、



今度慶喜以下賊徒等江戸城江遁レ、益暴逆ヲ恣ニシ、四海鼎沸、万民塗炭ニ墮ントスルニ忍ヒ給ハス、

穀断ヲ以 御親征被

仰出候、就而は御人撰ヲ以被置大総督候間、其旨相心得、

畿内七道大小藩各軍旅用意可有之候、不日軍議 御決定

可被

仰出

御旨趣可有之候間

御沙汰次第奉命馳集ルヘク候、宜諸軍戮力、一同勉勵可

尽忠戦旨被

仰出候事、

二月三日

薩州江

右東山道先鋒被

仰付、二月十五日限、惣督

本陣江会軍被

仰出置候得共、別紙休泊通ニ而、来ル十三日より出立、同十八日迄ニ会軍可有之候事、

二月九日

御親征出兵休泊附

京都

大津 休

草津 泊

守山 休

武佐 泊

愛知川 休

鳥居本 泊

醒ヶ井 休

今須 泊

垂井 休

大垣 泊

以上、

仰付候事、

先鋒

出張藩々

此度

御親征ニ付、各藩人数ニ応シ医師召連、陣営ニて各医打  
寄病院相立、療治之手当可致候様可相心得  
御沙汰候事、

二月

来ル十一日当地出立、別紙休泊通ニ而桑名江会軍可致候  
事、

薩州

二月七日

御親征出兵休泊附

京都

大津 休

草津 泊

石部 休

水口 泊

土山

坂ノ下 休

関

龜山 泊

薩摩少将

此度

御親征被 仰出候ニ付、其藩持合之軍艦一艘 御用被

仰付候条、諸事総督之指揮を請け勉勵可致

御沙汰候事、

二月六日

但二月十五日廿日迄之間、兵庫港江着碇之上、早速大

政官代軍務局江届出候様被

庄野

石薬師

四日市

桑名

泊

藩江

薩摩少將

今般

御親征被

仰出候ニ就而は、東海・東山兩道之先鋒被仰付候条、国力相当人数差出、諸事総督之指揮ヲ請令勉勵候様

御沙汰候事、

二月六日

但十五日迄ニ東海道ハ桑名江、東山道ハ総督本陣江

出張可有之様

御沙汰候事、

征東出張

一銃隊・砲隊之外用捨之事、

一隊長・司令・輜重掛等、実地要務之外冗官用捨之事、

但其主人之義は在京不苦候事、

一無用之衣類・雑具等持參用捨之事、

右之通被 仰出候条、総督所は勿論

大政官代軍務掛江別紙雛形之通、早々附出候様

御沙汰候事、

二月六日

海陸軍務局

雛形

一銃隊何人

一右役付何人

一砲何挺

一右司令・砲手共何人

一持夫何人

一以上何千人

右は今般何々道出張申付候分、前書之通御座候、以上、

何之何某

一銃隊三百拾三人

一砲五挺

一右司砲手三拾六人

一小荷駄付役人拾五人

一陪卒・大工夫百人位

一以上四百六拾四人

外<sup>二</sup>一持夫百人位

一小荷駄四拾疋

右式行中途駅之雇人馬

右東海道

一銃隊三百拾三人

一砲五挺

一右司砲手三拾六人

一小荷駄付役人拾五人

一陪卒・大工夫百人位

外<sup>二</sup>一以上四百七拾二人

一持夫百人位

一小荷駄馬四拾疋

右式行中途駅之雇人馬

右東山道

右は今般東海道・東山道出張申付候分、前書之通御座

候、以上、

二月八日

薩摩少将

同九日御達

東海

東山 兩道

出張之藩々江

今度

御親征ニ付諸藩兵隊道中通行之節は、休泊共駅々ニ而兵糧設置ニ相成候事、

東海道

惣軍兵糧

小荷駄方

東山道

同上

松平刑部大輔

石川宗十郎

市橋下総守

松平範次郎

但休歇

右之通、忝人ニ付手当可有之候事、

同九日

先頃御制度御改正ニ付、諸藩宮門警衛被 仰付置候、銘

々旗幕並ニ挑灯等ニ至迄菊御紋相用候様、且追討被

仰付候諸藩、以来一隊ニ一流ツ、菊御紋御旗被下候間、

家々にて可相調旨

御沙汰ニ相成候得共、右

御沙汰は御取消ニ相成、以来追討被 仰付候出兵之向へ

は、

朝廷ヨリ御旗御渡ニ相成候旨、更ニ被 仰出候事、

同九日

一白米四合

一金沓朱

但泊駅

一白米貳合

一錢百文

今般

同九日

朝政御一新ニ付而は、万民御撫恤之儀は専務之処、当今御国内御多事之折柄ニ付、自然安民之道等閑ニ相成候際

ニ乗し、不逞之徒妄ニ四方ニ奔走し、名を勤王ニ仮り、良民を欺罔して金穀を貪り、残忍ニ民力を致駆役等、甚以御撫恤之

御趣意ニ致齟齬候義も多分可有之候間、民間之於苦情は仮令

朝政ニ触候事ニ候共、聊無忌憚可申出候、尤領主・地頭等ニ於而も、厚

御趣意を以民間より訴出候節は、速ニ太政官代江可致言上候、猶又差掛り候件々、左之通被

仰出候旨、領主・地頭より厚相諭候様可致候、

但従前之弊習を迫て言路擁蔽之事も難測候間、民間之者より直々

大政官江訴出候義も勝手次第之事、

一五畿七道諸宿駅之義、是迄逆も印鑑無之者ハ繼立申間敷管候処、近来宮・堂上家来杯と唱、印鑑引合無之而已ならず、無賃錢ニ而人馬繼立剛談仕候者有之趣、以之外之事ニ候間、以来印鑑引合無之、且賃錢跡払等ニ

而ハ決而繼立申間敷事、

辰二月

同八日

一毎月廿九日

先帝御忌日ニ候条、諸藩士以上参候貢獻被指止之、尤雜人以下ハ勝手次第たるへき事、

一服忌之儀、官武一途を以追々

御改定可被仰付管ニ候得共、先即今之処、是迄之通

取行可申事、

一以来松平称号被止、本氏可称之事、

但本姓松平唱来候者ハ如何可相心得事、

鷲尾侍從

参与被

仰付候事、

正月

御内儀并口向取締役被

仰出候事、

大原宰相

仰付候事、

正月廿五日

戸田大和守

同廿九日

沢前主水正

御台所御用并口向取締役被

仰出候事、

九州鎮撫惣督被

仰付候間、為心得申達候事、

但九州諸藩廻達候事、

二月五日

一太政官代是迄被用九条家候得共、從明廿七日以二条城

太政官代ニ被用候事、

東征御進軍可被為在ニ付、大御軍議被 仰出候、依之去

廿八日、將軍宮御帰路被為在候、此段申達候事、

二月二日

一参与役所同城内ニ被設候間、惣而是迄通取扱候事、

正月廿六日

將軍宮

醍醐大納言

東園中將

今度東征御進軍可有ニ付、大御軍議被為在候間、早々御

帰路可有之被

参与御役被

滋野井公寿

大原俊実

今度東征大軍議被為在候ニ付、一先上京可致被仰出候事、

正月廿七日

大政官代下馬之事

一総裁官・堂上・諸大名以上、四脚門於柵門外ニ下乗札有之、右之処ニ而下馬之事、

一非藏人・諸官人以下藩士ニ至迄、惣門外下馬札之処ニ而下馬之事、

下乗之事、

一親王・相丞、車寄切石之上、

一堂上・大名、四脚門外、

一非藏人・諸官人・藩士、惣門外、

正月

制度寮

肥後江

九州筋浮浪良士之輩、元花山院家理之寡ニ応シ、所々屯

集不法乱妨之所業も有之趣相聞得、以之外之義ニ候、固

り勤 王正義之士トシテ貨財ヲ奪、人民ヲ苦メ候事、決

而有之間敷事ニ候得は、篤と吟味ヲ遂、右等狼籍之輩ニ

於而は嚴重所置ヲ加へ、九州鎮撫総督江可申出候事、

是迄以学習院金穀出納所并會計事務裁判所ニ被用候処、

從今廿七日二条城内ニ被設候間、惣而是迄之通取扱候事、

正月廿七日

二月四日

備前家老日置帶刀、去月十一日神戸通行之砌、外国公使

ニ対シ発砲致候ニ付、猶以公法御所置、号令致候士官死

罪、帶刀謹慎被 仰付候間、為心得申達候事、

二月八日

内藤備後守



伊東左京大夫

秋月長門守

島津淡路守

宗対馬守

右触下被 仰出候事、

二月九日

諸道宿駅取締

藩々江

一 京都より出先礎陣迄、別紙之通休泊定被仰付候条、銘々引請之駅々江番兵を置、諸兵通行之用便を調へ、諸事を監督すへし、万一就御用通行之面々、猥りニ権威を張り粗暴之振舞於有之は無用捨召捕へ、大政官代刑法局江可申出候、自然手ニ余り候節は打果候而も不苦候事、

一 器械・彈藥運輸之便利ヲ整へ、長陣ニ堪る覚悟肝要之事、

一 礎陣ハ勿論、休泊等兵糧之貯肝要之事、

一 宿陣所等不自由之義ハ、出陣之常ニ付銘々可相弁は勿論之事ニ候条、諸事簡易仕向ケ被 仰付候事、

一 駅々通行之兵隊江給候米穀は、其方御用ニ而取計置可申、跡ニ而

右今般

朝廷より金穀共被下置候事、

御親征被 仰出、就而は前書之条々宜相守、冗費を省キ万民之疾苦ニ不立至候様、精々可致心配

御沙汰候事、

海陸軍務局

會計事務局

二月九日

一 随従士分為可二三輩、或四五輩事、

一 軍事之儀、惣而参謀委任之儀ニ付、家来之輩不可預聞之事、

但至難事、惣而示談可有之事、

一 荷物之義、精々無用之品ヲ除キ候は勿論、惣而輕便可  
為肝要事、

但伏見番兵二小隊

一 鳥羽街道江九小隊・大砲一隊

外二大砲一分隊

合小銃隊千五百人余

合大砲隊二百式拾人位

一 御所警衛 小銃二小隊二百人余

大砲一分隊

一 丹波口江一小隊百人余

右之通正月五日

御所江御届相成候事、

二月三日

一 近衛新前左大臣

鷹司前右大臣

神祇事務總督

制度寮……

醍醐大納言

久我大納言

改大坂鎮台為  
同所裁判所總督

改大和国鎮台為同所  
鎮撫總督内国事務掛

東久世前少將

宇和島少將

薩摩少將殿

二月十日

俊政

外略之

一来十四日、太政官代

御幸御光廻被

仰下候、仍早々申入候也、

一 伏見江五小隊

外二大砲・白砲半隊ツ、

一 竹田街道江一小隊

外二大砲一分隊

右何れも伏見戦争追討之上、鳥羽為救応差向候、

改兵庫鎮台為  
同所裁判所總督

沢前主水正

九州鎮撫總督兼  
長崎裁判所總督

改大坂鎮台為同所  
裁判所副總督

小松帶刀

總督局顧問

同日

一栗野左門

鈴木震吉

右内国事務掛被 仰出候事、

大坂總督醍醐江附屬

同日

一中山前大納言

正親町三条前大納言

自今可為輔弼被 仰出候事、

但總裁局出仕之事、

一日本国ノ外国事務官ヨリ、今度国内改正ノ事ニ由リ普  
ク諸外国人工布告スルノ旨アリ、左ノ如シ、

徳川慶喜、朝廷ヲ欺罔シ、許謀多シテ万民服セス、国  
内殆ント瓦解ノ形アルニヨリ、止コトヲ得ス昨年政權  
ヲ帰上センコトヲ奏シ、朝廷是ヲ許容セリ、然ルニ会  
津・桑名ノ徒、政權ヲ徳川ニ復センコトヲ謀リ、更不  
可止之勢有之、在京ノ列藩ニ議シ、兼而辞退セシ將軍  
職ヲ免セリ、然レ共寬宥ノ典ヲ用ヒ、既往ノ罪ヲ咎メ  
ス、只其現今ノ官ヲ辞シ、且既ニ政權ヲ帰上セシ上ハ、  
朝廷ニテ政務用途ノ為、其是迄数国支配セシ領地ノ内  
ヨリ取調ヘ帰上セヨ、左アラハ朝廷ニテ天下ノ公論ヲ  
以確定アルヘシトテ旨ヲ諭セシニ、慶喜麾下譜代暴動  
鎮定ノ名ヲ以大坂ニ下リ、陽ニハ承引スレト更ニ恭順  
ノ体モナク、陰ニ暴威ヲ張り、籠城手配イタシ、追々  
ト京師近キ要害諸所ニ軍兵ヲ繰出セリ、加之今年正月  
三日ニ至リ、更ニ戰爭ノ用意ヲ定メ、從兵ハ言ニ及ハ  
ス、朝廷ヨリ帰国ヲ免サレシ会津・桑名数千ノ兵等ヲ

先鋒トシ、權勢ヲ以テ都下ヲ動搖シ、京師ニ突入、奸

逆ヲ遂ント決拳ニ及ヘリ、朝廷ニハ始ヨリ其反状ヲ鑑

察アリシ故、二三ノ藩兵ニ命シ是カ預備アリ、然ルニ

此挙ヲ聞キ、徳川親兵ノ藩ヲシテ是ヲ引返サシメ、若

シ用ヒスンハ防禦セヨトノ朝命ヲ預備ノ兵ニ伝フ、此

日先鋒ノ兵遽ニ銃砲ヲ備ヘ押入ヲ見テ、再三是ヲ制遏

ストイヘトモ、押テ入京セントセシ故ニ止事ヲ得ス討

撃シ、引続キ六日迄ノ連戦ニ賊軍悉ク敗績シテ、慶喜

ハ江戸ヘ遁逃セリ、素ヨリ順逆ノ理明白ナレハ、速ニ

其罪ヲ責テ東征先鋒ノ師ヲ出シ、猶亦親征ニ決定シ、

不日ニ大小ノ諸侯數十国ニ命シ、一挙シテ是ヲ伐シム、

抑方今此ノ如キ形勢ニ至リシ上ハ、国内ノ政權弥実ニ

朝廷ヘ一歸セリ、故ニ先比布告セシ如ク、以来外国交

接、大小ノ事一切ニ外国事務官ノ專任ナレハ、此旨ヲ

布告ス、諸外国人永ク是ヲ諒知シテ疑念アルコトナカ

ルベシ、

横帳原寸 縦二三・五櫃 横二〇櫃 二三枚

遺文 下参与等任命及其他ノ件

林政十郎 宇和島

右今般徴士被

仰付候事、

正月

林政十郎

右今般下参与海陸軍務掛被

仰付候事、

正月

土倉修理助 備前

海陸軍務掛被

仰付候事、

正月

内国事務掛被

学習院雜掌  
稲波丹波介

仰付候事、

右之通

御沙汰候、仍申入候、御回覽可返給候也、

正月

参与

尾

土

薩

安

細

今般

朝敵相成候面々より武器類は勿論、荷物等預置候向は品

物取揃、市中取締役所江早々可差出事、

正月十九日也、

可為徵士参与被

薩州  
小松帶刀

仰出候事、

正月

小松帶刀

外国事務掛被

仰出候事、

正月

今度賊徒追伐被

仰出、

皇威漸盛ニ被為成候ニ付而は、上親王・公卿より下非蔵  
人・諸官人ニ至ル迄、感激奮発

朝廷之御為擲身命忠勤可仕之処、傍觀座視、尺寸之功も

無之輩、剩自己之利禄ヲ貪り、私ニ大禄ヲ可賜哉抔と噂  
仕居候者も有之哉ニ相聞、以之外之事ニ候、諸家世襲之  
禄ニ至り候而は、時宜ニヨリ被為減少候共、加増被

仰付候義は無之候、但此上奉公之廉ニヨリ、功劳有之候  
向は其身限り加禄ヲも可賜義ニ候、官位ニ至り候而も、  
同様世襲之旧弊は御改革被遊、人材ニ応シ御補任可被為  
在義ニ候間、一同其心得ニ而文武之事業精々勉勵可仕候、  
従前在

朝之人々、武は唯武家之業ニ而、於

朝廷御用ヒ不被為在事ト存シ、一切致廃棄候而已ナラス、  
文芸ニ至り候而も、固陋拙劣、草莽布衣之士ニは万々不  
相及、徒ニ軟媚之風ヲ喜ヒ、上品抔ト称シ、花奢風流ヲ  
専ト致シ候ニヨリ満 朝婦人之如ク、遂ニ紀綱衰弛  
皇道陵夷ニ至り候段、実以可愧可歎之至ニ候、向後読書  
撃劍ヲ始メ、文武之大道ニ至り、且夕講究可仕、精熟之  
上は応其材夫々御登用可被為在  
思食ニ候間、無懈怠可心懸候、尤此御時節ニ至り官武之

差別無之義ニ候間、武家之輩ニ対し倨傲不遜、万一確執  
ヲ生シ候而は不容易義ニ候間、呉々可相心得、家来・下  
部等ニ至ル迄

朝廷之御威光ヲ仮り、勤

王ヲ口実トシテ、世人ヲ欺キ金穀ヲ貪り候者も可有之哉  
ニ付急度可申付候、且今度赦令被行、有罪之者も夫々寛  
大之御所置被為在候得共、尚此上怠惰悖戻之徒は不撰貴  
賤敵罰可被 仰付義ニ候間、此旨兼而可相心得様  
御沙汰候事、

右之通、宮・公卿・非藏人江向、諸官人限り被

仰渡候事、

参与

尾張大納言殿

越前宰相殿

土佐前少将殿

薩摩少将殿

安芸少将殿

宇和島少將殿

細川右京大夫殿

惣督

副使

岩倉大夫

八千丸

右は、此度東山道為鎮撫惣督下向被

仰出候、為心得申達置候事、

正月廿一日

参与

一 太政官代是迄被用九条家候得共、從明廿七日以二条城

太政官代ニ被用候事、

一 参与役所、同城内ニ被設候間、惣而是迄通取扱候事、

正月廿六日

今般御制度御改正ニ付、諸藩宮門被 仰付置候面々旗幕

并挑灯等ニ至候迄、菊御紋相用候様可仕

御沙汰候事、

但追討被

仰付置候諸藩出兵之面々、以来一隊ニ一流ッ、菊御

紋御旗被下候間、於家々可相調候、左候而家之紋相

用候儀は可為是迄之通候事、

正月廿七日

徳川慶喜反逆ニ付松平之苗字ヲ称シ居候族は、向後大小  
名共速本姓ニ復シ候様可仕

御沙汰候事、

二月朔日

薩摩少將

今般

御親征被

仰出候、就而は東海・東山兩道之先鋒被

仰付候条、国力相当人数差出、諸事総督之指揮ヲ請令勉

励候様

御沙汰候事、

二月六日

但十五日迄ニ、東海道は桑名江、東山道は総督在陣江  
出張可有之候様

御沙汰候、

此度

先鋒

出張藩々江

御親征ニ付、各藩人数ニ応シ、い師召連陣營ニ而各い打

寄、病院相立療治之手当可致候様可相心得、

(米、裏ニアリ)  
御沙汰候事

二月六日

文書原寸 縦一七種 横二六四種

通七〇 島津忠義公日向国旧幕領支配ノ件

黒田甲斐守

右筑前国元郡代窪田治部右衛門支配地、今般

御領と相成候間、取締被

仰付候、即今形勢ニ付、民心方向ヲ失ヒ多端之苦情訴出、

御治定之 御所置ハ追而

御達可有之候得共、差向人民安業、貢米等之義無滞相運

候様取計、早々大政官代江可申出候事、

但取締被 仰付候

御領之内、年貢残穀并高辻帳早々取調、内国会計両

裁判所江可差出事、

一御領所用向為取扱候役人、兩三人ツ、在京候様可致事、

一駅々乱妨強盜は、人民を悩シ困苦ニ迫り候場所も有之

由相聞得候間、早々人数差出取鎮候様被

仰付候事、

奥平大膳大夫

右、豊前国元郡代窪田治部右衛門支配、已下同断、

但書同断、



中川修理大夫

久留島伊予守

右、豊後国元郡代窪田治部右衛門支配、已下同断、

但書同断、

但書同断、

文書原寸 縦一六・八釐 横七七・八釐

遺宅ニ 大中小藩ヨリ徴士貢士拔擢ノ件

一自各藩徴士被 仰付候者、奉

命即日ヨリ朝臣ト相心得、勿論旧藩ニ全ク関係混合無

之

御趣意ニ候間、此旨厚相心得可申事、

二月

右、肥前国元郡代窪田治部右衛門・元代官高木作右衛門

支配地、已下同断、

但書同断、

松浦肥前守

深溝主殿頭

細川越中守

右、肥後国元郡代窪田治部右衛門支配地、已下同断、

但書同断、

二月七日大政官代より御達

薩摩少将

右、日向国元郡代窪田治部右衛門支配地、已下同断、

諸藩より江戸開成所江拔擢、又は雇ニ相成居候者、名

元取調、早速弁事役所江申出候様被 仰出候事、

一大藩 但四十万石以上ヲ唱、

一中藩 但十万石以上三十九万石ニ至ルヲ唱、

一小藩 但一万石以上九万石ニ至ルヲ唱、

右之通、諸侯石高ヲ以三等區別相立候様被 仰出候事、